

平成 29 年度
全国公共図書館研究集会
(児童・青少年部門)

報告書

研究主題 『一人ひとりの子どもの読書活動を支援するために
- 子どもを取り巻く環境・地域と図書館 - 』

期日 平成 30 年 1 月 18 日 (木) ・ 19 日 (金)

場所 大阪市立中央図書館 5 階会議室

(大阪市西区北堀江 4 - 3 - 2)

主催 公益社団法人日本図書館協会

近畿公共図書館協議会

大阪公共図書館協会

平成 29 年度全国公共図書館研究集会 (児童・青少年
部門) 実行委員会

主管 大阪市立中央図書館

目 次

開催要項	2
基調講演	4
子どもの最善の利益を考える～子どもの生活実態を知っていますか～	
大阪府立大学地域保健学域教育福祉学類 教授	山野 則子
事例報告1	17
笑顔いっぱい、絵本いっぱいの東淀川～地域の中の図書館の活動から～	
おはなしボランティアとことこ 代表	渡邊 裕美子
大阪市立図書館の児童サービスについて	
大阪市立東淀川図書館 館長	角田 人志
事例報告2	21
絵本の楽しさをもっともっと！～年齢も障がいのあるなしも関係ない！～	
絵本いろいろの会 絵本あれこれ研究家	加藤 啓子
事例報告3	27
地域まるごとを子育て支援拠点に～乳幼児から高齢者までがつながる～	
特定非営利活動法人ハートフレンド 代表理事	徳谷 章子
基調報告	32
児童サービスの現状と課題	
公益社団法人日本図書館協会児童青少年委員会 委員	杉岡 和弘
講演・ワークショップ	35
地域・社会で子どもをはぐくむ～読書活動を通して考える～	
武蔵大学人文学部 教授	武田 信子
全体会	45
テーマ：「子どもたち一人ひとりが心豊かに育つために、図書館は何ができるか」	
コーディネーター：尾崎 安啓氏	
パネリスト：	武田 信子氏 渡邊 裕美子氏 角田 人志
	加藤 啓子氏 徳谷 章子氏

平成 29 年度全国公共図書館研究集会（児童・青少年部門）開催要項

研究主題

『一人ひとりの子どもの読書活動を支援するために - 子どもを取り巻く環境・地域と図書館 - 』

1 趣 旨

子どもが言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、想像力を豊かなものにしていくうえで読書は欠くことのできないものであり、「生きる力」をはぐくみ、人生を豊かにしてくれます。「子どもの読書活動の推進に関する法律」（平成 13（2001）年 12 月 12 日法律第 154 号）では、基本理念として、「すべての子どもがあらゆる機会とあらゆる場所において自主的に読書活動を行うことができるよう、積極的にそのための環境の整備が推進されなければならない」としています。図書館の児童への貸出冊数の増加、読み聞かせボランティアの増加、全校一斉の読書活動の普及など、取組みの進展がみられる一方で、成長するにつれて読書離れが進む傾向や地域により取組みの差が顕著などの課題も指摘されています。本研究集会では、現在の子どもが抱える環境要因・社会問題についての理解を深めるとともに、さまざまな「場」での子どもの読書活動に関わる実践から図書館の児童サービスを見つめなおし、「一人ひとりの子ども」の読書活動を支援するために、地域の中で図書館に何が求められているかを考えます。

2 主 催

公益社団法人日本図書館協会

近畿公共図書館協議会

大阪公共図書館協会

平成 29 年度全国公共図書館研究集会（児童・青少年部門）実行委員会

3 主 管

大阪市立中央図書館

4 後 援

大阪府教育委員会、大阪市教育委員会

5 日 時

平成 30 年 1 月 18 日（木）～ 19 日（金）

6 場 所

大阪市立中央図書館 5 階会議室（大阪市西区北堀江 4 - 3 - 2）

7 参加者

図書館職員、生涯学習施設職員、生涯学習に関わる行政職員、教職員（幼稚園、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校）、保育所職員、PTA 会員、子どもの読書活動支援ボランティア等

8 日程及び内容

	日 時	種 別	内 容	講 師 等
1 月 18 日 (木)	12:00～13:00	受 付	-	-
	13:00～13:20	開会行事	-	-
	13:30～15:00	基調講演	子どもの最善の利益を考える～子どもの生活実態を知っていますか～	大阪府立大学 地域保健学域 教育福祉学類 教授 山野則子
	15:00～15:15	休 憩	-	-
	15:15～15:45	事例報告 1	笑顔いっぱい、絵本いっぱいの東淀川 ～地域の中の図書館の活動から～ 大阪市立図書館の児童サービスについて	おはなしボランティア とことこ 代表 渡邊裕美子 大阪市立東淀川図書館 館長 角田人志
	15:45～16:15	事例報告 2	絵本の楽しさをもっともっと！～年齢も障がいのあるなしも関係ない！～	絵本いろいろの会 絵本あれこれ研究家 加藤啓子
	16:15～16:45	事例報告 3	地域まるごとを子育て支援拠点に ～乳幼児から高齢者までがつながる～	特定非営利活動法人ハートフレンド 代表理事 徳谷章子
	16:45～17:15	基調報告	児童サービスの現状と課題	公益社団法人日本図書館協会 児童青少年委員会 委員
	17:15～17:30	事務連絡	-	-
	17:30～18:00	移 動	-	-
18:00～20:00	交流会	-	-	
1 月 19 日 (金)	09:40～11:10	講演・ワーク ショップ	地域・社会で子どもをはぐくむ～読書活動を通して考える～	武蔵大学 人文学部 教授 武田信子
	11:10～11:20	休 憩	-	-
	11:20～12:30	全体会	研 究 討 議 (パネルディスカッション) テーマ：「子どもたち一人ひとりが心豊かに育つために、図書館は何ができるか」	コーディネーター： 寝屋川市立中央図書館 館長 尾崎安啓 パネリスト： 武蔵大学人文学部 教授 武田信子 おはなしボランティア とことこ 代表 渡邊裕美子 大阪市立東淀川図書館 館長 角田人志 絵本いろいろの会 絵本あれこれ研究家 加藤啓子 特定非営利活動法人ハートフレンド 代表理事 徳谷章子
	12:30～12:40	閉会行事	-	-
	(この間 各自昼食等)			
14:00～15:00	見 学	大阪市立中央図書館見学 (希望者のみ)	大阪市立中央図書館	

< 基調講演 >

「子どもの最善の利益を考える ～子どもの生活実態を知っていますか～」

大阪府立大学 地域保健学域 教育福祉学類
教授 山野則子

皆さん、こんにちは。ただ今ご紹介いただきました大阪府立大学の山野と申します。90分という時間ですけれども、皆さんと一緒にいろいろ考えられたらうれしいなと思っています、どうぞよろしくお願いいたします。



資料の2枚目に私のプロフィールが書いてあるんですが、大阪府や大阪市の子ども施策審議会とか、子どもの貧困対策の検討会や計画策定部会など、地元の大阪府や大阪市の子どもの施策に関わらせていただいています。

今日の午前中も、実は今も駆け込みぎりぎりセーフだったんですが、門真市に行っていました。大阪府が貧困対策のモデル事業で門真市と提携して事業展開をしているんです。9月30日には、ある中学校でシンポジウムをして500人が集まられたんです。門真市の市民、住民の方を巻き込みながら、今日のパワーポイントにあるようなものもお見せしながら、時間は短かったですけれども、貧困の問題をみんなで考えようみたいな旗揚げのパネルディスカッションをして、その後、秋から貧困対策の施策が門真市では動いているところです。

後で図書館のお話もしますが、皆さんは全国各地から来られていると思うんですけれども、そんなふうにいるいろいろな取り組みが各地で始まっていますので、ぜひ地元で、「これやったらできそうかな」とか、「あっ、こんな見方があるんだな」とかっていうことを、もちろん新しいことだけじゃなくて、今思っておられることとか、もうすでにやっておられることとかを、リフレーミングというんですけれども、もう一度枠付け、枠をつくり直して、お持ち帰りいただいて、自分たちの実践の現場で何か取り組んでいかれたり、今やっておられる取り組みがこれでいいんだっていう勇気づけになったらうれしいなというふうに思っています。

私自身は、内閣府の貧困対策の大綱をつくる委員もさせていただいて、その後有識者会議にも参加しています。また、文部科学省の中央教育審議会の委員とか、

厚生労働省の社会保障審議会の委員もこの秋から入らせていただいて、今すごく思うことは、子どもの実態について、文科省、厚労省、内閣府と施策がばらばらです。皆さんがご担当されている図書館、生涯学習、公民館にしても生涯学習とか社会教育の部門で、なかなか子どもの非行とか虐待とかっていう生徒指導のところや学校教育とはリンクされていないのではないのでしょうか。あるいは福祉の虐待対応とかともリンクされていなかったりしてもったいなさみみたいなのを非常に感じています。たまたま私は内閣府や厚労省や文科省の委員に入らせていただいているので、国に対しても実践現場に対しても一生懸命横串を刺そうと思っているし、働きかけているところです。

ちょうどタイミングがあと1週間後ぐらいなんですけれども、『つなぎびと』っていうニューズペーパーをつくっているの、もしよろしければ、また何らかの形で皆さんの手元に届いたらと思います。そこで、今日私がお話するようなことのもうちょっと行動レベルのところ、実践のこととかの特集があって、つなぎびと、っていう形で、まさに横串を刺していく活動の報告を書いております。ぜひ、またどこかで目にさせていただいたらと思います。

前置きがあんまり長くないようにしますが、昨日、生命保険協会の年1回の総会がありました。全国から集まる役員会みたいなものですが、そこが補助金というか、寄付金みたいなのをくださって、全国発信のペーパーをつくってどんどん全国に発信してくださいと言われました。生命保険の企業の方はすごく熱心で、熊本とかいろいろなところから15人ぐらいの役員の方が来られていて、ぜひ、生命保険の会社とも手を組んでいきたいと思いました。皆さん方も、図書館というの、一つのアクターとして、企業とか学校とか、いろいろなところがつながって行って、市民から見たり、子どもから見たときにつながっているような仕組みになったらいいというのが私の願いと夢でございます。そのために、いろいろ動いているんだというイメージで聞いてくださったらと思います。

では、パワーポイントに沿ってお話をしていきたいと思うんですが、テーマが「子どもの最善の利益を考える」です。図書館の方とか教員の方、教育委員会の方等がいらっしゃるとう聞きしました、それぞれのお立場で、子どもの最善の利益というところをちょっと意識しながらお聞きくださったらというふうに思います。

まず、子どもの生活実態のお話をしたいと思います。子どもの生活実態って副題を付けたのは、貧困対策で大阪府の10万件の子どもの貧困の調査を受託しまして、昨年度1年かけてそういう調査をしました。いろいろな方から、「調査をまとめた本はまだなのか」と

いっぱいお尻をたたかれています、本を出そうと思っていますので、またどこかで見ていただけたらと思います。

貧困の実態もそうなんですけれども、まず、子どもの孤立、親の孤立というところから皆さんにお伝えしたいと思っていて、セットになる話なので、ちょっとここに着目してください。どういうことかという、「近所でお話しする人がいますか」という質問なんです。

皆さんに聞いてもいいですか。例えば、回覧板を持っていったときに、「ああ、今日はいいお天気ですね」とか、近所、スーパーでお会いしたときに、「こんにちは」って声を掛けるそういう人、メールとか LINE とか、携帯電話でお話しするお友達ではなくて、近所の井戸端会議するような人ですね。近所にお話しする人がいる方、手をあげていただけますか。ほぼ全員の方、手を挙げられましたか。これ、学生に聞くとこの調査の数値に近くなります。さすが皆さんは意識の高い人ですね。

これはどういうことかといったら、15年前の調査なんです、4カ月の赤ちゃんをお持ちの方で、「近所でお話しする人がいない」と答えた人がその20年前では15.5%だったのが、このときで34.8%。つまり、この当方で、20年で2倍になっているんです。これは、学年の3分の1の人が近所でお話しする人がいないということになるんです。学校などで私も子育て支援をしていて、地域の子育て支援センターとか学生とよく行かせてもらってますけれども、もうだんだんひどくなってきています。ひどいというのは、お母さんたちが集まっているところで「近所でお話しする人が何人かいる人」って聞いたら、20人いらっしゃるお母さんの中で2人しか手が挙がらなかった。これ、先ほどの15年前の調査で30%出ていましたけれども10%の地域もあるということですね。もうどんどん深刻になっています。

私の家の近所でも、井戸端会議をしているっていう姿が見えなくなりました。皆さんはどうですか、近所で見られますかねえ。私のところも赤ちゃんの声は聞こえるんですけども、お母さんたちが集まっていることはなくなりました。

こんなことをまず知っていただきたいんです。貧困問題と孤立というのは重なってきますから、どんなことになるか。皆さんはまだピンと来られないかもしれませんが。私は1995年に地元で子育て支援ネットワークを立ち上げました。そのとき私が働いていたところの近くに図書館がありましたので、図書館の方にも一緒にいろいろ協力していただきました。そのころは、男性の方に「子育てを支援せなあかんというのは

全然分からない。」と言われ、「支援しなくても普通にできるでしょう。」「子どもが生まれてみんな親になって、当たり前になっていくんじゃない。」みたいな雰囲気だったのが、今はずいぶん変わったと思います。やっぱり子育ては孤立しているからなかなか難しいわけなんです。

例えば、赤ちゃんのおしっこが水色だと思っていたという方がおられて、小学校1年生の先生との懇談会で初めて知ったって聞きました。なぜかわかりますか、紙オムツがコマーシャルでは水色になりますよね。だから、立っておトイレに、ちゃんと自分でおむつが外れて行けるようになったら、黄色になるって分かっておられるんですけども、赤ちゃんの間は水色だと思っていたそうです。そんなこと「えっ？」って、皆さんは思うでしょう。別の例ですが、1歳半の子ってひっくり返って怒ることありますよね。しかしお母さんの研修をしたとき、手を挙げて、「1歳半でひっくり返って怒るので、病院へ行ったほうがいいですか。」って質問されました。びっくりしますよね。駄々こねって、1歳半では当たり前なんです。

そんなことが、これは特別な方になって皆さんは思われるかもしれませんが、そんなことない、熱心に研修に来られる方ですし、懇談会でも先生と普通にしゃべっている方です。だから、この30%の孤立している層の人が今もっと広がっているかもしれませんがよってという話です。その人たちは、ほかの人の子育てを、生もの子どもを見ずに、ネットだけで情報を知って、子どもがそのまま大きくなっていくということなんです。

大阪では厳しい話があつて、私も関わっている箕面市で虐待の事件が年末にありましたよね。そこまでひどい状況になっていたのがなぜわからなかったのかって皆さんは思うかもしれませんが、そんなことが落とし穴だったりします。孤立があんまり分からないからです。誰も「私、孤立しています。」って名札を付けていませんよね。だから、外からはわかりません。

先ほどお話しした、私が大学の学生を連れて行った時に聞いた、話せる相手がいる人が20人中2人しかいなかったっていうときも、あとの18人の人が、じゃあ、変な人かっていうとそんなことない、きれいに着飾っておられるし、しっかりスタッフと話されていて、でも、よく観察したら、先生としかしゃべっていない、自分の子どもとしかしゃべっていないんですね。

だから、皆さんも図書館で何か企画されたりイベントをされるときに、受講されている親と図書館の方っていう、この1対1関係じゃなくて、お母さん同士がつながるような、何かそんなプランをぜひ実施してい

ただきたいなっています。

アカデミックカフェといって、大学の先生がいろいろ登場するイベントがあって、2年前の12月に私が担当で子どもの貧困についての会をしました。アカデミックカフェというのは、I-site なんばっていう大阪府立大学の図書館みたいな場所があるのですが、そこに誰でも自分の気になる本を、私の会は「子どもの貧困」というテーマでしたが、自分の気になる本を持ってきて、ディスカッションするんです。めちゃくちゃ面白くてわくわくしました。全然知らない人が集まって、なぜ、この本に興味を持ったのかとか、みんなで話するんです。共感したり輪ができてたりして、リタイアされた男性の方とかもたくさん参加してくださって、すごく楽しかったです。

そこをきっかけに市民大学につながった人もいっぱいいるんですよ。だから、図書館は人と人をつないでいくきっかけにできる場だと思います。こんなに親が孤立している状況ですから、特に、子どもにとって、絵本とかによって、人がつながるきっかけになることができるパワーがある場所だと思います。すごく魅力的です。

孤立がなぜ問題かという、育児負担感って言われますけれども、不安だとか、誰ともしゃべれないとか、いらいらするとか、いろいろなことを聞いているんですけども、因子分析をして固まったのが育児負担感だったんですね。育児負担感というのは、不適切な養育に直結してしまいやすいということなんです。

こんなふうに誰ともしゃべれない環境にある人も、友達はいらっしゃるんですよ。何回も言いますが、LINEや携帯電話でやりとりするお友達はいます。だから、お友達がいらない人ではない。孤立しているというのは、閉じこもって暗い人ってイメージされるかもしれませんが、そんなことはないです。きれいに着飾って、明るくて、シャキシャキしゃべれます。でも、交流がない、近所で子ども連れの交流がない、そういう人だと思ってください。それが30%もいるということです。

その人たちが虐待にいく可能性があるということ、必ずいくとは言っていないんですが、不適切な養育に行く可能性があるということなんです。だから手を打つ必要があり、そこに図書館とか、学校とか、いろいろな立場、社会教育の立場の方とかがいることができることがあります。この場には子育てサークルとか子育てのひろばとかの活動やNPOとかをされている方もいると思うんですけども、皆さんができることは、学校とつないだり、高校生とか、今の親じゃなくて次に親になる人、高校生の人とか、中学生の人と合流する、交流するという場をつくってあげることなんです。

図書館のイベントでもいいと思います。皆さんは本

が武器ですから、本を媒介にして高校生と赤ちゃんに触れ合おうみたいなイベントも高校生にとってもすごくいいということなんです。虐待予防にもなります。つまり、育児体験がある、そうやって赤ちゃんのお世話をしたことがある、おしめを替えたことがある、遊んだことがあるっていう経験のある人は育児負担感が低かったんです。有意差がありました。育児負担感が低いと不適切な養育に行きにくいということ。ぜひ、この体験をつくる、異年齢で交流するイメージですね。それを、本をキーワードにできれば、私はすごくすてきだと思います。先ほどお話ししたアカデミックカフェもそうでした。大学生も来たり、高校生も来たりですよ。上は70歳ぐらいの方も来られて、まさに異年齢の交流でした。そんな場を、本を使ってつくれるんじゃないかと思っています。

また、代わりにお留守番をすとか、病院へ代わりに行っておけるとか、手段的サポート、代わりの人の資源を持っている人は有意に育児負担感が低かったんです。これはNPOの活動だとかでお母さん同士がつながるといことは、どういういいことがあるかといったら、その人をお願いして買い物に行ったりできる相手ができるというわけですね。

だから、できれば、私がいつも言わせていただくのは、イベントをするときに、町ごとで集めていただきたいです。「グループごとで感想を言い合いましょ。」でもいいですし、「好きな本を持ってきて、みんなで紹介しましょ。」でもいいですよ。そのグループワークを町単位でやってみてください。そうしたら、近所の人があるところに座るので、そうしたら、「病院へ行くからお願いわね。」っていう関係ができます。例えばここは大阪西区ですが、ここ1か所しかないイベントだと、各地から電車に乗って、バスに乗って来られるからそれが難しくなります。だから地域でぜひ、それぞれの分館というんでしょうか、地域の図書館なんかでやると効果があると思います。知り合っていたかということが重要だということです。それが、「代わりに、じゃあ、お留守番しておくわね。」とか、「代わりに病院へ行ってあげるわ。」とかにつながります。私も、ご近所のおかげで、仕事をしながらずっと子育てできましたから、保育園へ代わりに迎えに行ってくれたりとか、お風呂を入れ合いっこしたりとか。そんな関係が近所でできるかできないかは、もう全然違いますよね。ぜひ、そんなことを意識してください。

今日の本題にも近いところですが、子どもの貧困ということで、さっき言いました調査をさせていただいたんですけども、貧困というものの考え方をちょっと皆さんに一遍聞いてみたいと思うんです。また挙手いただけますか。

4 つのことを聞きます。これは、子どもに絶対必要だって思ったら手を挙げてください。これは子どもに必要なものだって、子どもに必需品だと思ったら手を挙げてください。



まず1番、毎日の晩ご飯、これは必要だって思う人。ありがとうございます、これはほぼ全員ですね、ありがとうございます。じゃあ、2番、自転車、子どもの自転車、これは必要だと思う人。ありがとうございます、うんと減りましたね。10分の1くらいですかね、さっきはほぼ全員でしたので少なくなりました。3番、お誕生日のプレゼント、子どもにとって絶対必要だと思う方、ありがとうございます。9割方ですかね。じゃあ、最後、家族でお出かけ、テーマパークへ行くとか、家族でお出かけ、ちょっと減りましたか。8割か9割かということですか、ありがとうございます。

大体皆さんは手が挙がったんですが、自転車は何で少なかったのか、ちょっと聞いてみたくなりました。皆さん、大阪の街中に住んでおられて自転車は要らないですか、そんなことはないですか。私の友達で梅田と難波に住んでいる人は自転車を持っていなかったですね。天王寺ぐらいだったら要りますよね、この差は何でしょう。何となくちょっと分からないんですけども、この4つのことについてちょっと説明しますね。

必需品について調査をすると、古いですが、日本という、以前は1番しか手が挙がらなかったんですよ。私も3年ぐらい前からずっとお聞きしていますが、だんだん1番以外も挙がってきました、3年前は1番しか手は挙がらなかったです。だから、やっぱり世論調査と一緒にだと思っていたんです。だけど、だんだん増えてきて、今日手が挙がらなかったのはほとんど自転車だけですから、すごい変化だと思います。

ちょっと考えてほしいんですが、これ、物が無いということなんです。お金が無い、物が無い、自転車がないということなんです。自転車がないとどうなるか。今日の私のテーマは、「子どもの最善の利益」なんです。子ども中心に考えていただいけますか。子どもにとって自転車がないとどうなっていくかっていう話なんですけれども、大体ギャングエイジといって4年生ぐら

いになったら遠出したくなります。校区外へ出てはいけませんよっていうルールがありますけれども、ちょっと遠くに出かけたくなる。「じゃあみんなで、自転車で、4時半にアップル公園へ集合ね。」とやって集まるんです。自転車を持っていない子はどうなると思いますか。自転車を買ってもらっていない子は行けないんです。もう一つ問題があって、今日はあんまり話せないかもしれませんが、私は学校文化と、恥の文化と戦っている毎日なんですけれども、日本には恥の文化とか貧困に対するスティグマがあります。つまり、自転車がないということを子どもは言えないんです。恥ずかしい、自分だけ持っていない、みんなは持っているってなったら黙って行きません。黙って行かないとどうなるかと言うと、「あいつ、付き合い悪いやつやな。」って、「もうあいつ、これから呼ばんとこ。」ってなりますよね。

となっていくと、だんだんお友達がなくなります。ソーシャルキャピタルというのは社会関係の資本です。つまり、子どもからいうとお友達、大人でもネットワークはお友達関係ですよ。自転車がないことで友達がなくなっていくということなんです。友達に付き合い悪いっていじめられたり、仲間外れにされたりしていきます。そうなるとうどうなるかと言ったら、学校へ行きたくなくなります、やっぱり。そうすると、子どもは学校、登校拒否になったり、家で引きこもってしまいます、そうすると、どうなるかと言ったら、ヒューマンキャピタル(人間資本)の欠如につながります。ヒューマンキャピタルとは、学力とか、体力、健康とか、自分自身が持っている資本のことです。それがアウトプットできるということも合わせてです。そうすると、自転車がないということが、実はこんなふうになっていくんだということなんです。だから、貧困というのはお金がないことだけが問題ではなくて、こんなふうにいるいろいろなキャピタルが欠如していくことを言います。

これも知っておいていただきたいことですが、相対的貧困か、絶対的貧困かという議論を聞かれたことはあると思うんですけども、絶対的貧困というのは、お金を持っているか、持っていないかという話ですよ。例えばバッシングをよくされている生活保護家庭について私が大阪で請け負った調査で、スマートフォンを買い替えられるかっていうことを聞いたんです。そうしたら、すごいバッシングを受けました。学生が、「山野先生、またネットに書かれているよ。」って教えてくれました。スマートフォンを持っているなんていうのは貧困じゃないって、貧困なくせにスマートフォンを持っているなんてぜいたくだ、みたいな理論なんですよ。これは絶対的貧困の考え方なんです。

でも、よく考えてください。自分は持っているのに

人が持っていたら、それはぜいたく品だ、っていうのはすごいエゴですよ。貧困だからって持てはいけないんですか。昔、生活保護家庭の方が、クーラーを付けてはいけないというのでお亡くなりになったり、いろいろな事件があって、人権の問題になりました。それと同じことです。

だから、世間の人々が一般的標準的に持っているものを持っていなかったらしんどい、ということなんです、この自転車の話もそうです。世間一般の標準、それが相対的貧困、一般で標準的世帯が持っているものを持ってないとしたら、買えないとしたら、それはやっぱりしんどいっていう、それが相対的貧困の考え方です。

ついでに言うと、今回のテーマからは少しそれますが、スマホがないと、今就活できないのです。学生にどんどんメールとかネットの情報が来るから、すぐに「行きます」ってアプライしないと置いていかれる。だからスマホがないと就活に生き残れない、家へ帰ってからパソコンを広げて見ていたら遅いっていう話ですね。

そんな理解を広めていただくために、「貧困とは」をテーマに図書館の講座などをやったださってもいいですよ。発信元を書いてくださったら全然問題ないので、ここの研修で出ていた資料だといって使っていただいてもいいですよ。これについて、皆さんはどう思いますか、みたいな感じの講座をぜひ実施してください。私もいろいろ講師を頼まれるんですけども、今朝も宵越しで朝4時まで仕事をしていたんですけども、もう幾ら体があっても足りないじゃないですか。だから、ぜひ、皆さんが地域で伝えていってほしいなって思います。これらのデータを使って伝えてくださったらいいので。図書館には人が集まりますからね。

等価可処分所得というもので貧困というのは捉えるということは決まっています。全世界共通なんです。等価可処分所得って何かと云ったら、手取り額のことです。給料をもらってもいろいろ引かれて手取りって少なくなりますよね。それを人数の平方根で割るっていうルールがあって、つまり1人頭の等価可処分所得、1人頭のお金ということ、収入ということになります。だから、人数で割るんですね。これの中央値以上というのは、中央値というのは真ん中を取るという意味です。100人いたら50番目を取るということです。だから、2年前に日本の中央値が発表されたんですが、245万円やったと思います。その245万円は、皆さんは多いと思うか、少ないと思うか、真ん中の人です。真ん中の人です。結構少ない感じもしますよね。大卒初任給で云ったら、それ、超えていることを考えたら、結構中央値がそれって少ないのかなというふうに思ったら、ちょっと自分に引き寄せて考えてください。なぜ、平均を取らないか云ったら、1人の年収と云ったら

平均500万から600万なので高い人に引っ張られるので、人数の真ん中と云ったらばらつきのちょうど真ん中ぐらいということになる、という考え方をするって思ってください。

その中央値の50%ラインを貧困ラインと呼びます。だから、245万円の半分ですから、122万円、日本の貧困ラインは122万円だというふうに発表されたのが2年前。大阪の貧困実態調査をして、大阪府のほか、参画した自治体も全部ホームページに載っています。大阪市さんは、全国よりちょっと低かったり、とかいうふうに見てみられたらいいと思います。この中央値をなぜ、都道府県ごとに出すか云ったら、物価が違うからです。なので、都道府県ごとに出すというのが本当なんです。それから、この16.3%とか、貧困率が16.3%とか13.9%とかいわれたのはご存じですよ。16.3%ってすごい話題になりました。子どもの貧困率16.3%といわれていたんです。それは何かと云ったら、122万以下で暮らしている方の、この50%ライン以下の人が、全世界の16.3%でしたよっていう意味です。だから、6人に1人、昨年の調査で13.9%になっても7人に1人。昨年の発表では13.9%上がったんです。だから、良くなつたとはいえるかもしれないですけども、でも、7人に1人です。そういうものだと思ってください。

今から見ていただくデータがこの困窮度ごとになっています。なぜか云ったら、皆さん、考えていただいて、年収122万円以下の人だけがしんどい云って云ったら、そんなことないですよ。この245万円と122万円の間の人もしんどいじゃないですか。例えば、130万円の人もしんどいじゃないかしらっていう意味です。貧困ラインって引かれると、私たちが懸念したのは、施策としてはそれ以下しかケアしないってなるのです。それで、間の人もしんどいんですよっていうのを見せるために、わざわざ大阪方式でこういうふうにグラデーションで階層を見ました。これをうちがやったので、この後、堺市さんとか、いろいろなところがこれをまねしてやったださっています。ぜひ、見てくださったらと思います。

この後のデータは、この順番に並んでいる、中央値3、2、1というふうに並んでいるので、この下へ行けば行くほどいろいろな学力とか、「こんな関係あるの？」ということが全部関係しているということが分かるデータが続きます。まずは、これは貧困、困窮度には関係なく、全体の中で年収じゃない、この中央値の3を見ています。一番たくさん高いところはどこか見ていたら、全体で、さっきも言いましたけれども、一番高いところは600万円から800万円になりますが、父子家庭になるとこれが半分になります。母子家庭になるとまた半分になってしまうという。全体の3分の

1 になるという。この母子家庭のラインはもうほとんどがしんどいということが分かります。ほとんどが年収 200 万円より下でしんどいということが分かります。

また、父子家庭ですが、大阪の出身の方で、最近著作がベストセラーになっておられる清水健さん。シングルマザーはいっぱい話題になるけれどもシングルファーザーがこんなにしんどいんだっていう手記を 2 冊書かれています。図書館の研修会なので本のお話をしますが、とてもいい本だと思います。読んで見られたらと思うんですが、父子家庭というのは、実はとても大変で、だから彼は仕事を辞めたんです。TV の有名なキャスターだったんですけども仕事を辞めて、今子育てとか、そういう活動に専念しておられるんです。父子家庭になると常勤の仕事を辞めたりしてしんどくなっていくわけですね。彼の生活は本当にそうだと思います。父子家庭もしんどいんだっていうことです。

それから、困窮度ごとの違いなんですけれども、正規職員の方はほとんど中央値以上だということになるんですが、困窮度 1 になると正規職員の人が減っています。でも、これは私、学生に言われて、本当、そうだと思いますけれども、正規職員なのに年収 122 万円以下っておかしいですね。学生がブラック企業なんじゃないかと言いましたけれども、ここも問題があります。すごく賃金が低い会社があるのではないかという課題もみえます。

それから、この後は母子家庭がしんどいということを示しているんですけども、母子家庭での占める割合ということで 7 割ほど非正規が占めています。それから、困窮度 1 は 5 割ですよ。さっき言いました等価可処分所得、245 万円もそんなに高いわけでもないですから、その人たち、等価可処分所得以下の人たち、中央値になっていない人が 8 割もいるんですよ。これがさっきのグラフが大きく下がっていくことを表しています。母子家庭を見たらしんどいと思ったほうがいいです。私はスクールソーシャルワーカーのスーパーバイザーもしているので、非行とか貧困とか、虐待とかのケース検討に行くんですけども、母子家庭がすごく多いんですよ。という、お母さんがさぼっているみたいに見えてくるんですけども、さぼっているのではなく、先ほどお話しした清水健さんみたいに仕事を辞めざるを得なくなった、でも、生活に困るから結局ダブルワークする、夜に子どもの面倒を見られない、朝起きられない、あるいは夜の商売に行くという生活のためですね。そうじゃないと生活していけない。そんなことが見えてきます。だから、皆さんもそれぞれのところでどんなことができるんやろうっていうこともぜひ考えてください。図書館の機能を使って、母子福祉とつながって本を回していたりとかっていう事例も聞いたことはあります。お母さんたちは本を

読んであげるとかいう余裕がなくなるわけですから、どうやって機会をつくっていくかという話になります。

次へ行きます。必要な制度を使っているかっていう話をします。就学援助というのは、収入の低い方が受けることができる教育に関する扶助のことです。いろいろな費用を助けてもらえるんですけども、困窮度 1、年収 122 万円以下なのに就学援助を受けたことがないっていう方が 14.5%もいらっしゃいました。これはちょっとびっくりしました。

自治体の担当課の方は、周知徹底しているから絶対そんなことはないはずですよ、って言うんですけども、周知って子どもが親に就学援助の説明プリントを渡すことなんです。学校からプリントを持って帰ってきて、それを子どもがみんな親に必ず渡すでしょうか。ランドセルの奥にくちゃくちゃくちゃってなっているということもよくあるし、親に渡したとしても、親が後で見ようと横へ置っかけてということもありますよね。だから「いや、絶対大丈夫です。」って自治体の方はおっしゃるんですが、そんなことはないというのがこの結果で出ました。

貧困調査で、これが明らかになったので、これをあげるというのは一つの指標、目標になるんじゃないかと私は思っているんです。例えば 5 年後にはこれが半分になっているとか、来年とは言いません、5 年後には半分になっているとかいうふうに、ちょっと目標を立てています。

例えば図書館で「就学援助って何？」とかっていう勉強会をすとかどうでしょう。図書館というのはちょっと生活に絡めてミニワーク、ミニレクチャーができるすごくすてきな場所ですよ。また脱線しますけれども、ここには大阪市西成区の方もいらっしゃるかもしれませんが西成高校さんが、新聞にも載っている話で、貧困学習という取り組みをしているんです。親がさっき言ったように夜働いていて朝起こしてくれないと、小学生にはすごく影響します。箕面市の調査で、すごく丁寧に個別のいろいろなデータと照らしてみられるものがあるんです。そうすると、小学校 3 年生から 6 年生ぐらいまでがしんどくて、親の影響を受けます。でも、中学生ぐらいになったら、もう自分で動いていきます。高校生になったらもう自分で動けるので、だから、小学校 3 年生から中 1、中 2 ぐらいまではやっぱりしんどい、いろいろ親の影響を受けるという結果でした。だから、貧困学習は高校生ぐらいの人をターゲットにやるというのも一つだと思うんです。西成高校は貧困学習って名を打って子どもたちに、例えば「就学援助って何？」とか、あるいは、アルバイトを急に首になったらどうするか、労働基準監督署に申し立てたら雇用責任者は 1 カ月前に解雇を言わないといけないですよ。1 カ月分は保障しないといけな

い、労働基準監督署に申し立てたら保障される、そんなのを教えているんです。生活の知恵、自分が生きていく知恵みたいなものを教えています。

それって、大人でも知らない人もいて、いろいろな制度っていうのはすごい熱心な人しかわかりにくいですね。行政側は広報にいろいろ載せていますって言うんですけど、とつてもわかりにくいです。でも、知っているか知らないかでえらい差です。だから、知っている人をつくってあげてほしいと思います。図書館で、本を使うとか、学習するということで、知っている人をつくるというのも一つかもしれませんね。

就学援助も知らない人は、実はやっぱりいる。うちの院生で社会人の方なんかでも、「知らなかった。」とおっしゃっていました。これスティグマとも関係があります。貧困の世帯、収入の低い人がもらうんだから自分は違う、と思っているから見ようとしなないとか、そこは恥ずかしいことだと思っているとかいうことです。後でお話しますが、イギリスとかへ行ったら権利、知る権利なんですよ。後でお見せしますが、ここが一番貧困ですよという貧困マップを出しているんです。日本で考えられないじゃないですか。それってスティグマになるじゃないですか。私の住んでいる地域が、一番貧困真っ赤だったっていったら、もう人口が減っていくのではないかって、市長さんが心配したりとかしますよね。でも、違うんです。そこへ行けばサービスをいっぱい受けられるから、充実しているから、だからみんな転居してくる、それが権利なの。貧困で、いろいろなサービスを受けるのは権利だっていうことなんです。簡単にはいかないのはわかっていますが、理想的かもしれませんが、徐々に世論を変えていかないといけない、恥ずかしいことじゃなくてということですね。そんなことをぜひ、皆さんの力を貸していただけたらと思います。

同様に、児童扶養手当の受給率も同じく低いですよということ。三つぐらい大きなポイントがあるんですけども、一つはそういうのを受けられていない人が14%、10%から14%いました。この人にどうやって届けるか、これは学校だけの仕事でもないし、役所だけの仕事でもないかもしれません。役所というのは、未払いの人は追いかけてくれますけれども、未受給の人は追いかけてくれないじゃないですか。だから、その受ける権利があるのに受けていない人を追いかける人はどこにもいないんです。ぜひ、それは口コミで広げていくしかないと思います。それが恥ずかしいことじゃないということですね。

もう一つは遅刻に関するデータを見てください、ご飯を食べているかという話なんです、遅刻を見ていただいたら、数値は少ないって皆さんは思われるかもしれませんが、ほとんど毎日遅刻をする子ですね、

週1回からほとんど毎日とレベルはいろいろですが、何らかの遅刻をしている子が20%いるんですよ。これにはすごく驚きました。

この調査は小学校5年生と中学2年生のほぼ全数のデータです、大阪市はほぼ全数ですよ。回収率はすごく高かったです。小5と中2で何らかの遅刻している子が20%もいるって、ちょっとびっくりしませんか。それが困窮度の高い子どものしんどいところですよ。中央値以上だったら10%ぐらい、半分になるんですよ。だから、倍になるっていうことは、学校の先生とか子ども食堂とか、NPOでいろいろ動いておられる方が、なかなかターゲットがわからない、どの子が貧困世帯かがわからないということです。遅刻しているっていう子はしんどいかもしれないと思ってくださったらいいんですよ。遅刻というのはバロメーターになっています。後でお話しますが、地域と一体化して、本も使ったりしながら取り組みを行ったところは遅刻ゼロになりました。これはすごいことです。

それから、困窮度が進むと勉強の理解度が減っていくとか、勉強時間が全くなくなってきます。私が問題にしたいもう一つはここです、進路を聞いているんです。中学卒とか、高校卒って希望した人が、困窮度1になると25%ぐらいになります。自治体によったら、これは25%から30%ぐらいあったところもありました。つまり、もう高卒でいいやって思ってしまう、小5と中2の段階で諦める、諦めてしまう、これがすごくしんどいことで、将来の夢を持ってない状況です。中央値以上の子だと半分以下になり、みんな大学へ行こう、専門学校へ行こうって思うわけですよ。子どもたちにどうやって夢を持ってもらうかが大事ですが、図書館というのは夢を与えられる大きなポイントだと思います。

図書館については、情報がターゲットの人に届きにくい、モチベーションのある人は図書館に来てくれるけれども、図書館に来てくれないのがこの貧困層だったり、親が連れて来ない子、というところが気になると思うので、そこをどう工夫するかという課題はあります。でも図書館の力は絶対です。

それから、放課後どうやって過ごしているかっていうことなんです、困窮度が上がると近所の大人以外の人と過ごすことがあるという子が少なくなっていきます。そうすると、おうちの人以外の大人と接していない、学校の友達以外の友達と接していないということなんです。よく考えていただいたら、スイミングに行っていたりとか、塾へ行っていたりとかするかしらなかっていう話ですよ。サッカーをやっていると、少年野球をやっていると、そういう日曜日とか、お母さんとかお父さんが一緒に行かないとできないようなことに行けないわけですね。

この間ある自治体の方が、みんなの前では言わなかったのですが、集りの後にこっそり、自分も母子家庭ですごくしんどかった、調査結果のとおりですって言ってくれました。お母さんの顔をうかがっていたそうです。決して親は虐待親でもないし、ガリ勉ママでもないし、人よりひどくほったらかしているわけではないのだけれど、お母さんがダブルワークをしたり、すごく忙しそうにして生活が大変そうだからやっぱり言えなかったって言うていました、あそこへ行きたいとか、みんながサッカーをやっているから私もやりたいたとか、そんなことが言えなかったって言うていました。そんな子どもをどうやって皆さんが見つけてくださるかが大事です。

虐待を受けているとか、しっかり支援が必要な子は、児童相談所とか福祉事務所とか専門領域の担当者がちゃんと把握しなければいけないので、皆さんの領域ではありません。先ほどお話した彼女は、頑張って自力で勉強して大学へ行き、公務員試験に合格されたんですけれども、でも、すごくやっぱりつらかったって、ちょっと泣いておられました。そんなことはいっぱいあると思います。でも、こんなことは他の人には言えないって言うてましたね。

どうやってこの周りの大人をつなげるか、つながるかですが、図書館がつなぐ場になっていけるためには、ボランティアのお母さんを集めて、ちょっとでも集まってくさる子どもとマッチングさせるのも一つですね。いろいろな大人と接触できる場所を、それを何丁目ごとに集めていくと、図書館を離れても地域として支えられるので図書館だけの支援で終わらないということです。図書館を離れて日常生活でも大人と子どもがつながる、大人同士がつながるみたいなことが考えられないかなって思います。

これは明確なんです。対策を急がないといけません。学習の話なんです、勉強時間が、勉強すればするほど理解が高くなるのは普通ですよ。皆さん、子どもさんに頑張れって、やればできるよって応援して下さるじゃないですか。実は、そのことが言えるのは中央値以上の話だということです。これはやっぱりショックです。学力は個人の努力だけではない、もちろん努力も必要でしょうけれども、努力だけではない、社会の問題だということなんです。勉強すればできるって話ではないのです。

そのことを耳塚先生という方がもうだいぶ前におっしゃっていて、同じような調査結果が出ています。貧困家庭で3時間以上勉強している子より、裕福な家庭で勉強時間0時間の子のほうが学力は高かった、勉強しなくても3時間勉強した子に勝ってしまうって話なんです。これは個人の努力ではなく社会の問題ですよ、と警鐘を鳴らしておられました。この調査は2015

年だったかと思いますが、ちょっとネットで、耳塚先生でこの辺のキーワードを入れたら全文出てきます、興味ある方はぜひ論文を見てください。



このこととセットで、ここは図書館の皆さんにぜひ聞いていただきたかったところなんですけれども、家庭の何が学力に影響あるのかって調査された耳塚先生は、保護者の意識との関係を見たところ、一番影響を与えているのは読書活動だったんです。その次は、生活習慣に対する働きかけ、朝起こしてあげるとか、「歯みがき、やった？」って声を掛けてくれるとかですね。それから、親子のコミュニケーション、会話しているか。さっきのあの役所に勤められた方の話を聞いていたら、本当に会話するのも気を使っていたわけですね、忙しそうやからって。それから、最後は文化的な、まさに図書館へ行くって文化活動です。困窮度の高い親は図書館へ行くって機会とかがうんと減っていました。大阪の調査でも困窮度のしんどい人は、5歳児の調査では、絵本を読み聞かせるかって聞くとうんと減ります、半分以下になります。20%とか30%です。一般でも絵本を読み聞かせているという親は7割ぐらいでした、90%に行かないなんてちょっと残念な気がしました。だから、一般の世帯でも、皆さんのお仕事はまだまだ必要です。絵本の読み聞かせというのはすごく学力に関係しているんですが、全員がやっていない、中央値以上でもやっていない親がいて、困窮度が高くなると30%とか40%とかになってしまいます。本を読むという活動がいかにか子どもを豊かにしてくれるか、私はいつも学力のことを言うので学力主義者みたいに聞こえるんですけども、そうじゃなくて、やっぱりベースの力がないと就職につながらなかったり、考える力ができなかったりするので、本を読む力というのはやっぱりすごく重要だと思うんですね。そのことをぜひ、アプローチしていただきたいし、取り組んでいただきたいです。家庭での読書活動で皆さんに何ができるか、そのヒントをちょっと後でお伝えしたいと思います。

さっきのところに戻って、困窮度が高いほど健康がすごく阻害されていくということも分かりました。やる気が起こらないとか、いらいらするとか、おなかが痛

くなるとか、小学校5年生なのにそういうことがどんどん起きています。研究を一緒にした先生がこの結果を見て子どもがかわいそうだと言っていました。貧困により健康がむしばまれているというのがよく分かります。大人はもっとひどいです。大人はもっときれいにシャープに差が出ているでしょう。不安な気持ちになるとか、それから、頭が痛くなるとか、いらいらするとか、肩が凝るとかの傾向がものすごくきれいに表れています。こういう体調不良の割合ががすごく高くなる状況をちょっとイメージしてみてください、日常的に頭が痛くなったり、腰が痛かったり、いらいらしたり、やる気が起こらなかつたりっていう親が家にいるって考えたら、さっきのお話じゃないけれども、子どもはやっぱり気を使います、すごく気を使う、そしてまん延してきます。

しんどい家庭ほど文化を共有していきます。高校生の生活保護家庭にとった調査なんですけれども、子どもと親にそれぞれ20項目ぐらい聞きました。皆さんは自分の子どもさんが教師とどれぐらい会話しているかって分かりますか。私は分からなかったんですけれども、それとか、遅刻早退とか、成績とか、こういうのが親と子どもの回答がぴったりなんです。ぴったりということは、学校行事に参加しているかとかも親が全部分かっているということなんです。これっていい親だと思うかもしれませんが、高校生ですよ、何か気持ち悪くないですか。ギャングエイジを経て、思春期で親から自立して、親が知らない世界をつくっていく時代なんです。自分が高校だったときのことを思い出してくださってもいいと思います。もう全部親に言ってなかったでしょう。そんなところでこんなにぴったりということは、逆に私は問題だと思ったんです。20項目あって、2つ以外はぴったりでした。だから、貧困が連鎖してしまったり、共依存になってしまったり、同じ価値観と考えになってしまいやすいんです。それは、部屋が1つしかなかったりとか、さっきの役所に勤められたという方のようにすごい温度をずっと過敏に感じながら生きているから、すごく何というんでしょうね、本当にシャープな感じがしました。貧困でお母さんが働いていて母子家庭でってなると、そうやっていきやすいのかもしれないです。

2つ以外と言いましたが、違ったのは、この2つなんです。それは残念なことでしたが、「夢を持っているか」といったら、子どもはまだ将来に夢を持っているのに、親はもう諦めている、75%になっちゃう。親が諦めるとやっぱり崩れます。私の調査ではないですけど、親子で将来の夢を語り合っているかとか、将来に目標を持っているか、そのコミュニケーションをしているかというのと、学力との相関が一番高いっていう結果もありました。だから、夢を親が持てなくな

っていくとすごいしんどくなるだろうなって、そんなにびりびりした温度を子どもは感じているので、ぜひ、親に夢を持ってもらう、図書館活動の中で、親に夢を持ってもらうことができたらと思います。

それから、もう一つは生活保護だっっていうことを子どもが説明されたかっていう話なんです。子どもは説明されたって言っているんですけど親は説明していないと答えているんです。真逆の答えが出ています。これにはびっくりしたんですけども、つまり親は子どもに説明していない、でも、子どもは高校生にもなれば、うちの家は生活保護家庭だっ分かるんです。ケースワーカーが訪問に来るし、いろいろ書類が送ってくるし、親に言われなくても子どもは分かっているでしょう。それが、ここで大事なのは、親が正面切って、「いやいや、こういう理由でね、ちょっとしんどいから役所から助けてもらっているんやわ」って、言えないといけません。でも言えていない親が駄目なのか、その親が悪いのかといったら、ここでまたスティグマの問題があります。なぜ言えないかといったら恥ずかしいからですよ、恥ずかしい、貧困は恥ずかしい、だから、今こんな理由で、一応経済的にしんどいから助けてもらっているんだって、もし権利みたいな感覚やったら言えますよね。日本人に権利というすごいネガティブな、権利の主張ばかりしてくるみたいな、ネガティブな感じを捉える人は多いんですけども、そんなことはないですよ。ちゃんとやるべきことはやる、権利と義務は一緒に来るわけですから、やることはやって、貧困であることは恥ずかしいことじゃないから伝えられる、というふうになったらいいと思います。虐待事案とかは大体ちゃんと言えていない親が多いです。いろいろなことをちゃんと言っていない、再婚した、離婚した、2人目の子どもが生まれた、いろいろなことを子どもに言っていないという、そんな家族に起きてきますから。

このことは、じゃあ、なぜできないかといったら、先ほどのようにスティグマがあったり、皆さんもそうだと思いますが、苦手なこと、これを言にくいなと思ったら後回しにしませんか。私なんか原稿に追われて追われて、この講演のパワーポイントも時間に追われてなかなか送れなかったんですけどもね。いつも何か追われて、宿題に追われて生きている感じがするんです。それで、ようやくやっていくんです。好きなことだったら先にやれたりとか、一番苦手なだったら後回しになったりしますよね。皆さんもそうじゃないかなと思うんです。だから、一方的にちゃんと向き合えない親が駄目だということではなくて、何というんでしょう、ちょっと聞いてくれる人がいたり、「そんなもん、私も一緒よ。」って言う人がいたら言えるかもしれない。そう言ってくれる人がいるかないか、

ちょっとしたことやと思うんです。

そんなこんなで、貧困や孤立が虐待にいきやすく、虐待を受けた子どもは、また問題行動にいきやすいと言われます。少年院にいる70%の子は虐待を受けた子でした。ネグレクトの子の半分が、親が朝起こしてくれないので不登校になっているというデータがあります。問題行動になり、問題行動になると学校へ行かないから学力低下になり、学力低下になると、また貧困になるっていうふうに、こんなふうに循環していきんだってことです。

問題行動になったり、虐待になったら児童相談所とか教育センターとか、いろいろなところの専門の仕事になります。感覚でいくと、児童相談所が扱っているのは1%です。でも、実は大阪では30%近く支援が必要な子どもがいます。就学援助率、大阪市で26%から28%ぐらいの間、大阪府内でも高いところで30%近いところあります。だから、どうやって、その人たちを巻き込んでいくか。名札を付けてないからわかりません。だから、皆さんがいろいろな人にアプローチしていくことで、そこに届くかもしれないという話なんです。児童相談所は1%しか見ていませんよということだけ覚えてください。

私が考えたのは、学校という場だったら全ての子どもが通うところだから、先生がやるんじゃないくて、学校という義務教育の場に、例えば図書館とリンクできたら、コラボレーションできたらと思います。もう今もやっていると思います、いろいろやっていると思います。この間、関東のほうの、東京より北の東日本で、ブロックの社会教育の研修会に呼ばれて事例発表とか報告を聞いたんですけどもすごいすばらしい報告がありました。市立図書館の本と学校の図書館をリンクさせておられて、市立図書館の本を学校の子どもたちが気軽に借りられるようになっていくという取り組みのお話を聞きました。そんなのも一つですよ。もちろん、移動図書館はやっておられると思うので、私の関わっている自治体さんでも図書館が学校へ出前されている、学校へ移動図書館が来るということもありました。この30%の層をより分けることはできないから、誰が貧困かって分からないから、全ての子どもたちにチャンスを与えるしかないということなんです。そうすると、全ての子どもたちにチャンスが投げられるのは学校しかない。なぜかという、一遍家へ帰ってしまうと、親が行っておいでって言うてくれないから、一日家でテレビを見ていたということになります。だから、学校でやっているとお隣の部屋へ行くだけですし、先生は「あそこでやっているよ。」って言うてくださるから。学校でやれるとか、学校と手をつなげるというのは、すごく大きいんじゃないかなって思っているんです。それも、子ども食堂とか、居場所

支援とかいろいろなのが始まっています。いろいろなのが始まっていますが、本というツールはすごく重要だと、今日の結果でわかってくださったと思うんですけれども、本というツールはすごく重要だと思うんです。なので、それを何か皆さんの力が借りられないかなって思っているところです。



この講演のテーマは「子どもの最善の利益」ってことについてですが、児童福祉法が2017年4月から施行で、大きく変わりました。ぜひ、皆さん、知っていただきたいと思います。私はいろいろなところでいろいろな、何というんでしょう、葛藤場面によく居合わせるんです。今日も門真市で会議していたんですが、児童福祉の方と学校教育の方と、地域住民の方とって一緒にディスカッションをしていると、やっぱりいろいろと葛藤が起きてくるんです。そんな中で、学校を主語でしゃべっている人もいれば、地域を主語でしゃべっている人もいるし、児童相談所を主語でしゃべっている人もいるからかみ合わないですよ、葛藤になる。だから、ぜひ、皆さんで考えるときは、いろいろな取り組み方は違っても、子どもを主語にして考えて、「ちょっと、どうしようって考えませんか？」ってお話ししてほしいです。

例えば、学校へ図書館が乗り込むって言ったら、「いや、そんな、先生が忙しいだけやろう」と言われて反対されるかもしれませんよね。そういうときに、「じゃあ、先生にはできるだけ手をかけません。」って、子どもを主語に考えたら何かこの一部屋を貸してもらって、子どもたちはごろごろしながら本を読めるかもしれません。家で本を読むということはどういうことかという、ごろごろしながら本が読めることなんです。さきほど保護者の読書活動が学力に影響したってお話ししたでしょう？ それは、「今日みんな自転車で遊びに行っちゃって、僕は自転車を持っていないから行かないから暇だな。」っていうときに、家に本があったら見ますよね。ないからテレビに行っちゃうっていう、ごろごろして暇だなというときに

本が置いてあるような環境をどうつくるかが大事です。そういう意味で、考えるときに主語を子どもにしてくださいってことなんです。児童福祉法の第1条ですが、主語が子どもに変わりました、これはとても大きなことです。前までは国民が主語だったんですね、だけど、児童福祉法ですから、子どもを主語にしました。それから、子どもの権利条約にのっとるとということが書かれました。これ、権利条約を批准したのが1994年なので、もう研究者からいろいろな人が、子ども福祉に関わる人が願っていた、何年後になるんだろうと思っていたことが、ようやく願いがかなったところなんです。これはすごい意味がある。子どもの権利条約にのっとって物事を見ましようということなんです。子どもの最善の利益を優先しましようということに自治体は、責任があるんですよ、親と共に責任があるんですよということも書かれています。ぜひ、この1条、2条というのは理念が示されていて、重要なことが書かれているので、児童福祉系のほかの法律より優位だと、まずこれが、そごがあったときはこれが優先されるというふうになっていますので、ぜひこれを知っておいていただけたらと思います。何かもめたときは、これを持ってきて、みんなでこれを基に考えませんかって投げてくださいたらと思います。

スクールソーシャルワーカーという人もいますよということも、ちょっとお伝えしたかったんです。学校でやるというイメージです、学校でやるというイメージを、皆さんとちょっと共有したいと思うんです。私がいう学校というのは教師ではありません。なぜかと言ったら、学校のスタッフはアメリカやイギリスでは半分は教師以外なんです。今皆さんの中で学校支援に取り組んでおられる方もありますよね、学校サポートということで入っておられる方。学校の先生よりたくさんいるっていう話です。日本はといたらもう先生ばかり、教師ばかりなんです。だからかみ合わないんです、私から見たら。教師がやるって一言も言っていない。学校でやりましようよと言ったら、もうイコール教師ってみんな思う、学校でプラットフォームを作る、学校で食堂をやったり、絵本が自由にごろごろしながら読める場をつくったり、そんなのをしようよと言ったら、先生がやらねばならないとみんな思ってしまいます。そうじゃなくて、地域人材を入れて、あるいは図書館の力を借りて、学校という場で考えてみてください。学校の中で学童保育をやっていますよね。今日も学童保育の関係の方もいらっしゃっているかもしれないと思うんですけれども、学童保育が入っているように、子ども食堂が入ったっていいわけじゃないですか。居場所が入ったっていいわけじゃないですか。なぜかと言ったら、必要な子が行くためです。必要性の高い子どもが行くため。学校と離れたところであった

ら行けない、一遍家へ帰ってしまうと行けないからって意味です。だから、ぜひ、こういうイメージで考えていると思っていただきたいです。

これは先ほどお話ししたイギリスの貧困マップです。これをみんな持っているんです、保育園の先生も学校の先生もみんな持っていて、連携会議はしていないけれども、このマップで意識を共有していて、すごいなって思いました。真っ赤な地域だから、ちょっとでもケアをしていって、赤がオレンジになるように頑張ろうってみんなが頑張っているんです。サービスも真っ赤なところほどたくさん国が費用を落としてくれます。例えば、私が行った学校は72人職員がいて、先生は22人しかいません。先生よりいろいろな他の人のほうが多い、もうびっくりですね。日本では考えられないですが、メンターの人もいます。子どもって、ちょっと先の先輩がいいんですよ。だから、アメリカとかイギリスへ行って、視察で学校へ行ったら誰が案内してくれると思いますか。日本だったら大体教頭先生が案内して下さいます。アメリカやイギリスへ行ったら違いますよ。メンターと言って、ちょっと高校生ぐらいのボランティアが、中学校には高校生みたいな人が入っているようにちょっと先の先輩がいるんですよ。ステータスなんですよ、その子にとったら、自分は頑張った子がその席へ座れるから、だから頑張るんですよ。そんなふうに、メンターというんですけれども、サポートし合うとか、若者の支援の人も入っているし、クラスも1人ではないです、TA(ティーチングアシスタント)が必ず入って学校の先生をサポートする人が入っていたりとか、スクールソーシャルワーカー、スクールサイキロジストとかいう人ももちろん入っていますが、イギリスでは図書館司書が思いっきり多いんです。というのは、私のいうプラットフォームに近い話ですが、ブレア元首相の貧困対策でExtended School といって、拡大大学校、学校を膨らませていくという施策です。図書館司書がなぜ入っているかと言ったら、貧困対策ですから、さっきから言う学力と関係して貧困の連鎖を生まないために、ってことです。

ごろごろしながら本が読める環境をどうつくるのかって、私ずっと言っていて、そうしたら、イギリスを見に行ったらいいよって言われて、イギリスを見に行っただですよ。これはもう感動しました、本当に。この写真を見てください。これは廊下なんです。ここが教室なんです。私はここに行って、ぱっと教室から廊下を見たらこんな感じ、じゅうたん敷きでクッションもふんわか、ふんわかといっぱいあって、まさにごろごろしながら本が読める。お友達とあぶれた子とか、うまく遊びに行けなかった子とか、いろいろないるじゃないですか。教室の隅っこでいじいじしているんじゃないかって、図書館のこの廊下でごろごろしながら本を

読んでいます、寝転んで、ただざっくばらんに。こんな環境ですね、私が夢に見た光景です。

私は3年ぐらい前からずっとこの写真を皆さんに見ていただいてアピールしてきました。関東のほうでコミュニティスクールとか、地域学校協働本部とか、地域人材が学校運営に関わっているんです。そこで、地域人材の方が校長先生にこの写真を見せて、踊り場・フリースペース等、空いている場所にセラピーマットを敷いて、学校図書館とはまた別に近所から本を集めてきて、ごろごろしながら本を読める場をつくられた人もありました。

そんなふうに地域の力とか、そこで図書館が何をできるかとか、一緒にやれるかとか、何かこういうことを実現するとき、参考にされたい事例があります。例えば、これも一つ工夫なんですけれども、本が難易度でカテゴライズされているんですよ、こっちから順番に難しい本になっていくんですね。子どもがこの辺の青色の本を読みたいってなっても駄目なんです、ここから順番に読みなさいよって、ピンク色の本を読んで初めてオレンジに行って、オレンジを読んで初めて黄色に行ってっていうふうに、つまり、読む力ができます。自分の読みたいという本だけちらちらと読んで終わるんじゃなくて、読みたい本に行くまでに、こう順番にステップアップして行って、それで読む力がどんどんできていくって感じです。

それから交換日記みたいにノートをつくっているんです。子どもが感想を書いて、それを見て親がまたワンメッセージを書いて、それを見て図書館司書が書きます。だから、3人の交換日記です。ここが一番しんどい学校です。就学援助率でいったら70%ぐらいのところなんです。だから、親は全然モチベーションはないんだけど、こういう取り組みによって、親も子どもだんだん書けるようになってきたということなんです。見たら、お姉ちゃんが代わりに書いて花丸して、というところもありました。でも、そうやってだんだん親を巻き込んで、親のモチベーションをあげるというところも、全数把握の学校だからできるわけです。教師にやると言うところできないです。教師がこんな一人ずつの図書館ノートにワンコメントを書くなるとしても無理です。だから、図書館司書が要るんですよ。それでどんどん本を読む力ができました。イギリスブレア元首相の貧困対策は政権が替わりましたがまだ続いているし、この図書館の取り組みに成功感を持っておられます。

そんなことができないかなっていうふうに、何かヒントにならないかなって思い皆さんにお伝えしています。さっきのところは、子ども食堂が学校の中にもあるんです。これ、朝食サービスで、ここを通過して学校の教室へ行くみたいになっているので、スティグマに

ならないんです。申し込みがいなくて、貧困家庭の子だけじゃなくて、お金を払えば誰でも食べられるというふうに仕組みで、アメリカでもそういった取り組みがあります。朝、パンとスープを配るとかをやっています。このような話を聞いてくださった方々に対して、日本での Good Practice をつくらないかと、政府や国関係の委員会では言っているのですけれども、「山野先生、それはイギリスの話でしょう。」ってことで、日本でいい事例を作ってくれといわれます。じゃあ作りましょうという話を進めていきたいです。

この写真は学校の敷地の隣の集会所、自治会館みたいなところで、もう学校と同じ敷地の感覚のところなんです。そこで、スクールソーシャルワーカーの方が地域の方と働きかけて、子ども食堂を始められたんですね。就学援助率が50%ぐらいのところなので、ここに来る子どもたちがすごい増えてきて、1学期は50人ぐらいだったんですけども、今78人来ています。生徒数が160人なんで、これは半分です。就学援助率は半分やから、全然間違っていないですよ。なぜ間違っていないかといったら、これをNPOがやるかといったらこんなことできないわけです。でも、名簿があって先生は知ってるわけですよ、どの子が経済的しんどい家庭かと。だから、名簿を見て、今日この子は来ていないと思ったら呼びに行くんですよ。だから、どんどんみんな参画して行って、ワンコインで、100円でご飯を食べられるっていうふうにやっているのととてもやりやすいんです。

これを自治会の主催でやっていて、学校は、何というんでしょう、場も貸していない、学校の隣の集会所なので場も貸していないんですが、隣でやっているんで、先生が見に来るんですね。気になる子が来ているとか、呼びに行ったりとか、いろいろできるんですよ。そうこうしている間にどんどん地域が育って行って、このように商店が歯ブラシと簡易水道を提供してくださって、みんなで歯みがきをして学校に行くというふうになっているんです。さらにもっと、もうどんどん行くたんびに進化しているので、もうびっくりするんですけども、今、近所の歯医者さんも参画されて、歯医者さんが、歯を磨いた子どもたちの歯を一人ずつ見て、子どもにシールをくれはったり、オレンジの歯磨き粉とかくれたりして、子どもたちは喜んで思いっきり磨いて、歯が2本も折れた子とか、抜けた子とか、いかに歯を磨いてなくて虫歯ばかりなのかというのが分かるぐらい。そんな形で、どんどん地域の力が広がり、子どもたちが参画し、学校とつながるとこんなふうになっていくんだというのは、すごいなと思いました。ほかの自治体ですが、子ども食堂の場に本を置いて読み聞かせに地域ボランティアが行こうとか、いろいろな取り組みが始まっています。

それから、先ほどイギリスはクラスに TA が 2 人ずつ入っているって言いましたけれども、これは関東の方ですが、諏訪市の学校で見せていただいて、クラスの中に 2 人ずつボランティアの人が入ってサポートしているんです。子どもの何というんでしょう、集中力のないところとか、生活の状況も含めいろいろなところをよく見てくれていて、後でフォローしたり、それこそ図書館活動に誘ったりとか、こんな形で取り組んでいます。

それから、地域の子育てサークルが中学校の中の居場所にあって、サークルと中学生の交流をしているので、そこには本がいっぱい置いてあるところがあるんです。だから、学校の図書館には行かないけれども、ここには来るんやという子がいるそうです。

そんなふうには本のあるところがちょっと逃げ場になったり、ほっとできる場になっているんです。そんなのを図書館と提携してやっておられます。最後に、一番言いたかったのは、福井県で、私は何年か前に聞いてびっくりしたんですけども、幼稚園と保育園の 5 歳児さんに、金曜日、土曜日になったら、本を無理やりでもかばんに突っ込んで持って帰らすということをしています。次の週にはまた違う本を突っ込むという感じで。ブックスタートというのは 1 冊だけじゃないですか。ブックスタートね、赤ちゃんは 4 カ月でもらいますよね。ある自治体なんかは、びっくりしましたけれども、3 人子どもがいたら同じ本が 3 冊になるって聞きました。ちょっとそれは考えてほしいですよ。話がそれましたが、ブックスタートももちろん大事なことなんですけれども、大体皆さんは本棚にしまって眠っちゃってしまう。4 カ月でもらうからです。本当に「読んで、読んで」と子どもが要求してくるころには、その本は本棚の中みたいになっちゃいますよね。きっかけになるのはいいんですけども。ある時福井県に学力テスト 1 位のポイントは何ですかと聞かれて、教育委員会の方がこれを答えられました。全員が必ず毎週本を持って帰る。親が読む気がなくても、子どもが読んで、読んでと言うから。子どもが読んで、読んでと言うから親もしぶしぶ読んだりとか。それが同じ本やったら言わないかもしれないけれども、毎週毎週違う本が来ると、「読んで」ってなるという話をされていました。大阪市さんにも言っているんですけども、これが自治体としてできたら一番いいんですが、できることから考えたら、地域の図書館と、その近くの学校と提携してやるというのも方法かもしれません。学校とか、幼稚園、保育園と。何かそんなふうには、図書館としてやれることがいろいろあるんじゃないかなって私はすごく思いました。

時間いっぱいお話をしてしまいました。話が広がりたり脱線しましたが、これで終わりたいと思います。

どうも皆さん、ご清聴ありがとうございました。(拍手)



<事例報告1>

笑顔いっぱい、絵本いっぱいの東淀川～地域の中の図書館の活動から～

おはなしボランティア とことこ
代表 渡邊裕美子

大阪市立図書館の児童サービスについて

大阪市立東淀川図書館
館長 角田人志

ただ今ご紹介いただきました渡邊です、どうぞよろしくお願いたします。(拍手)

今日は、私は図書館のボランティアに関わるようになったいきさつと、今日までのボランティア活動についてお話しさせていただきます。



平成9年にオープンしたキッズプラザ大阪で、インタープリター第1期生として5年間活動しました。ここで責任感を持って自主的にボランティア活動に携わるという、ボランティアとして一番大切なことを学びました。

そしてボランティアについて、もっと深く学びたいと思い、大阪市の社会福祉協議会の研修を受けてボランティアアドバイザーの資格を取りました。これは今でも大変役に立っています。活動終了後も登録ボランティアとして、さまざまな企画展で絵本の読み聞かせをしました。中でも、特に思い出に残っているのが、オランダ展で来日されたマレーク・ペロニカさんの、『ラチとらいおん』の原画を見ながら読み聞かせをしたことや、モンゴル展のゲルの中で馬頭琴の演奏とともに、『スーホの白い馬』の読み聞かせをしたことです。ここで共に活動した1期生の仲間とは、今も読み聞かせや子育て支援の活動で出会い、情報交換をしています。

次に、子育て支援活動にも活動の場が広がっていき、そこでもさまざまな出会いがありました。平成13年、東淀川区の社会福祉協議会の研修後にスタートした「子育て支援グループ あっぶるパイ」は、現在

は東淀川図書館で毎月1回「あっぶるパイのはっぴータイム」として活動しており、また東淀川区の子ども・子育てプラザでは「赤ちゃんと楽しむ絵本の会」を2カ月に1回実施しています。

こういった場所で出会ったお母さんたちが、子どもが大きくなって、地域の小学校で図書館ボランティアとして活動されたり、小学校の読み聞かせなどに参加しているのに出会うことも多く、仲間が増えていくことがとてもうれしいです。

ほかにも依頼を受け実施してきた活動として、都島区の子ども・子育てプラザの「いっしょにあそび あっぶるパイ」、これは月に1回の開催でしたが、東淀川区から引っ越していった親子と再会したり、中央区の区民センターの子育て支援講座「たんたんたん」では、10回と5回の連続講座をしました。そのとき参加していた親子が、今年度の大阪市のボランティアのイベント「おはなしのいいえ」で、声を掛けてくれたのですが、お母さんがとても素敵な笑顔で大きくなった子どもさんを紹介してくれました。

次に、国立民族学博物館で、平成14年からアフリカの昔話を語る活動に参加しました。これは、特別企画展の「西アフリカおはなし村」から活動が始まり、西アフリカで長く口承文学の研究をされてきた江口一久先生が、昔話を自分の言葉で語ることを教えてくださいました。そして、ここで研究をされている多くの著名な先生方からレベルの高いさまざまな研修を受ける機会に恵まれ、また、江口先生が京都にいられていた小澤俊夫さんを民博に呼ばれて、ボランティアたちに直接お話を伺う場をつくってくださったときなどは、緊張しましたがすばらしい時間でした。民博でのアフリカのおはなし会は、アフリカのアクセサリーや衣装をつけて昔話を語るのですが、アフリカの楽器の演奏やアフリカダンスも教えていただきこれらは今も私の貴重な財産となっています。

平成15年には地域の小学校での生涯学習で、「こどもおはなし隊」と「こども紙しばい隊」を立ち上げました。8年間活動を続けた中で、本の帯コンクールの第1回と第2回に応募して優秀作を続けて二度受賞したことは大変うれしい思い出で、読み聞かせに関わる子どもたちの感性に驚きました。この帯になった2冊の本は私の宝物になっています。小学校のいきいき教室で夏休みに紙しばい大会をしたときは、普段やんちゃな子どもたちが一生懸命紙しばいの練習をしました。この小学校で朝読を始めて18年になり、その後、学校図書館でのボランティアも始まり10年になります。ほかの小学校に異動された校長先生から学校図書館でボランティアをしてくださる方を紹介してほしいと頼まれ、その地域図書館のボランティアをされている方にお声掛けをして喜ばれたこともあります。こうして

活動の輪が広がっていきました。

活動をしていくその中で、講師として講座を依頼されることもありました。東淀川区内の柴島高校、成蹊高校、大阪経済大学、大阪市のいちょうカレッジなどですが、あるとき高校生から、「小学校のときにおはなし会にきてもらったね。」と、声を掛けられて、驚くと同時に、いつまでも覚えてくれていることに喜びを感じました。

大阪市の人材バンクを通して依頼を受け、毎年おはなし会に伺うようになった大阪市内の小学校へは、今週の月曜日もおはなし会に行ってきましたが、今年で16年目になります。また、東淀川区内の幼稚園の未就園児対象のおはなし会では、成蹊高校に伺ったときに会った高校生が保育士となり、勤務していました。私の紹介したパネルシアターや手遊びを保育の中で使っていると聞き、とてもうれしく思いました。

こうして長い間活動の場を頂き、充実した幸せな時間が過ごせることに感謝しつつ、日々の練習や絵本選びなど、学び続ける姿勢を忘れてはならないとも思っています。

そして今までお話しした全てのことが、平成10年に東淀川図書館の「すすくボランティア講座」を受け、図書館ボランティアとなったことにつながっています。翌年、図書館行事の中で赤ちゃん向けのおはなし会「びよびよ」がスタート。このとき参加してくれていた赤ちゃんが3歳のとき引越しをしたのですが、その後お礼の手紙が来て、それから年賀状のやり取りをするようになりました。その子は昨年大学生となり、熱心だったお母さんは、今は読み聞かせボランティアをしているそうです。また、同じように、赤ちゃんから毎回おはなし会に来てくれている男の子が、今は5年生になったのですが、昨年の春のおはなし会のときに飛び入りで大型絵本の読み聞かせをしてくれました。『へんしんトンネル』です。私との掛け合いでしたが、練習もしなかったのにとても上手でした。

「とことこ」は、スタート時から図書館の全面的なサポートのおかげで今年で20年目を迎えます。メンバーは現在16名ですが定着率が高く、また代々の館長さんからさまざまなことを学ばせていただいたことでメンバーはどんどんステップアップしていきました。活動は、図書館行事や小学校への出前おはなし会、地域のイベントなど、ほかの区のボランティアさんと同じような内容です。

「とことこ」の活動が始まった後に、乳幼児向けの絵本の会やブックスタート事業が始まったので、メンバーは全員が全てに参加しています。また、私と同じように小学校のボランティアや生涯学習などの活動をされている方も多く、皆さんは予定がぎっしりで、たまにおはなし会のメンバーが不足となり困ることがあ

るほどです。

最初のころは、国の子どもゆめ基金の助成をいただきメンバーの研修をしていましたが、その後、東淀川区独自の助成金を頂くことになったので、毎年講師の方をお呼びして区民の皆さんにも参加していただける講座を開催しています。平成23年には区内在住の絵本作家、金尾恵子さんの講演会を開催しました。大阪市の図書館が実施しているOne Book One OSAKA事業で、私が実行委員長だったことから当時の市長が「とことこ」の活動に大変関心を持ってくださいました。そして、この日、講演会があるのを覚えてくださって図書館に来てくださり、そこで私たちが始めた東北の震災への支援のを知ると、メンバー全員に一人ひとり励ましと感謝の言葉を掛けてくださいました

それは、この「絵本を贈ろうプロジェクト～手から手へ1冊の本を届けよう～」でした。津波で全てのを流された子どもたちに本をプレ



ゼントしませんかと、区内の子どもに関わる活動をしている皆さんへ呼びかけました。すると、5月から約2カ月間で245冊の本が集まり、それを7月と12月に発送しました。集まった絵本は1冊ずつボランティアがラッピングし、寄贈してくださった方の子どもたちへのメッセージを付けて発送しました。これは全て新しい本です。箱を開けたとき、すぐに目に入るよう、ボランティアたちの手作りの折り紙でつくったメッセージを一番上に置きました。ボール箱にも思いを込めて飾り、郵便局の方へ託しました。そして、後日送られてきた陸前高田の小学校からの写真の、この子どもたちの表情を見て、こういう形にして良かったと心から思いました。

この経験と、ちょうどこの年、「とことこ」が大阪市立図書館から文部科学省に推薦していただき、全国の会議に出席してたくさんのことを学ばせていただいたことで一つの企画が実現しました。図書館と、当時隣にあったクレオ大阪、そして区の社会福祉協議会などの協力を得て、区内のボランティア有志による実行委員会を立ち上げ、イベントを行うことができたのです。それが、「東淀川わくわくフェスタ」でした。絵本を贈ろうプロジェクトが、手から手へ渡ったチラシだけで、あっという間に245冊の本が集まったことに、皆さんの熱い思いを感じたのですが、このフェスタも14グループが参加。ボランティアは、前日の準備から延べ100名近くが参加しました。このボランティアの

中には、先ほどお話ししたOne Book One OSAKA事業に子ども委員として参加していた区内の5名の小学生もいました。ぜひ参加したいと大型絵本の読み聞かせをしてくれました。そして、ここで「絵本を贈ろうプロジェクト」のご報告も展示して、寄贈して下さった方々に見ていただくことができました。

イベントが無事終了し、反省会をしているところへ当時の区長さんが駆けつけてこられ、ボランティアにイベントへの感謝の言葉とともに来年度から始まる区の絵本読み聞かせ事業に協力をお願いしますと頭をさげられたのです。そのとき起こった拍手、あの感激は今でも忘れることができません。そして、そのとき参加していたボランティアの多くが、この事業の読み聞かせボランティアとして登録してくれました。

翌年、図書館で開催した「とことこ」主催の講演会は私たちの大先輩である禅定正世先生でしたが、そこへ参加された当時の区長が2時間余りお話を熱心に聞いておられました。そして、最後のあいさつに立たれたとき、絵本読み聞かせ事業のことについてお話しされました。その場には、この事業にボランティアとして登録した、たくさんのボランティアたちが勉強のため参加しており、そのことを知った区長さんは、皆さんに感謝の言葉を述べておられました。

こうして、私の活動は個人からグループの活動へと広がり、図書館を拠点に東淀川区のほかのグループやボランティアとのつながりが自然に出来上がっていきました。そのため、これからお話しする東淀川区絵本読み聞かせ事業は、1年目から大変順調に進んでいきました。お配りしていますこのピンク色のリーフレットも併せてご覧ください。この事業は区内の乳幼児とその保護者や、区民の方全てを対象として絵本の楽しさを広く知ってもらい、地域のコミュニケーションの一つとして絵本の力を生かしてもらうことを目的として、平成25年に始められた事業です。私たち、「とことこ」のグループも、この事業に参加することになりました。その中の一つ、ボランティアバンク、これは区民の中からボランティアを募集して、読み聞かせボランティアとして登録しました。2年間で123名の方が登録されました。ボランティアは毎年研修を受けていただくのですが、スタート時から元府立図書館で司書をされていた脇谷邦子さんに講師をお願いしています。5年目の現在も85名の方が活動していますが、皆さん、お仕事、介護、孫育て、いろいろなボランティアなどをしながら、研修には都合をつけて、ほとんどの方が参加されています。

次に、絵本バンクです。これは家庭で眠っている絵本を寄贈していただき、この活動に役立てるとともに絵本の読み聞かせを広く知っていただくため、これは区の広報に大きく取りあげてもらいました。現在1、

489冊あります。区役所や出張所に来られる方が待ち時間に楽しんでいただけるようにと絵本コーナーをつくりました。出張所では月に1回、このコーナーでおはなし会もしています。毎年2月に開催している今年のチラシを入れておりますが、このえほんまつりや地域のイベントでミニ絵本展をするときにこれを展示して楽しんでもらっています。小学生向けの絵本は区内の小学校16校のいきいき放課後教室において読んでもらっています。

最後に、2枚の写真をご覧ください、これは12月に地域の子育てサロンで実施したミニ絵本展ですが、エプロンを着けているのは地域の方です。お母さん、子どもたち、みんなの笑顔がいっぱいです。今では区内どこでも普通に見られる光景になりました。これがこの事業の成果として全てを語っていると思います。

子どもたちの身近に絵本を読んでもくれる大人がたくさんいること、絵本を通してお母さんや子どもたちに寄り添って見守ってくれる人が地域にいる、絵本って本当にすごい力を持っていると感じます。私はこの絵本の力を信じて、ボランティアとしてできること、ボランティアだからできることをこれからも続けていきたいと願って、お話を終わらせていただきます。

どうもありがとうございました。（拍手）

東淀川図書館長の角田です。続きまして、私からは大阪市立図書館の児童サービス全般について簡単に説明いたします。

大阪市立図書館のネットワークと運営についてお話しします。大阪市立図書館は中央図書館を中心として各区に1館ずつある地域図書館23館と、自動車文庫の105ステーションを情報や物流のネットワークで結んでいます。このスケールメリットを生かして、市内全域に効率的な図書館サービスを提供しています。こちらがその図です。また、各図書館では、ボランティアの協力を得ながら、地域と連携したさまざまな事業を実施しています。中央図書館には子どもの本コーナー担当として専任の司書職員を配置し、地域図書館では2名の司書職員を配置して、地域図書館業務の一つとして児童サービスを実施しています。

次に子ども向け蔵書の充実についてです。全館で93万冊の児童書を所蔵しています。内訳は、中央図書館が約32万冊、地域図書館が平均で約2万6,000冊の児童書を所蔵しています。そして、全館で一体的な運用をしています。

図書館の講座や催しにつきましては、定期的に乳幼児向けお楽しみ会や子ども向け絵本の読み聞かせを実施したり、工作教室やストーリーテリング、紙しばい、パネルシアターなどの子ども向け行事を行っています。毎年子どもの本のお勧めリスト「こどものほんだな」

を発行し、4月23日の子ども読書の日から配布しています。これは大阪市立図書館の司書が前年に出版された全ての児童書に目を通し、その中から図書館として、ぜひ子どもたちに読んでほしい本を選び、紹介文や表紙画像を載せた冊子です。また、絵本作家を招いての講演会や、子育て中の保護者を対象とした絵本講座、「多文化にふれるえほんのひろば」やおはなし会、さまざまなテーマの図書展示も行っています。

ほかにもユニークな催しがあります。みんなでえらぶ大阪の1冊のえほん、One Book One OSAKA事業は今年で6回目となり、投票の結果は子ども読書の日に発表されます。人気のある絵本の表紙が載った投票用紙はカラフルで、「こんな絵本、読んでもらったよね」とか、家庭や学校で絵本の話題が広がったりします。もちろん、投票用紙に載っていない絵本も投票できます。今日の資料の中にこの投票用紙も入れさせていただいていますので、またご覧ください。そして、「としょかんポイント」は、来館したり本を借りたり、「としょかんクイズ」に答えたりするとポイントが増え、ポイントがたまると、ぬりえや「貸出プラス1冊券」がもらえる事業です。このように、子どもたちに本に興味を持ってもらえるような催しをいろいろ実施しています。

次に、ティーンズへのサービスです。中央図書館ではティーンズのコーナーがあり、専任の司書職員がいます。また、ほとんどの地域図書館にもティーンズ向けのコーナーがあります。ティーンズが興味を持つ本の展示も行っています。特に、中央図書館で実施している催しとして、さまざまな職業に就いた先輩から、その仕事や人生について聞く「教えて先輩！」の講座や、書評と漫才を合体させた大阪ならではの取り組み、「書評漫オグランプリ」があります。お勧め本を漫才形式で、3分で紹介するこの書評漫才は今年で6回目を迎えました。出場者も毎年増えて、今では、午前は小学生の部、午後は中学生以上の部で競い合う、笑いと知性と熱のこもった催しです。プロ顔負けのしゃべりに大笑いした後は、紹介された本がものすごく気になります。こちらの写真はヤングコーナーで展示された本の福袋の展示です。

次は障がいのある子どもへのサービスについてお話しします。マルチメディアデジターや触る絵本、布絵本、点訳絵本などをボランティアの協力により製作しています。また、展示や製作講座を通して普及活動にも努めています。LLブックセミナーの開催、知的障がいや自閉症、読み書き障がいなどがあっても読書を楽しみたいという願いは誰でも一緒です。読みやすく分かりやすい本というLLブックの理解を深めるため、関係団体と協力して毎年LLブックセミナーも実施しています。

幼児期読書環境整備事業についても説明します。平成12年より市内の幼稚園や保育所、子育て支援施設などへ絵本約100冊をセットにして配本をしています。またボランティアを派遣し、おはなし会を実施して子どもたちがさまざまな絵本と触れ合う機会をつくっています。絵本の読み聞かせなどの活動を希望される方向けのボランティア入門講座や、スキルアップのためのステップアップ講座を実施しています。活動に役立ててもらえるための大型絵本やおはなし組み木、パネルシアター、手袋人形などの貸し出しも行っています。また、図書館ホームページにボランティアのページを設けて有用な情報を提供しています。

子どもの読書活動の相談支援センターとしての地域図書館についてお話しします。現在、第三次大阪市子ども読書活動推進計画を策定中ですが、毎年全区で子どもの読書活動推進連絡会を開催しています。また、子ども青少年局が行っているブックスタート事業に協力して、実施施設を訪問し、赤ちゃんにとって絵本の大切さを説明したり、ボランティアと共に赤ちゃん絵本を読んだりしています。ほかにも、子育て支援施設での読み聞かせへの協力や出前講座、絵本展の実施など、区役所や地域の施設とさまざまな連携事業を実施しています。こちらがその概念図です。概念図を資料に載せておりますのでご覧ください。

最後に、大阪市立図書館が事務局を担う学校図書館活用推進事業によって、学校図書館に補助員を配置し、蔵書の充実や開館回数を増やすなど、市内の小中学校図書館の読書環境の整備に努めています。また、学校図書館支援ボランティア講座なども行っています。学校でのおはなし会やブックトークなどはボランティアと協力して実施しています。それから、学校通送便を利用して、調べ学習や一斉読書用の本を貸し出したり、児童や生徒の図書館見学や体験学習、教員の社会体験研修などを受け入れています。

以上、駆け足で大阪市立図書館の児童サービスを紹介しましたが、詳しくは大阪市立図書館のホームページにいろいろ資料が載っていますので、どうぞご覧ください。

ご清聴、どうもありがとうございました。（拍手）

<事例報告2>


絵本の楽しさをもっともっと！

～年齢も障がいのあるなしも関係ない！～

絵本いろいろの会
絵本あれこれ研究家 加藤啓子

こんにちは。

子どもたちに絵本の楽しさを届けるために「えほんのひろば」をしています。私たちは、子どもたちが自分で本を選べる環境というものをとても大事にしています。今日、この会場の外に絵本を並べていますが、ああいうふう



に絵本の表紙を見せて並べて、そこへ子どもたちが入ってきて自分たちで選ぶ。先ほど基調講演で山野先生が言ってくださったように、まさにごろごろする空間をつくっています。

図書館で「えほんのひろば」をしても、図書館に来ることができる子は限られていますよね。じゃあ、本と面展台(絵本の表紙を見せて並べられる段ボール製の本棚)を持って図書館から学校へ行こうよ、ということで、子どもたちが1クラス1時間ずつ来られるよう学校で「えほんのひろば」をします。小学校も中学校も、幼稚園や保育所も、今回並べている本と全く同じ絵本をずらっと並べているというのが「えほんのひろば」です。

並んでいる絵本を見た方に、「えっ、知っている本がないね。」って言われます。今日も500冊並べているのですが、知った絵本、いわゆる「名作絵本」が少ない。なぜかという、名作というのは、子どもたちもどこかで見たり聞いたりしていますが、長い話も多いので読めなくてつらいという子がいるんです。私は、子どもが全員本好きじゃなくていい、本、別に嫌いでさええやんって思ったりします。

この写真にしているのは中学生、中学3年生の「えほんのひろば」なんですけれども、先生がびっくりされたのは、この子は今まで本になんか触ったことない子だそうです。その子たちがどんどんどんどん本のお代わりをしていく、これが面白かったら次、これが面白かったら次、と、どんどん読んでいく、というのが私たちのやっていることなのです。

次は保育所の例です。絵本の対象年齢にとらわれず

にえほんのひろばをやっていますので、0歳児、1歳児が大人の写真集を見えています。年齢別に、1歳にはこの本、2歳にはこの本、3歳はこの本ではなくて、人間はみんな一緒だからということで、中学生が見るのと同じ本を並べておくと、実は、1歳児さんには絵本よりも写真のほうが分かりやすかったりします。乳幼児にもすごく受けるのは、『あかいひと』(須田 慎太郎/著 バジリコ)とか、泣いている子どもの写真集なのですが、子どもたちがこういう形でくぎ付けになっている。また、先生が笑っていたら子どももうれしいんだなということが分かったので、先生を笑わせるために『女子会川柳』(シティリビング編集部/編 ポプラ社)『シルバー川柳』(全国有料老人ホーム協会/編 ポプラ社)などの本も並べています。

この写真は0歳から3歳ぐらいで、こちらは4歳、5歳になります。先生たち、スタッフたちが中に入り込んで、子どもたちが選んできた本を読んであげる。このときお願いしているのは、「絶対きっちり読まないでいいからね。それから子どもの呼吸に合わせてページをめくってね。」ってことです。読み聞かせを否定しているわけではないですが、子どもたちと絵本を読む時間を楽しむのだから、「読んで聞かせるのではなくって、ワイワイ、ワイワイやってね。」ということをお願いしています。

支援学校や養護学校でひろばをやる場合も、子どもたちにどういう形で見せたいかということ、全く同じです。支援学校では、「生徒は全員で6人です。」と言われても同じように準備します。6人でも300冊必要です。なぜかという、やっぱり300冊全部が並んだ風景が面白いわけだから、そこは大人や図書館が一汗も二汗もかいて本を集めよう、ということで大人の書架にしかない本を引っ張り出してきて、こういう風景を作ります。



呼吸器を付けている子とか、ほとんど体が動かさない子もいるのですが、その子たちが絵本に思わず這い寄って来ます。先生たちが、「動いた、動いた。」って喜んでくれる。この写真の彼は全く耳が聞こえま

せんが、途中で補聴器をぱっぱと引っ張り始めたので、補聴器の必要がないということでしょうか。そうやって、コミュニケーションをとっているんですね。

こういうことをしていくと、とても面白い状況になってきます。自分で選ぶのがうれしい、楽しい。だから、年齢は全く関係ないよ、障がいのあるなしも全く関係ないよ、大人も子どもも全く一緒よ、ということなんです。

この写真は中学部の子どもたちですね、先生とか支援者の方、あるいは親御さんは、この子は本が読めません、本は選べません、というふうにおっしゃるのですが、いやいや、ほおっておいてあげたら選びます。大人が横からあれこれ勧めたら、もう子どもは嫌で嫌でしょうがなく「おばちゃん、黙ってて。」となりますが、とにかく「スペシャルの本」をたくさん並べておきます。例えば、児童デイサービスの施設に行くと、多動性障がいの子、脳機能障がいで落ち着けない子がいて、辺りをぐるぐる回っているんです。でも、先生たちが子どもたちに「この本楽しいよ」と言いたげにしているのを阻止して「放っておいて、じっと待っていて。」と言います。しばらくすると、その子がぱっと1冊本をつかんで、すごくうれしそうな表情をするんです。自分が選んだからうれしかったと、彼女はもうずっと声を立てて笑っているんです。

この彼女は、全盲なんですけれども、スタッフは全く普通の子と同じように読んでいます。なぜだと思えますか。だって、彼女は24時間見えてないんだもの。それなら見えてなくても同じように本を読めばいい、という感じで進めているのが「えほんのひろば」の読み方です。



写真を見ていただいて、「えほんのひろば」がどういうものか、何となくわかっていただけましたか？次に、障がい者施設でのひろばの様子を見ていただきます。私たちは廊下に必ず本の表紙カバーをぶらさげています。廊下に紙を張りつけて「えほんのひろば」と書いたって子どもたちは読まない。けれど、廊下に絵本の表紙をぶらさげると、何となくこういう感じなん

やなと思って入ってきてくれて、さらに小学部だけねと言っていたのに、なぜか中学部も高校部も入って、先生たちもワイワイいいながら楽しむ。寝ていないと生命維持ができないから、寝ている子もいますが、その子たちも自分で本を選べるといって、こういう風景になっていきます。まさに、先ほど山野先生がおっしゃったごろごろしながら本を手取る状態なんです。

「えほんのひろば」では、とにかくごろごろしていよいよって言うんですけれども、小学校ではときどき管理職の先生が、「行儀悪い」って怒りに来るんですよ（笑）。「先生、怒らんといて」と言うのですが、やっぱり本はきちっと座って読まないといけないうふうに思っているんですね。そういうような思い込みがあるのかなって思います。

これは10年ぐらい前の私の写真ですが、写っているのはバンコクの高校生です。私は日本語しかしゃべれませんが、『ぼちぼちいこか』（マイク=セイラー/さく 偕成社）を日本語で読むとこれだけの人だからがあつという間にできたんです。私は英語もタイ語もしゃべれませんが、彼らはこんなにうれしそうな表情をしてくれました。「ぼちぼちいこか」って言うだけでこの笑顔になるのです。なぜかという、絵が読めるからです。タイでは、マレットファンというNGOを立ち上げられた松尾久美さん、ムアイさん、ギップさんという3人が少年鑑別所で「えほんのひろば」をしています。罪を犯した16歳から24～25歳の子どもたちが収監されている施設で「えほんのひろば」をすると、こんな笑顔になっています。この時は、一人の子どもがギップに、赤ずきんちゃんの絵本を読んでくれて持ってきました。なぜこの本なのって聞いたら、幼稚園のときに読んでもらったことがあるからだ。1人の子が言ったら、次々と、集まってきて、そして、それぞれに自分の好きな本を選んで、その場でいい空気になって楽しみました。

罪を犯した少年たちの中で「僕がここから出所したら手伝いに行ってもいい？」とマレットファンの3人に聞く子がいたそうです。また、別の子は、自分には息子がいるので、出所したら息子に本を読もうと思うと言ってくれたそうです。そんなことがつながってくるのが、「えほんのひろば」でしょうか。先ほど「加藤さん、どこが一番「えほんのひろば」は熱心？」って聞かれて、「バンコク」と答えたんですけれども、マレットファンの3人は何度も日本へ研修に来てくれています。彼女たちの活動報告は、児童文学者の村中李衣さんがまとめてくださった『マレットファン - 夢のたねまき』（村中 李衣/作 新日本出版社）に書かれているので、図書館の皆さんは、ぜひこの本を読んでほしいなと思います。「マレットファン」と検索していただいたらすぐに出ますし、つい最近動画がインタ

ーネットに挙げられまして、とても面白い報告を見ていただくことができます。2017年の秋に、3人がこの会場（大阪市立中央図書館）で講演会をされたときもすごくいいお話でした。皆さん、ぜひ、マレットファンの活動にもご注目ください。

ところで「えほんのひろば」はいつ頃から始まったかと言いますと、2005～2006年ぐらいです。2004年に、実は今日も参加してくださっている芳澤さんという方が当時大阪府立中央図書館にいらして、「えほんのひろば」をもっともっと広めようということで、冊子をつくってくださいました。今日レジュメで使わせてもらっているのは、実はそのとき作ったそのままです。結局「このとき以上のことを私、よう書かんわ。」と思って、そのままです。

では、私たちが「えほんのひろば」でどんなふうの本を読んでいるかを皆さんにも体験していただければと思います。読み聞かせというのは、普通は読んで聞かせるスタイルなんですけど、絶対に子どもの空気を読んでほしい、子どもと一緒に絵本を読んでほしい、と考えています。子どもたちとの掛け合いが大事です。だから、例えば、これを小学校で読んでいるつもりで。（絵本『わ』（元永 定正/さく 福音館書店）を持って）これ何て書いてある？さん、はい。

(会場)わ。

言えたでしょう？小学校で読むときに、子どもたちに、「おばちゃんと一緒に本読んでね」って言うと、絶対「いや！」になるんです。もう一回、行くよ、さん、はい。

(会場)わ。

じゃあ、これは。

(会場)わ。

これは。

(会場)わ。

これは。

(会場)わ。

つながっている。

(会場)わ。

上の席の人見える？(笑)。ならんでいる。

(会場)わ。

ぶらぶらしている。

(会場)わ。

はい。

(会場)わー、わー、わー、わー。

はい。

(会場)わわわわわ。

後ろの人見える？(笑)。ふーとい。

(会場)わ。

ほーそい。

(会場)わ。

いろいろ。

(会場)わ。

いろんな。

(会場)わ。

ちいさな。

(会場)わ。

で、おおきな。

(会場)わ。

はい。

(会場)わー。

終わり(笑)。これを6年生に読んで、「あんたら、これ0.1.2(歳)えほんやで。」と言ったら、「ええーっ。」って言うんです。で、その子らにここを隠して(0.1.2の0を隠して)、「12(歳)でしょ？」って言うと、「ほほーっ。」って感心するのですが、こういうやりとりも小学校の高学年ですと、とっても笑顔になるんですよ。

私、これこそ平和絵本だと思うんです。平和がどんなことか、平和っていいね、平和ってすてきだね、と書いてある本当におせっかいな本を読むより、『わ』のほうが絶対いいのと思います。(『くるりんぱ な～に？』(マルタン/え・ぶん フレーベル館)を持って) これもやってみますよ。

これは何。見えている？これは何に見える？

(会場)花。

花。(上下逆にして)こうしたら？。

(会場)山。

山。じゃあ、行くよ、これは？

(会場)家。

(上下逆にして)こうしたら？

(会場)煙。

『くるりんぱ』という本なのですが、これは、工場から煙が出ている。(上下逆にして)こうしたら？

(会場)道。

道に見えた？ここに文章が書いています、「そらにのぼっては きえていく な～に？」「おうちまで つづいている な～に？」。余計なお世話やと思いませんか？(笑)。絵を読んだら絶対分かるのに、先に耳から情報が来たら、もう考えることをやめちゃうんですよ。

だから、文字を読まないほうが絶対面白い本というのがあるということも覚えておいてほしい。それから、先ほどの『わ』は1人で読んだら、子どもはしらけますよ(笑)。子どもに「はい」って言って子どもが言ったら笑う。じゃあ、これ何。

(会場)木。

木が何本？ノリ、悪いな(笑)、木が何本？

(会場)3本。

3本！どうなっている？

(会場)揺れている。

風にこうなっている？ そうしたら、こうしたら？ これは木3本だけれども、(上下を隠す)こうしたら、シットウ？ オクラ？ 誰か分かった？

1人がつぶやいたことが徐々に徐々に広がって、ああ、なるほどっていう具合に時間をかけて分かるようにします。大人が先に答えを言わない。(上下逆にして)何に見える？ 言って！

(会場)ワンピース。

ワンピース、えっ？

(会場)あー。

みんな、「あーっ」って。まだ見えてない人います？ 見えた？ (元に戻して)こうしたら木が3本やけれど、(上下逆にして)こうしたらワンピースが何枚？

(会場)4枚。

4枚やね。これも字を読んだら、「そよかぜに なびいているよ な~に？」 「かわくのまっぺ ならんでる な~に？」 もう文字は読まなくていいでしょう？ これは？ そんな難しいかな、コーヒーカップ。(上下逆にして)こうしたら？

(会場)ヘリコプター。

ヘリコプター。じゃあ、これは。

(会場)ケーキ。

ケーキはこっち(上下逆にして)(笑)。ケーキはこっちで、(元に戻して)こうしたら何に見える？ この場を楽しんでほしいんですよ。すぐに答えを言うんじゃなく、何に見える？ と考える時間をとる。オリンピックへ行きましょうか。

えっ？ 分からない？ ここにあるのがボール、これがネット。みなさん、もうケーキにしか見えませんか(笑)。ほら、バレーボールに見えるよね。そうしたらこれは何？

(会場)サボテン。

サボテン、これはすぐ分かったけど(上下逆にして)こうしたら？ 面白いでしょう。こんな本があるんですけども、皆さんが買わなかったから品切れのままになってたんです(笑)。去年の春、タイのバンコクで出版されたので、それと同時に、日本で再版されたんですが、また今品切れ状態ですね。絵を読むほうが面白いということ、分かりますか。だから、子どもと呼吸を合わせて読んでねってということなのです。

持ち時間があと少しですが、これをやりましょうか、(『まめうしくんとABC』(あきやま ただし/作・絵 PHP研究所)を持って)まめうしくんと、さん、はい。(会場)ABC。

言えましたね。じゃあ、これは、さん、はい。

(会場)A(えい！)。

高くジャンプして。

(会場)A(えい！)。

ボール投げて。

(会場)A(えい！)。

Aの次は。

(会場)B(びー)。

つのからこうせん。

(会場)B(びー)。

なきます。

(会場)B(びー)。

Bの次は。

(会場)C(すいー)。

静かにします。

(会場)C(すいー)。

おしっこします。

(会場)C(すいー)。

石投げて。

(会場)D(でいー！)。

怒って。

(会場)E(いー)。

ほとんど、絵本に書かれている文字を読んでいないのがわかりましたか。字を読んでいたら、子どもたちは間延びしちゃうんです。だから、文字を読むのではなくて、子どもとの空気を読んでください。楽しく読むにはどうするか。絵本というのはきちっと読まないといけません、一字一句間違えてはいけませんというのは、それは読み聞かせの時です。



私も読み聞かせをする時は真面目にきちっと読みます。でも、今江祥智さんが『What Can a Hippopotamus be?』を『ぼちぼちいこか』って訳されたわけでしょう？ 一字一句全然違いますよね。本文でも「Can a hippopotamus be a firefighter?」が「ぼく、しょうぼうしになれるやろか」。直訳の「カバは消防士になれるだろうか」とは全然違うけど、「ぼく、しょうぼうしになれるやろか」だったら、何となく応援したくなるでしょう。そうしてこうなるんです。「なれへんかったわ」。元の本では「No」しか書いてないんです。でも今江さんは、「ふなのりは、どうやろか」「どうもこうもあらへん」。「パイロットやったら -

と、おもたけどなあ」って、忠実ではないけど見事な訳文ですよ。

他にも紹介したい本はいっぱいありますので、今日帰りにゆっくりひろばで眺めてください。ここでは、せっかく全国から大阪に来られたのでやっぱり大阪弁の本をしようかなと今突然思いつきました。

『こんなことがあつター』（丸山 誠司/作 えほんの杜）、これは図書館にありますか。『こんなことがあつター』。で、表紙をめくると、東京タワーはこんな高さで、展望台はこんなところにあつてというように書いてあつて、そして、こんなことがあつター。あかいタワーはとってもおおきかっ

(会場)タワー。

50さいになったときにはみんなでおいわいし

(会場)タワー。

そうそう、そうそう。50歳になったんです。50年前、見てくれる？ ちょっとこの子、絵の真ん中にいる女の子と男の子は50年たつてキャビンアテンダントとパティシエになっている。50年前のカメラマンのカメラは二眼レフ（笑）。50年後はデジタルカメラ。

アナウンサーのおじちゃんのマイクはもちろんワイヤレスになっていますよね。おばちゃんも、50年頑張ってもやっぱり50年たつたら年がね、こうなっているし、左の隅っこで何か飲んでいるおっちゃんは、やっぱり50年たつても何か飲んでいるし（笑）。だから、50年たつたこの人たちが全員元気だつたということが絵で読めるんです。

それで、花火も見てくれる？ ちょっときれいになってますね。街並みは？

(会場)建物が増えた。高層になった。

増えた？ 飛行機はプロペラ機からジェット機になつター。これが絵本の絵を読むつていうことなんです。大人の人ほとんど文字しか読んでない、子どもと一緒に絵を読んだらめちゃうらしい。でも、大人が知つたかぶり「見てごらん、この人たちと50年たつたらこうなるのよ。」つて絶対言わないでね（笑）。

子どもが自分で見つけることがうれしいんやからね、つていうことです。でも、ある日、タワーは言つター。もうずっといっしょであき

(会場)タワー。

いきなりジャンプし

(会場)タワー。

おまけにみつにわかれ

(会場)タワー。

みんなびっくりし

(会場)タワー。

輪になつ

(会場)タワー。

のぼれなくなつちゃつター。じゅんばんをいれかえてみ

(会場)タワー。

これはこれでよかっ

(会場)タワー。

こういうことを読んで「ほんまに良かったか？」つて聞いてみるんです。静かにして聞かせるのではなくて、そういう子どもの声をどんどん、どんどん拾いながら絵本を楽しんでいくというのがひろば読みだと思つてください。

でも、いちばんしたがおもたすぎるつて、けんかがはじまつター。あぶない、あぶない。くちもきかなくなつター。あるひ、おおきなあしおとがきこえてき

(会場)タワー。

ひこうきにのつてきター、これは誰？

(会場)エッフェル塔。

エッフェル塔ですよ。 「ほんまあいたかつター」つて言っているのは誰？ 通天閣（笑）、関西人は分かりますね。通天閣が連れてきているのは誰？

(会場)神戸ポートタワー。

そう、神戸ポートタワー。ともだちつてきター（笑）、つて京都タワーが来て、京都タワーが連れてきたのは誰？

(会場)五重の塔。

五重の塔。これ、子どもに見せたらクリスマスツリーつて言うんです（笑）。心配して次々仲間が見に来てくれたんです。それがどんなふうにかつていうと、およいできちゃつター、じかんかかつターつていうふうにして、心配して集まつてきてくれる、これだけのこと。そこにすごく感動したんです。

その次をめくると、おかげですつかりなかなおりし

(会場)タワー。

誰も仲良くしなさいとか、けんかしたらあきませんよつて言わないのです。心配して集まつてきてくれただけで、みんな仲良くなつたんです。あたらしいなかもでき

(会場)タワー。

実はこの本は、このタワーさん(東京スカイツリー)ができたときに出版された本なんですけれどもね、ちょっとびっくりさせ（笑）

(会場)タワー。

やっぱり意地があるのでね（笑）。すぐになかよくなつ

(会場)タワー。

いいですね、何も言わなくても仲良くなれるんです。

じつはみんなとべ

(会場)タワー（笑）。

（笑）。「何でやねん」つてここで突っ込み入れられ

るのは小学校高学年なんですよ、幼稚園児ぐらいだったら、「意味分かん。」ってなります(笑)。「いやいや、絵本の世界やから」って言ってもそうです。だから、これこそ小学校、中学生、高校生が面白い本なんです。

その次、すごいですね、そのひのつきはすこしかわったかたちだっ

(会場)タワー。

で、終わる本なんです。裏表紙にヒルプロウタワーとか五稜郭タワーとか、いろいろなタワーの絵と高さが書いてあって、こんなふうになるんですけど、その裏表紙をぼんと広げたら、こんなふうになっていく。この仕掛け、わかります？ これをぼんと表紙に広げたら、こんなことがあつ

(会場)タワー。

ということなんです。皆さん、どうか、子どもたちと本を読むときには楽しんでください。あと1分あるので0.1.2歳えほんを読ませてくださいね。『けんけんぱっ』(にごまりこ/さく 福音館書店)、これは普通に読まんといってくれる？ けんけん、めくらんといってくれる？ けんけん、けんけん、けんけんけんけんぱっ。けんけんぱっ、けんけんけんけんぱっ。

何度繰り返してもかまわないからね、普通に読んだらすぐ終わるでしょ(笑)、その次、けんけん、けんけん、けんけんけんけんぱっ。もうちょっと笑ってほしいな(笑)。だから、この単純なことでも子どもたちはすごくうれしいんです。けんけんの歩幅が変わってきているでしょう？ けんけんけんけん、けんけんけんけんぱっぱっぱっ(笑)。

けんけんけんけん、だから、1個しか書いてないから1回しか読んだらいけないっていうのは読み聞かせの本です。こういう本は、子どもリズムを楽しんでほしいので、けんけんけんけん、次、どんなになるかはある程度予測はつけるけれども、だけど、ぱっぱっぱっぱっぱっ(笑)。けんけんけんけん、けんけんけんけんけんけんけんけん、ぱっぱっぱっぱっ。こんな本をひろばに置いておいたら、小学校6年生も中学生も実は喜んで見ているんです。ちっちゃいときに戻れるから。それが「えほんのひろば」のいいところかなと思います。

時間が来たので終わります、どうもありがとうございました。(拍手)



<事例報告3>

地域まるごとを子育て支援拠点に ～乳幼児から高齢者までがつながる～

特定非営利活動法人ハートフレンド
代表理事 徳谷 章子

特定非営利活動法人ハートフレンドの代表理事の徳谷章子といます。加藤先生の楽しい話ですごく盛りあがった後、「むちゃくちゃやりにくくなったわ」と思いつつ、「とうとう私の出番になったわ」ということで30分、「地域まるごとを子育て支援拠点に」ということをテーマにハートフレンドの活動をご紹介します。どうかよろしく願いいたします。



私たちの拠点ですけれども、大阪市は24区あり、東住吉区が南のほうにあります。その中でも桑津というところにハートフレンドはあるんですが、桑津は東住吉区が一番北の端、もううちの道路の後ろは生野区、横が阿倍野

区、こちらが平野区という、そういう端にあります。東住吉区は区役所が区域の真ん中であって、東住吉図書館もその区役所のすぐそばにあって、私たちは赤ちゃんを連れて図書館までなかなか行けない、図書館が近かったらいいのになって、そう思って子育てをしました。

私が市民活動と出会うきっかけは子ども会なんです。私は今62歳ですが、36歳のときから子ども会活動に関わりました。私は、26歳で結婚して、27歳から長男、長女、次女計3人を年子で生んだんです。それまで教師をしていて、立派な先生になりたいなってすごく思っていました。でも、主人が油揚げの工場をしているんですが、長男の嫁ということで工場も手伝わなければいけない、赤ちゃんも生まれた、というわけで退職をしました。夢は立派な先生から、立派なお母ちゃんに変えざるを得ませんでした。立派なお母さんになりたいな、私の育てる子は立派な子になってほしいな、それだけで必死になりました。

でも、悲しいことに、桑津には友達がいなかったんです。私は全然違うところで育ち結婚して東住吉区桑津に来ました。公園へ行ったらいるんです、お母さんたち。でも、困ったことを聞ける人が、私はうまくつくれなかったんです。

「私、これで困っているねん。」を誰にも言えずそのまま抱えて、とうとう一番下が3歳、長男がやっと1

年生に上がったときに倒れました。育児不安からうつ病になったんですね。それも1月1日元旦です。いきなり倒れて、布団の中で泣いて、体が震える。誰にも会えない、歩けない、外も出られない。何の病気かわからない。そのころはうつ病に対する理解ってあんまりなかったんですね。1月10日に、病院に主人におんぶしてもらって行くことになりました。

寝たきりが1年続きました。元気になって外へ出られるのには1年かかりました。外へ出るのは嫌でした。すごいわさになっていたから。だけど、やっぱり、「行ってらっしゃい！」と言うお母さんになりたい。何もできないお母さんになったんですね、私。立派なお母さんどころかご飯もつくれな、行ってらっしゃいも言えない、お迎えも行けない、運動会も行けない。だから、もう立派なお母さんはいらん、普通のお母さんに戻りたいと思い、それに1年かかりました。

そのときに、近所の人に、「徳谷さん、元気になって良かったね。一緒に子ども会の活動をせえへん？」って言ってもらいました。友達ができるかなと思ってすごくうれしかったです。それで子ども会活動に入りました。でも、うちのあたりは子ども会は中学へ行くともう入れないんです。子どもも中学、高校へ行ったら親もばらばらになるので、「寂しいな」って言うていたときにハートフレンドを立ち上げました。

桑津小学校の前に小さな土地があって、平成14年に1年で取り壊す計画で仮設の消防署が建ったんです。1年で3,400万円ぐらいかかったのでもったいない。これをもしも私たち親に貸してくれたらと思いました。東住吉区には児童館はありません。図書館も遠いし、ここに親の手作りの児童館をつくれるんじゃないかと思い私たちは嘆願運動をしました。それに地域の桑津連合振興町会の皆さんが賛同してくださって、東住吉区役所が勇気のある決断をしてくださって平成15年、「桑津こどもの家」として開所しました。それがハートフレンドの始まりです。

平成15年12月から「てらこや」を始めました。5年生でも1年生からやり直そうということで、土日は囲碁、将棋、折り紙等、地域の人がみんな先生になります。赤ちゃんを連れてお母ちゃんも来て、育児サポートにもなります。当初は1回100円とか200円とかいただいて電気代を賄おうと思ったんですが、4カ月たっても誰も来ません。平成16年の3月、誰も来ないのでもう解散かな、というときに助けてもらったのが文部科学省の「地域子ども教室推進事業」です。全国子ども会連合会から大阪市子ども会育成連合協議会を通じてこの事業を受託することができました。このときに、子ども会やハートフレンドだけ、親だけではなく、地域の連合町会長、民生委員長、社会福祉協議会、PTAの会長、青少年指導員、校長先生、教頭先生、みんなに実

行委員になってもらって始めました。今から思えばこれが良かったと思います。そのときは「手伝ってください。アドバイザーに、仲間になってください。」とお願いに行っただけです。そして3年間、必死になってみんなでやりました。ハートフレンドができたときは6名くらいしか参加者がなかったのに3年後には250名、ボランティアは100名を超えました。民生委員、町会長、女性部長と地域の組織は縦割りなんです。でも、子どもを真ん中にした活動というのは、大人の私たちをつなげてくれるんだということを学んだんです。そして、ハートフレンドは9年間仮設をお借りして、その後無事に市にお返しして、近くの民家に移転しました。今、桑津小学校のすぐそばにいます。そして平成18年に法人化しました。継続したいな、新しい若い人にも何かバトンを渡したいなという思いで活動しています。

活動の柱は4つあります。一つは自主事業「てらこや」、後で出てきます。5年生でも1年生からやり直そうというものです。次に「文化部」。これは体育館で遊んでいます。読み聞かせとか、遊び、鬼ごっこもしますが、絵本が中心です。うちのOneBookは何だと思えますか。『やさしいライオン』です。それを大型紙しばいに書いて、読んで演じるというのをしました。去年の12月のクリスマス会にも『やさしいライオン』を舞台で子どもたちが演じました。そういう読み聞かせ、子どもたちが自分たちで本を選んで読むという活動を大切にしています。また、先ほど事例報告があった渡邊先生にも一度来ていただいて、読み聞かせをしていただきました。

3つ目は委託事業の「地域子育て支援拠点事業」。大阪市から委託され4カ所で実施しています。4カ所に膨れあがったのは、ハートフレンドのメンバーは最初15名だったのが、今43名もいるからです。いろいろなお母ちゃんたちが、「一緒にやりたい」「身近なところで私も社会参加したい」と、そういう人がどんどん増えたので拠点も増えました。そして、5年前に、障がいがある子どもたちの放課後の居場所づくりも始めました。私たちの仲間には重度の障がいを持っているお子さんもたくさんいらっしゃいますが、なかなかその子どもたちに合ったプログラムができなかったのが、5年前に専門職の方にたまたま巡り合えて立ちあがりました。ちょっとほかの活動は違うのは、平成16年からシニア世代の皆さんにもどんどん子どものところに、拠点に来てもらっています。

それから、4つ目の柱になる「おとなのてらこや」も立ちあげました。子どもの「てらこや」の教材をそのまま使って「おとなのてらこや」もしています。

今から活動を少し紹介します。まず、乳幼児期対象の地域子育て支援拠点事業。大阪市全体ではおおよそ一区に4カ所か5カ所、全区で120カ所を超えていると

思います。ハートフレンドは週5日型、一般型で基本4事業をしています。先ほどブックスタートが話題になりましたが、ここで初めて絵本をもらう人もいます。

山野先生のお話にありましたように、「えっ、同じマンションやったん？ えっ、同じところの町会やったん？」と、ここで初めて友達のできるお母さん方がすごく多いです。すなわち、桑津でも私のように隣近所に友達がいない、親もいない、親戚もいない、助けてくれる人がいない、そういう人がものすごく増えています。全国的にそういう人が増えている、孤立ですよ。知り合いがいない若い世代が増えています。自分も本を読んでもらったことがないから、読み聞かせしたことがなくて、このようなひろばで初めて絵本と出会う、ブックスタートで初めて絵本をもらうという人が増えているんです。実は、絵本を買えないおうちが多いそうです。ここでは絵本も貸し出ししています。東住吉図書館とも連携していて、ハートフレンドは仮設消防署の9年間は100冊ずつ借りて、ミニミニ図書室もしていました。なかなか図書館まで遠いから行けない人もいますので、そういうことも必要でした。図書館にはとても助けてもらっています。



でも、ここに来る人はまだ元気なんです。ほんまにしんどい人はひろばになんか来たくないんです。うちの子のことを言われたくない、私の子育てについてあれこれ言われたくない、評価されたくない、ほかの人に会うのは嫌、友達は欲しいけれども欲しいって言えない、不安だけれども不安が言えない。昔の私みたいです。どうしてそうなるのでしょうか。それは閉じこもる人が多いからです。家に閉じこもってなくても、山野先生のお話でもそうでしたね、メル友はできる、LINEはできるけれども、しんどいことが言えない。そういう人はひろばに来てくれないんですね。だからそういう声を区長にずっと届けています。

2つ事例を紹介します。一つは2年前の話です。ひろばにお母さんが飛び込んでこられて、その人は土曜日に、お父さんに子どもを預けて美容院へ行ったら、赤ちゃん、子どもが2人、玄関ですごく泣いたんですって。

帰ってきたら子ども相談センターから電話があったそうです。近所から警察に泣き声で虐待通報が入って、警察から子ども相談センターへ連絡があって、子ども相談センターから電話が入って事情聴取したいということでした。もうお母さんは泣きながらひろばに来られて、「徳谷さん、私ってね、虐待の親として大阪市のブラックリストに載るんですか。」と心配するので、私はきちっと事情を説明したら大丈夫ですから、と言いました。もう一つの事例は、初めての赤ちゃんで、お父さんが家にいない時お母さんがお風呂へ入っていたところ赤ちゃんが泣いて、お風呂から上がったら、ピンポンって玄関のチャイムが鳴って警察が来たということでした。

泣き声通報は義務だけれど、一昔前やったら、「どないしたん？そうか、赤ちゃん、泣いてんのか。お母ちゃん、困ってるねん。」って声掛けてくれたのが、今はすぐ通報されてしまいます。つながりがそれだけないんですね。

背景にあるのは親の孤立化です。親が孤立すると親子が孤立してしまう、子どもも孤立するんです。つながりの貧困、絶対的にお金がないのも貧困ですが、心の貧困というのを私たちはとても感じます。

地縁がない。土地に知り合いがない。そういう世代が本当に増えています。そういう事態に対応するため、東住吉区では平成26年度から「キャッチ&フォロー事業」が始まりました。大阪市の24区の中で東住吉区だけの独自の事業です。東住吉区の保健福祉センターの乳幼児健診受診率は98%なんです。その時に専門家である保健師さんや臨床心理士さんに、心配があるって言われたお母さんがもう不安でたまらないのです。「もう怖くて赤ちゃんが抱けないんです。」「うちの子じゃべらない。2歳で一語も出ないので心配でしょうがない。」っていうお母さんをペアレントトレーニングとして2時間を4回、1カ月見ます。1歳半からキャッチして、幼稚園、保育園、小学校、中学校へ上がるまではフォローしようという事業です。

このフォローをする部分、ペアレントトレーニングとフォローする部分を、ハートフレンドと東住吉区社会福祉協議会が共同体で受託しました。この写真はこれをしている様子ですけれども、前で講座をして後ろで一時保育を地域の人にしてもらっています。もちろん、個人情報保護とか、発達の研修をしっかりともらってやっていただいています。そうしたら、皆さん、お母さんは変わるんですよ。山野先生の話にありました、同じ場で、ほかのお母さんの話を聞く機会ができます。はじめはいいやや来るんですよ、ここへ。でも、いやいや来てでも、ここで友達ができる、ちょっとほかのお母さんから褒めてもらう、「えっ？うちの子、泣かないやん。」って自信ができる、自信ができる

お母さんは変わるんです。

平成27年度、受講生の手による受講生のための同窓会「ほっとサロン」というのができました。年3回運営しています。ここのアンケート結果ですが、今満足度100パーセントなんです。なぜかというと、子どもがかわいいと思えるようになるんです。私はペアレントトレーニングのプログラムのトレーナーもしていて、それも大事ですが、それよりも場の力が大事なんです。ほかの人と関わりができるようになる、それが自信につながります。また、自分の子がほかの子と遊べるとそれも自信につながります。

講座では「褒め褒めタイム」というのをします。何でもないことを褒めてもらう、何でもないことを褒める力ができる、それが、そのお母さんを変えていくんですね。そして講座のフォローですが、ここからが大事です。講座でいくら元気になっても、家へ帰ってから隣近所に誰も知り合いや声を掛けてもらう人がいない。図書館にも本を借りに行けない、実は図書館で本を借りられるのを知らない人もいますよ。そういう方々を図書館とか地域の民生委員さんとか町会長さんとかで応援団をつくるのが私たちの大事な仕事だと思っています。乳幼児期から、幼児期、学童期に上がるまでを寄り添ってサポートしていく、このコーディネートする機関や人が必要だということですね。それがどんな場であれ、図書館もそういう重要な役割をいただいていると思うんです。だって、そこへ行けばほかの人と会えるじゃないですか。皆さんが笑顔で迎えてくれる、そういう場が必要ということです。

先ほどお話しした「てらこや」で子どもたちは変わります。ここに来るのは、どちらかといえば、5年生でも1桁、2桁の足し算、引き算ができないような子たちです。今62名来ていますが、半分は何らかの発達障害があります。集めたわけではありませんが、自信がない、学校にもなかなか行きにくい、そういう子たちが来ています。子どもたちを支援するのは地域の人です。

私は子ども会からハートフレンドを始めて今15年です。去年初めてある子に言われました。「徳谷先生、私、「てらこや」へ行きたい。だけど1時間しか行かれへんねん。」と。「てらこや」って2時間で月2,500円なんです。1回2時間、月4回で教材費とおやつ込みで2,500円いただいています。でも、彼女は1時間で帰ります。何で帰るのかなってはじめ思っていました。そうしたら、彼女があるとき私に言うんです。「だって先生、もう1時間いたら1,000円要るやん？うちあと1,000円ないねん。」よくよく見ると、着ている制服がこてこてで洗濯していない。すぐに私は学校へ行きました。そうしたら、学校も、「もう1年生の頃からなんですよ。」って言うんです。1年生の頃から、ものすごい大変な状況だったのです。学校もキャッチしている。

区役所もキャッチしている。でも、お母さんがなかなか心を開けないんです。お母ちゃんも経済的にも精神的にもしんどい。彼女は勉強したいけれども、問題集も買えないんですね。ここで「ああ、そうか。」と納得しました。時々500円払ってくれますが、参加費はたまっています。でも、参加費はいつでもいいから、何とかつなぎたいと思っています。学校と連携しながらやっています。

不登校が増えてきています。この写真の2人なんですけれども、1人目の女の子は中1になりましたが、4年間学校へ行けていなかった。理由は分からないそうです。もう1人、男の子は今4年生になりましたが、この子は1人で登校できません。理由はお母さんと離れられないんです。理由が分からない。そういうことも増えていきます。

そういう子どもたちを何とか元気にしたい、でも、どうしていいか私に分らなかつたんですね。デイサービスを受けても元気にはならない。放課後おいでと



言っても来ない。人目が気になるからです。先ほどの4年間行けていない子は、明るい時間は家の外に出られないんです。それで去年の1月始めたのが、ちょうど1年たつのですけれども、「てらこやワイワイクッキング」というものです。夕方6時にハートフレンドへ来て、地域の食事サービスの人たちがご飯をつくってくれて、「遊ぼう！何もせんでええ、ごろごろ寝ていてもええ、手伝わんでええ、ご飯を食べに来て、ただ遊ぶだけやけど来ない？」って言うと来たんです。先ほど話した4年間学校へ行けなかつた子も1人で登校できなかつた子も含めて今6名来ています。これがその風景ですね。写真の向こう側の大人の人たちがつくってくれている人です。月2回しています。

子どもに許可をもらっている写真をお見せしますが、ここで笑っているでしょう？遊んでいるでしょう？初めは笑わないし、ほかの子とも遊ばないんです。最初はみんな、ほかの子と関わって遊べないんです。でも、月たった2回でも、もう20回目を超したんですが、遊ぶようになりました。

子どもからの声は、「ワイワイはいっぱい笑って楽しい。」「ワイワイでは、不安は消える。」と言うんです。やはり子どもが主体になる居場所というのは、子どもが自分で遊びをやりたい、これがしたいって思うまで待つってということだと思っています。先ほどの4年間学校に行けなかつた子の事例ですが、今、中1になって、ワイワイクッキングへ来るようになってから、彼女、学校へ行けているんです！すごいと思いませんか？何もしていません。でも、彼女は勇気が出た。学校へ行きたかつたんですって。もう一回学校生活をしたかつた、でも、怖かつた。クッキングではほかのお母さん方やほかの地域の人が、「やあ、元気やった？これ食べる？」「お茶を入れてくれてありがとう。」って言うだけなんです。それでも子どもの自信につながります。

先ほどお話しした学校に行けない男の子は、お母さんから離れられないから、彼は1人で登校しませんでした。放課後遊びに行きませんでした。1年生のときからずっとです。体育のある日は休みます。なぜか彼に聞いたら人目が怖いと言うんです。体育のある日、前に立つのが怖い。だから、今、学校へ行けていない子が多いと言われますが、いじめが原因の子が多いわけではないです。人の目線が怖くて学校へ行けない子が多い。その子らは小さいときから親子だけでいる子がやっぱり多いんですね。隣近所でもまれて、いろいろな集団の中で育つ子が減っているということが、私は、ひょっとしたら影響あるのかなと思っています。その1人で登校できなかつた子が学校へ行くようになるんです。体育のある日も。なぜかという、彼は折り紙が得意やつたんです。ワイワイクッキングで今折り紙博士と呼ばれています。彼が折り方を教えてくれた紙飛行機はビューって飛ぶんです。だから、みんなが教えて、教えてと言う。人に教えると自信がつくんですよ。彼は、今とっても元気になって、みんなに折り紙を教えてくれています。自信を持てたら、学校へ行けてなくても折り紙が上手、絵本を読んだら上手、紙しばいができる、何かができればいいんです。彼は折り紙が大好きです。今、4年生になって毎日学校に行っています。それは私たちが偉いんでもなく、私たちが何かしたわけでもないんですね。やっぱりそこに来る家族以外の大人の人の力なんです。それがとても大事だということですね。

エンパワメントできる場が大事なのです。子どももお母さんもそうです、キャッチ&フォローのお母さん方もそうです。大人も子どももそうなんです。出番がある場所っていうの、ちょっとささやかなことでも褒めてもらえる場所っていうのは元気になります。元気になると、生きてみようって意欲が湧く。あれをやりたい、これをやりたいと思える、そういう場がとて

も大事だということです。地域の私たちはそれをつくる使命があるように私は思っています。そのためには、地域の中の大人のつながりがとても必要ということです。ハートフレンドだけではできません。私らだけではできません。とてもとても無理です。私は自分がつらくて1年間うつ病で寝たきりやったんですから。だから、そんな私ができるはずがないと思っていました。でも、私自身も今、桑津の中で、いろいろな人に声を掛けてもらえるようになりました。この活動を通じて。だから、私も今みんなの子どもたちや地域の人に生かされている自分があると思っています。

この写真は「おとなのてらこや」です。シニア世代、地域の高齢者の方がたくさん来てくれています。ここで、1時間半のプログラムで、100マス計算、漢字、音読をやるんですね。絵本も読んだりします。ここで「てらこや」の子どもの事情を話すと、「おとなのてらこや」の生徒が、「じゃあ、徳谷さん、手伝おうか。」と、子どもの「てらこや」の先生になってくれるんです。

そうやって、地域の中で、子どもたちやお母ちゃんの子育て、子育てを支えていく、つなぐことの大切さをとても痛感しています。不登校や学習支援については、先生も頑張っています、学校も頑張っています。でも、もう学校だけでは無理です。やっぱり学校は、先ほど山野先生がブラットホームとおっしゃいましたが、地域の人たちが学校を助ける、地域の資源が学校を助ける。いろいろな資源、もちろん図書館の皆さんも貴重な資源ですね。私たちNPOもそうです、地域のいろいろな団体もそうです。そこがやっぱり子どもたちを支えるため、学校を支えるために、力を合わせていく、それがとても大事だと痛感しています。

これは、地域の資源のネットワークですが、ハートフレンドは、子ども・子育てプラザとか、図書館とか、コミュニティ協会とか、民生委員さんとか、そういう地域の資源ともしっかりつながっているのです、日ごろのお付き合いを大切にしています。日ごろのお付き合いって難しくないんですよ。あいさつだけだと私は思っているんです。青少年指導員が自転車講習会をしたら、「じゃあ私、時間あるから行くわ。」。そうしたら、ハートフレンドが子どもまつりをしたときに、青少年指導員さんが、「ちょっと行こうか」。図書館さんが絵本のおまつりをされたら、ちょっとのぞきに行く。そうしたら図書館さんが、「いや、徳谷さん、こんないい本、また貸せるよ。」っていうようにいろいろな情報をくださるといって、そういうお付き合いを大事にしていきたいなと思っています。

団体同士がつながると、やはり、自分たちが欠けている部分、自分たちができない部分を補えます。ハートフレンドの目指すところというのは、地域団らんの

場だと思っています。今ワイワイクッキングをしていますけれども、そういう場が地域の中でぼつん、ぼつん、ぼつんと出てくる。そこにいろいろな資源が集まる。ハートフレンドは、仮設消防署跡に9年間いたときには参加者が6名ぐらいで現金はなかったのですが、地域の人たちに一番たくさんもらったものは本なんです、3,300冊も。整理に1年間かかりました。ミニミニ図書室を一部屋作って貸出を始めたのです。9年間は東住吉図書館に応援してもらいながら、東住吉区が一番端っこの桑津でハートフレンドはミニミニ図書室を運営していました。その地域の人が一冊一冊本を持ってきてくださるんです。「この本な、大事やねんけど、今あんまり読めへん、捨てるのももったいないから、ねえ、ハートフレンドやったら子どものために使ってくれる?」、いろいろな本が集まりました、3,300冊ですよ、皆さん。地域の方々に絵本や普通の大人の本もいただきました。それを貸出する、本は人と人をつなぐ、心をつなぐ大事な文化財だなと私たちはもう痛感したんです。だから、地域団らんの場にも、これからどんどんそういう絵本や、大人の方も喜ばれるような本も入れていきたいなと思っています。

私たちハートフレンドの目指すところ、包括的な子育て支援の実現を目指して、地域は家族ということをテーマに、地域団らんの場を増やしていきたいと思えます。図書館の皆さんもこういう地域のNPOをうまく活用して、ぜひ一緒に包括的な子育て支援の実現に向けて一緒に前進させてください。

では、時間が来ました。私の話を聞いていただきまして本当にありがとうございます。早口ですみません。ありがとうございました。(拍手)

< 基調報告 >

児童サービスの現状と課題

公益社団法人日本図書館協会
児童青少年委員会委員 杉岡和弘

日本図書館協会児童青少年委員会の杉岡と申します。
姫路市立城内図書館から参りました。

2015年度に全国公立図書館児童サービス実態調査
というのを実施いたしました。集計作業に時間がかか
りましたが、今回この機会を得て、その内容を皆さん
に報告しなさいという命を受けまして、この度報告さ
せていただきます。なるべく今までの調査も併せて、
しかも、グラフで分かりやすく説明したいと思いま
すので最後までお聞きください。よろしくお願いい
たします。

調査日は2015年の11月から2016年の1月15日、調
査時点は、2015年の4月1日現在ということになります。
対象は都道府県立図書館と全国の市町村立の図書館で
す。今回は時間の都合上、市町村立図書館の集計につ
いて報告させていただきます、あらかじめご了承ください。



調査件数ですが、2,928件でありました。図書館年鑑
によりますと、2016年4月1日の図書館総数は、3,203
館ですから、91%の回収率となりました。右の日本地
図はコロプレスマップといいまして、図書館数が多い
ほど色の濃度が高くなっております。東京都が381館、
千葉県が145館、埼玉県が143館、大阪府が130館、北
海道が106館というふうに続いて、100館以上図書館が
ある都道府県というのは、それらの県になります。

調査内容でございますが、1999年と2003年の調査の
継続調査ということですので、それを引き継いでアン
ケートを実施しております。その質問内容の項目とい
うのがこちらになります。児童サービスの有無、施設
の広さ、児童サービス担当職員、研修の実施、児童資

料、選書・保存、参考業務・読書案内、おはなし会・
集会行事、子どもに関する大人向けの講座の有無、利
用に障がいがある子へのサービス、多文化サービス、
乳幼児サービス、団体貸出、学校支援、他機関との関
わり、ボランティアの協力、コンピュータの利用、児
童書の分類・絵本の配列、広報活動、子ども読書活動
推進計画、児童サービスで重要だと思ふもの、ござ
います。

この1999年と2003年の調査につきましては、日本図
書館協会より報告書が発行されていますので、皆さん、
図書館にお戻りになられたら、1999年と2003年の報告
書があると思いますのでご覧ください。

それでは一つ一つ内容を紹介していきたいと思いま
す。まず、「児童サービス」の有無でございます。オ
レンジのほうがあるということで、2015年から1999年
まで、こういうふうに、上から下に古い項目に、下に
下りてグラフ化しています。このグラフをご覧いただ
くとお分かりのとおり、ほぼ99%の図書館が児童奉仕
を行っているます。ただし、このように児童サービ
スがいないというふうに報告している館が徐々に増えつ
つあるということも今回の報告で分かったことです。以
前の報告では1桁だったのが、2桁の数の館がしていな
いという報告になっております。

次は「施設」、児童室の有無、開架室の広さという
ことで問いかけてしております。やはり、50㎡～100
㎡、100㎡～150㎡というのが一般的な広さであるとい
うか回答件数が多いですが、グラフを見ていただい
てわかるように、250㎡以上が多く報告されています。こ
の250㎡以上という児童室が非常に多いというのに
興味を持ちまして、一つずつきちんと調べようとい
うことで調べてみました。

そうしますと、このグラフは箱ひげ図という図なん
ですが、大体データの散らばりがどんなふうになって
いるかというのを示すグラフですが、2015年の調査を
描くと、ケース1のようになっており、外れ値が存在
して、かなりひずんだグラフになっているという
ことがわかります。この外れ値によって、平均値が引
き上げられ平均が282㎡となったように思うので、平
均値と偏差を求めて外れ値を除外しました。そして、
あらためて平均値と偏差を求めて、標準偏差を求め
てというのを繰り返して行って外れ値を外していきま
すと、ケース3、ケース4というグラフが描かれて、平
均158～140㎡ぐらいの平均的な児童室の大きさが浮
かび上がってくるというようなことになります。いず
れにせよ、160ぐらいから140㎡というのだけ頭の隅っ
こに入れておいて、この値が正しいかどうかというこ
とを今後探していきたいと思えます。

次は、「児童サービス担当職員」でございます。児
童サービス担当職員の質問では、任用の仕方、雇用別

というような集計のほか、児童担当の年数、あるいは経験年数、司書資格の有無、兼務、専任別というような調査を併せてしております。今回は任用別、雇用形態別の集計はちょっとできなくて、その後者のほうのクロス集計をさせていただきました。

こちらが経験年数と担当年数をクロスさせたグラフになります。これはバルーンプロット図というふうになるんですが、見たところ、経験年数と担当年数は一致した職員が多いということが、このグラフで読み取ることが見えます。つまり、児童担当職員というのが引き続き児童担当をしているというものが多くいることをこのグラフは示しているよう思います。次は、縦軸に資格のありなし、担当の専任兼務という勤務の形態と資格の有無ということを示したグラフですが、司書資格を持ち、しかも児童サービスを兼務という形で携わっているというものが多くいることを示しています。

その4つの項目をさらに多重クロスさせたものがこちらのグラフでございます。経験年数、担当年数が、長くなるほど有資格率が高くなっているということ、また、経験年数と担当年数が一致していることで、また引き続き児童サービスに携わっているものが多くいること。しかも、その関わり方が兼務という形で携わっているというものが、この中では浮かびあがってきます。これは資格を持っているものは兼務という形で引き続き児童サービスに携わっていることを示しているように思われます。クロス集計の解釈につきましては、対応分析などの分析方法もございますので、正確にはもう少し時間をかけて調査する必要があるんじゃないかと思えます。

次は「研修の実施」ですが、自治体内での児童担当研修の実施状況です。これを見ていきますと、60%以上がしていないと回答して、40%弱が実施しているというふうに答えているのが現状です。また、3回の調査を通じて、この研修の実施についてはあまり変化が見られないということです。時間経過があるんですが、そういうことには注目したい。ただ、調査件数自身が2003年と99年の調査件数は、非常に少ないというのか、ちょっと違う質問内容だったので、少なかったんですが、それにしてもあまり変わらないということが、ここでわかります。

児童資料につきまして、こちらのほうは、特に日本語の児童図書についてのみ集計しました。これでは2万冊～3万冊の児童書の開架冊数が多いということを示しておりますが、平均的に2万～3万冊の児童書数が平均的というのは少し大き過ぎるというのもやっぱり感じるところでございますので、これもやっぱり箱ひげ図で、どのような分布をしているのかを見てみますと、やはり外れ値がありました。これは開架冊数です

が、書庫に入っている本も集計をしている感があったり、あるいは、集計をする際の私たちの調査の者が集計ミスをしているというのもありますので、そういう大きな数字に引っ張られてしまっている。これもやっぱり1回だけ平均と標準偏差を求めて外れ値を外してみますと、大体平均が、というような、1万8,916冊というような、2万弱の平均が見えてきました。

先ほど、広さを調査していますので、外れ値の外した広さと、その先ほどちょっとしました外れ値を外した開架冊数等を散布図に描いたものがこちらになります。この両方につきまして、両方とも数値があるものだけ、リストワイズというんですけれども、広さと冊数とどちらも数値が入っているものだけをピックアップしたら、2,185ありました。それを散布して回帰曲線を描きますと、 $y = 57.4x + 10,329.4$ というような式が、回帰式が出てきました。広さの平均が158から140㎡でしたので、大体150㎡をこの式に代入しますと、1万8,939冊という数値になります。大体平均ですね、先ほどの平均、1万8,916冊と近似値になっているということで、大体こういうふうな値だということが分かります。一般的に、図書館建築上は、100㎡当たり1万冊というのはいわれていますので、やや超過ぎみの児童室という姿がちょっと浮かび上がってくるのではないかなというふうには思いますが、それにしても妥当な数値ではないかと思えます。

次に、「選書・保存」です。選書担当者につきましては、全員で行うというのが増えてきています。それほど大きく伸びているわけではないですけれども、収書担当者だけというのが減って全員でそれに当たっているというのが増えていきます。

次は「収書方針」と「選書基準」です。選書基準の明文化につきましては、明文化をしているというのが2015年では58%に増えております。その前、その前々の調査の結果を見ますと、まず32%、35%というふうな値でしたが、過半数以上明文化しているという館が増えてきている。一方、それを公開しているか否かというふうに問いをかけると、公開しているのが27%、いずれにせよ、30%強か弱かの値がそれぞれの姿になっております。

続きまして、「選書方法」ですが、問いかけでは、「現物選書」か「リスト選書」か、「指定図書購入」か、あるいは、そのほかの方法をしているかということでお聞きしますと、圧倒的にリスト選書で選書をしている。現実的には現物選書とリスト選書を併用しているというようなことだろうと思うんですが、やっぱり現物選書だけでは心もとないので、メインをリスト選書で行っているというのが一般的な姿ではないかというふうには思えます。

次に「レファレンスの担当者」についてです。レフ

アレンスの担当はやっぱり全員で行っているというのが一般的な姿です。

それから「おはなし会」の実施につきましてですが、ご覧のとおり、ほとんどの図書館が実施しているということですが、実施していないという館が、7%~14%に増えているのは少し気になるところでございます。さらに、内容はどのようなものを行っているかということで見ていきますと、「読み聞かせ」、「ストーリーテリング」というのは相変わらず多いんですが、今回調査した中で、「わらべうた・手遊び」というのが一番大きく伸びているのが分かります。

どのぐらいの回数で、どういう対象のものを実施しているのかということで、2015年の調査で「幼児」と「学童」とに分けてどれぐらいの回数頻度をしているのかというのを問いかけております。右側のほうは全体の回数になります。年間回数でしたので、12で割って月ごとの回数に調査し直して集計しています。特に6回以上が徐々に増えているというのが今回の調査の特徴になります。

その次におはなし会の実施者、誰がおはなし会を実施しているかということをお聞きすると、「職員とボランティア」の組み合わせというのが圧倒的に多くなっているんですけども、ボランティアだけというものが16%に減少しているというのも一つの特徴です。「大人向けの講座など」の実施につきましては、実施したという館が増えています。

利用に障がいのある子へのサービスについては、「実施した」「実施していない」ということで見ていきますと、このような変化をしておりますが、調査年によって数字が少し変動しているのがどうして、どういうふうな理由なのかがちょっと少し分かりにくいところです。その内容ですが、「資料貸出」と「出張お話し会」というのがメインにあります。ただし、こちらのほうに書きましたが、「病院サービス」については21館から33館に増えているというのも面白い特徴かなと思っています。

次は「多文化サービス」でございます。実施しているというのが増えています。その内容につきましては、アジア言語とヨーロッパ言語というふうに区分けをしますとヨーロッパ言語がこれぐらいの大きさになり、特に、英語がメインになるんですが、そのほかのポルトガル語とかスペイン語も増えています。アジア言語も2015年につきましては、全体的に増えているというのが一つの特徴です。

「乳幼児サービス」につきましてです。乳幼児サービスにつきましては、実施しているというのが57%から85%に急激に増加しているというのが報告されております。その内容につきましては、パンフレット類の作成など、あるいは、「わらべうた・読み聞か

せの会」の実施というのがメインになっています。27%の「ブックスタート」も、一つ大きな特徴になります。

「団体貸出」のほうなんですけど、団体貸出を実施しているというのが90%、ほぼ9割の図書館が実施しているということ。その相手はどこかというところ、学校、学級、あるいは幼稚園、保育所というのが多い数に当たっております。

「学校支援」につきましてですが、学校支援を実施しているというのが89%、かなり学校支援に力を入れ始めています。内容につきましては「情報交換」や「資料の貸出」がメインになっております。学校支援の中身につきましては、コンピューターの「スタンドアローン」や「一部スタンドアローン」というふうなネットワークはつながっていないんですが、機械化は進んでおる状況になっています。ただし、図書の運搬につきましては、職員や先生の手を借りているのが現状です。

少し時間が少なくなっていますのではしょっていきますが、インターネットについて。これも少し特徴なんですけど、「OPAC」と「インターネット」についての質問で、インターネットは接続する館が大きく増えています。

「ボランティアの協力」については84%があるということ、その内容についてはおはなし会とかが多いということが示されております。

最後に、いつも調査の最後で、児童奉仕で一番重要だと思われるものは何ですかというのを聞いているわけなんですけど、本年度もやはり「選書」が一番大事だということが一つ特徴だということを最後のまとめで報告させていただきます。

最終的にはこの調査報告につきましてはまとめまして、報告書として発行したいと思っています。どうもありがとうございました。（拍手）

<講演・ワークショップ>

「地域・社会で子どもをはぐくむ ～読書活動を通して考える～」

武蔵大学 人文学部
教授 武田信子

今から約1時間半、どうぞよろしくお願ひいたします。東京から来ましたので大阪弁がしゃべれません、申し訳ないんですが、標準語といいますが、東京語で話させていただきたいと思います。生まれはちょうど東京と大阪の真ん中の名古屋です。

図書館に関する仕事をしているわけではありません。本のことにに関して、皆さんのほうがずっと詳しいだろうというふうに思います。ただ、地域のこと、子どものことをずっとやってきましたので、そんな視点から今日は、この時間を務めさせていただきたいと思っております。どうぞよろしくお願ひいたします。

この研究会の主題が「一人ひとりの子どもの読書活動を支援するために」ということで、子どもの環境を考えていきたいと思っています。

お手元のほうに3枚だけ資料があります。そちらのほうの資料を後で使っていきたいと思っています。今ここに写真はある、ちょうど1月6日にデンマークのコペンハーゲンを歩いていてみつけた町の中の図書館を写したものです。『デンマークの図書館』という本にあるように、市、地域と、図書館が結び付くというような活動をしていると言われていました。それでちょっと幾つかのところをのぞいてきました。

皆さんのほうがずっとご存じだと思いますけれども、16年前、日本でも「子どもの読書活動の推進に関する法律」というのができて、その言葉をここに書いただけなんです。「すべての子どもが」と言ったとき、皆さんはどんな子どものことを思い浮かべるでしょうか。例えば、自分では図書館に来ることができないようなお子さんというのがいらっしゃるね。そういう子どもたちも含めて「あらゆる機会とあらゆる場所において」、これもどんな機会を皆さんは思い浮かべるでしょうか、どんな場所を思い浮かべるでしょうか。「自主的に読書活動を行うことができるよう、積極的にそのための環境の整備が推進されなければならない」というふうになっています。

東京には国際子ども図書館というのがあります。右側のほうの写真は名古屋の鶴舞中央図書館、私が小学校2年生のときに初めて図書館というところに行って、入り口からもう光がさんさんと差っていて、たくさん本があって感動したんですね。そのときの光景を私は今でも覚えているんですけども、こんなすてきな場

所があるんだというふうに思ったその図書館の今の写真ですが、当時と多分建物は変わっていないんじゃないかというふうに思います。

皆さんは図書館が大好きでこの仕事をなさっておられると思うのですが、実際のところは本の売りあげはどんどん落ちていて、地方の本屋さんでは全てアマゾンに取って代わられるというような状態の中で、読書離れが起きているのは、もちろん皆さんはご存じだと思います。地域によっては、市長さんが音頭を取って、いろいろな活動を、チャイルドフレンドリーな図書館と言いながらやっているところもあれば、行政の隅っこのほうにいるというような意識のところもあるだろうと思います。



今日、この時間は、一人ひとりの皆さんが、「あっ、こうすればいいんだ。」と思って持ち帰るものではありません。そういう答えが1時間半で出るのであれば、もう皆さんはすでに出していたと思うんですけども、いろいろな問いを私の方で投げかけますので、一体どうしたらいいのかということ、これから先考え続けていくきっかけを持って帰っていただければというふうに思っています。

子どもに対して図書館、あるいはその関係者ができることは何なのか、図書館自体の環境、今、外(えほんのひろば)を見せていただきましたけれども、とっても明るくて、本が取り出しやすい形にセッティングされていましたが、図書館そのものはどんな環境であればいいのか。関係者がどう連携すればいいのか。それから、自分がやりたいことと、そこに来る人たち、当事者の人たちとのニーズが合っているのかどうか。また、先ほど打ち合わせでお話がありましたけれども、高齢者の方たちがとても増えていて、そういう方たちのボランティアの場としても、図書館がこれから機能していくだろうということが望まれるわけですが、その方たちのニーズと子どもたちのニーズを、うまく合致させることができるのだろうか、こういったことを考えていきたいと思っております。

そのために、子どもたちがどう発達していくのかと

ということですが、私はもともと臨床心理士で、心理カウンセラーとして精神分析などもずっとやってきましたので、発達というものがどういうふうになっていくものなのかを見ていきたいと思います。この写真ですけれども、赤ちゃんが、スマホでディズニーか何かのDVDを一生懸命、多分食卓で見ているところです。赤ちゃんにスマホを持たせて、0歳児がうまくスマホを操作できることをとてもお母さんたちが誇らしくインターネットにアップしていますよね。そういう環境の中で、子どもがどういうふうになっていくんだらうかということ、それと、本というものはどういう関係性になっていくのかということを考えていかなければならない時代に入ったのだらう、というふうに思います。

子どもを取り巻く環境の変化や社会問題があります。この社会問題に関しては、昨日お話しされた山野則子先生、私は一緒に本などを書かせていただいている、その縁で今日来てさせていただいたんですが、山野先生が取り組んでおられる問題の中で、本に最も届きにくい子どもたちに、どう本を届けていくのかというようなことも考えていく必要があるのかもしれない。

そのために、じゃあ、どうしたらいいんだらうかといったときに、国内、あるいはこうやって集まってみんな情報交換をするとか、あるいは国際的なさまざまな情報を集めてくるかっていうことで、多様な図書館というものを知っていくこと、知った上で、自分たちの地域でできることは限られていると思いますから、自分たちの地域の子どものニーズに合わせて何が必要であるかと考えていくという作業が必要なのだと思います。この辺りに関しては、もう少し後に戻ってお話することになるだらうと思います。

それで、今せっかく皆さんがそこに座っていただいていますので、ちょっとグループワーク的なことをしたいと思います。ただ、その前に、まず個人でワークをしていただきたいなと思っていて、それが資料の50ページのところにあるものです。

言葉はどんなふうに関連されていくのかということをやっと考えてみたいと思ひまして、50ページの《さん》とあるところはご自分のお名前を、ニックネームでもいいので、何々さんのというふうを書いていただけますか。その次の括弧の何歳は、ちょっと置いておいてください。「ことばの絵地図」というのを書いていただければと思います。

私は、小さいころ、母が家にいない時間が多かったんです。子どもというのは、大人の、自分の周囲にいる大人の言葉で育っていきますよね。だから、小さなころは、私も母の言葉を聞きながら育っていたと思うんですけども、途中から母がいなかった時期、ソノシートという言葉が分かる方ってこの中の本当にごくごく少ない方だと思うんですけども、レコードの薄

いものですが、ペラペラなプラスチックみたいなもので言葉を聞きました。ソノシートに物語が入っていて、それを自分でプレーヤーにかけて、針をこうやって落とすと、そこでお話が流れる。それを自分でページをめくりながら、その文字と対応させながら、私はお話を聞いて言葉を育てていったっていう、そういう体験をしてきたのだと思います。私は直接そのときのことをすごくよく覚えているわけではないんですけども。それで、周りにそんなに友達がいたわけでもなかったのだから、かなり早く言葉を覚えて、幼稚園のころには『リンドグレーン全集』であるとか、小学館の本であるとか、ほとんど全部自分で読んでいたというような言葉の言語環境の中にいました。

では、皆さんは、どんなふうに関連力、書く力、聞く力、そして話す力を身に付けてきたでしょうか。研究では、親の言語能力が子どもの言語能力と比例するっていうふうに言われていますよね。そうすると、いつも歌ったり、踊ったりしながらペラペラしゃべりまくっているお母さんの下に育った子どもは、そういうことを耳から入れていますから、もしかしたら言葉に出さないかもしれないけれども、そういう情報が入っている子どもということになります。それから、さっき言っていることと今言っていることが全然違うような矛盾していることを勝手に言うようなご家族がいて、そういう言葉を赤ちゃんのころからずっとそれを聞いていたら、論理的に思考するということをしなれない人になるかもしれません。また、ものすごく静かなご両親さんだけでも、2人の会話がすごく知的で、ぽつん、ぽつんという言葉がものすごく慎重でありながら論理的だというような、そういうご家族で育ったとしたら、その子どもも非常に緘(かん)黙であるかもしれないけれども、頭の中で考えているかもしれないですね。

つまり、小さい頃に獲得した言語がその人の志向のタイプや流れまでつくってしまうかもしれないと考えたとき、皆さんが覚えている小さい頃の自分の言語環境って、どんなふうだったでしょうか。ここに書いてもいいですし、書かなくてもいいです、絵で表現してもいいし、絵ではなくて言葉で表現して思い出してもいいです。

今から少し時間を取りますので、まず個人でやってみていただけますか。後でそのグループの人でシェアしていただきたいと思っているので、多少は見られるということや、あるいは見せないで口頭で言っていたでもいいけれども、そういったことを考えながら、書いてみてください、どうぞよろしく願ひします。一場面を切り取って絵を描いていただいてもいいですよ、どこかの公園に行ったとき、ああいうふうな声を掛けられたな、あのときに、あの一言はとっても自分

には大事だったな、というようなことでもいいですし、お話を一回だけ読んでもらったことがある。その絵本のあのシーンがとっても印象に残っているから、あのクマさんの絵を描こうということでも構いません。

あと1分ぐらいで。本当は1時間かけて書きたいところかと思いますが、あと1分ぐらいでいったん止めますね。



今作業を続けていただきながら、4人(または5人)のグループを作りましょう。グループができたら、まずお互いに知り合うってことをしたいと思います。図書館って、みんなお互い知らないで、そのまま、例えば親子で来たら2人だけで本を読んで帰ってしまう場所だったりしますよね。けれど、地域でつながりましょうとか、地域の核になりましょうっていうことになったら、そこに顔見知りがあったほうがいいと思いませんか？ もちろん、静かにしていきたいという方は、それを尊重しつつも、今日は図書館側の人たちの集まりですから、一緒に話をしてもらおうように動くのはいかがでしょうか。きっかけをこちら側がづくらなければ、この1時間半、4人がせっかく座っていても何もしゃべらないということになるので。私がきっかけをつくる役割を果たしますので、皆さんも地域の中で人と人が、利用者さんたちがつながっていくためにできることって、それぞれの立ち位置で何だろうというふうに考えていただけたらと思うわけです。

その4人(5人)の方で順番に簡単な自己紹介をしていただきたいと思います。誰から始めるかは、4人の中で一番、何かやっぱり中指がいいかな、中指が長い方を探してください(笑)。じゃんけんしているところもありますね。別に誰だっていいんですけども、手を出すと近づくじゃないですか。声掛け合いますよね、しかも、あまりにばかばかしいから笑うし、勝ち負けはないしって、こういうことを入れていくってこともつなぐ側の役割なんですね。それで、一番長かった人は自己申告で手を挙げて、その方から時計回りに自己紹介をお願いしたいと思います。お一人1分です。1分たったところで、私が切っちゃいます。そうしたら、

次の人に移っていただくという形で4人のグループと5人のグループがありますので、5人のグループの5人目の人が話をしているときは、4人のグループはもう別の話をしていたらいいと思います。

自己紹介は、どこから来ました何々ですと言うのもいいんですけども、それはもう一言だけにして、今そこに書いた私何歳のころこんな言葉の環境の中になりましたって話をしていただければと思います。よろしいですか。じゃあ、1分を計っていきたいと思います。よろしいですね、よーい、どん。

(1分経過)はい。おしまいです。それで、話すほうの人は一生懸命話をしてくださっているのでポイントは聞く側です。聞く側の人、この人はこういうふうだったのねって、どれだけ一生懸命聞けるかで、話す側の人、話しやすくなります。人と人がつながっていくためには、まず、心地良いことが必要だから、こちら側がスタッフであるのだとしたら、心地良い場をつくるということを聞く側の人、配慮していただけたらいいだろうというふうに思います。どういうふうに聞いたら、話す人が心地いい感じで話せるのかなということを考えながら、聞いてください。じゃあ、左側の人になりますね、時計回りだから、次の方、よろしくお願いします、どうぞ。

(1分経過)はい、ありがとうございます。じゃあ、今度は話す側のことを言いましょうか。子どもを対象に読み聞かせをしたりするっていう仕事も皆さんの中にあるかもしれません。そうすると、つまらない話でもなぜか面白くなってしまったりに情感を込めてしゃべることができるか、いろいろ自分の話し方のくせがあって、もう普段からキャーキャー言っていたり、それから、大阪のおばちゃんというタイプの方もこの中には若くてもいらっしやるかもしれないし、すぐおとなしいタイプの方もいらっしやるかもしれない。だとしたら、そのおとなしさというのを利用しつつも、どんな語り方ができるかなとか、自分は図書館の中で、どんな役割を果たすタイプなのかなというようなことも考えながら、今度は語る側の人、自分の語り方を意識してやってみてください。

じゃあ、3番目の人、だんだんハードルが上がっているでしょう?(笑)、初っぱなからすみません。いいんです、みんな今笑ったでしょう。ということは、みんな似たように「何それ?」って思っているということだから、大丈夫ですね。「今日すっきりするように」って最初に言っていないよ、私。今日、帰ってもやもやして、「何だったんだ、あれは。」って思っていていただければと思っています。

じゃあ、行きましょう、よーい、どん。

(1分経過)はい、終わりです。公共図書館にはいろいろな人が来ます。自分の好きな人だけが来るわけでは

なく、「このタイプ苦手。」っていう人も来るだろうと思います。もうすでに、今日の4人の仲間の中にも、自分の苦手な人がいるかもしれません（笑）。ちょっとまずいなって思っているときに、でも、スタッフとしてその人とどうやって付き合っていくか、自分の気持ちをどうやって整理していくか、あるいはどうやって逃げようってというような、自分の人との接し方をちょっと意識しつつ話してください。うまくほかの人に振ってしまうとか、いろいろな方法があると思うから。自分がすごくうまくいく場合を知っていることも大事だけれども、うまくいかないときにどうやってその人とやっていくかということ、公共図書館はそういうことも大事だと思うんです。考えてみてください。

じゃあ、次の方へ行きましょう、4番目の方ですね、よーい、どん。

(1分経過)はい、終わります。じゃあ、最後、ラストですね、5番目の方。4人組の方たちは今聞いた話の中でちょっとコメントをし合ったりという形で1分間よろしくお願いします。じゃあ、5人目の方、お願いします、よーい、どん。

(1分経過)はい、ありがとうございます。抜かされちゃった人はいませんか。全員、お話しできたでしょうか。いろいろな話があったのではないかなと思います。自分の中で思い出しておいてから話をしたと思いますので、自分の話をするって、しかも昔の話をするって結構楽しいものなので、順番が来たらこれを伝えようという気持ちが皆さんの中にあつたのではないかなと思います。

赤ちゃんも同じですね。おなかがすいた、あるいは、あそこにあるミニカーを取ってほしいっていう時に、アアアアというふうに声を出していく。そのときにあれがミニカーだねというふうに声を掛けてくれるが渡す人と、何も言わずに渡す人では、もう言語体験として持っているものが変わっていくわけです。その自分の状況を伝えたいときに、ほかの大人の人の言葉や、歌、絵本などを耳にして、シナプスが脳の中で今見ているもの、あるいは聞いたこと、感じたことと他者の言葉につながったときに、その中で脳が働いて、これとこれが同じものなんだってということを徐々に徐々に学習していく。だから人にとって大事な食べ物を指す「まんま」という言葉はおっぱいを意味する「まんま」であつたり、お母さんである「まんま」であつたりして言葉が出るお子さんが一番多いわけですね。国によっては「まんま」じゃなくて「ノー」から始まる国もあるというふうに聞いたこともありますけれども、その地域、その文化において一番大事な言葉から、子どもたちは覚えていくことになります。

そのときに、すでに、どうシナプスがつながっていくかということの中で、その子の思考が始まっていま

す。内言という言葉 皆さんはご存じかと思います。外言というのが外に出す言葉ですね。内言というのは自分の脳の中で考えているときの言葉ですけれども、言葉がそもそもなければ思考はできないわけですから、どういう言葉がその子の中に入ってくるか、その環境を周りの大人はどうつくっていくのかということが大事ということになります。

そうすると、恐らく昨日、山野先生のお話の中にあつた貧困家庭のお子さんであるとか、虐待を受けているというようなお子さんたちが、どんな言語環境の中で生活しているのか、その子たちが、一歩家族の外に出たときに、そこで出会った保育士や、あるいは、放っておかれて近所の図書館にぼんと置いておかれたとしたら、その図書館で出会った周りのお兄ちゃんや、お姉ちゃん、大人の人たちの言葉で、もしかしたら傷付きが少なくなって生きていけるかもしれないわけですね。



私はプレパークという活動をしています。冒険遊び場とも呼ばれていますが、公園なんですね。その公園に来ていた虐待を受けていた女の子が、中学校になって養護施設に入ることになったんです。そのときの面接官の方がとってもびっくりなさいました。「この子はこんなにひどい虐待を受けてきたのに、心の傷がそれほど深くない。なぜだろう。」って。よくよく聞いてみたところ、その子は学校でも割といい環境で過ごし、また、学校から帰った後も、家には帰らずに日没まで公園でいろいろな地域の大人と触れ合っていたんだそうです。地域の人たちも、その子の家庭環境をある程度知っていたから、遅くまでその子に付き合っただけでいいんですね。家に帰ると大変な状況なんだけれども、24時間生きてる中で、大変な状況でない時間がたくさんあつたがゆえに、その子は救われていたわけです。もちろん養護施設に入るといった形にはなつたものの、その傷付きは少なかったってことです。

そうすると、子どもたちの24時間をイメージしたときに、家庭が全てではなく、学校も全てではなく、社

会教育の部分、あるいは、道路を歩いているときに、近所の魚屋さんとかの人たちがどう声を掛けてくれるか、そこで日なたぼっこをしてお年寄りが声を掛けてくれるかどうか。あるいは、文房具屋さんがおっしゃってましたが、かつては、その文房具屋さんにいる子たちが来るので、行き帰りの道にあいさつをしていたりして分かっていたんだけど、塀ができて、コンクリートになって、マンションになってきて、子どもたちの姿が見えなくなってきて、地域に子どもたちがいなくなっていったっておっしゃっていました。

そういう状態になっているときに、子どもたちはどこで親以外の人からの影響を受けるのでしょうか。だから、まず家庭の中が第一義的責任というふうに、教育基本法にも、国連の子どもの権利条約にも、親が子どもを育てるのは第一義的責任とありますが、もう今すごく子育てが大変な状況になっている中で、親だけではやっていけない場合があるわけです。親がうつ状態である、過労であるというのもごく当たり前になっています。だとしたら、子どもたちが町中のごく普通にいるときに、どんなふうに過ごせるのでしょうか。外で雨が降ったら図書館があるじゃないかといって来たときに図書館が彼らにとって安全な場所なのか、ゆっくりできる場所なのか、どういう場所なのか、そういうことを考えていくことが必要なんだろうと思います。

学校の中に朝の8時から午後3時までいる間で、子どもたちはどのくらいコミュニケーションをしていると思います？今どきの若者はコミュニケーション能力が下手であるとか、ないとか言いますよね。朝からだって、コミュニケーションする機会はあるのでしょうか。最近の小学校はアクティブ・ラーニングとかいって、しゃべるようにはなってきたけれども、放課後もどのくらい外で遊んでいるのでしょうか。子どもの24時間の中で図書館の果たせる役割というのを考えていただきたいなというふうに思うわけです。

みんなでしゃべっているときのほうが楽しいかもしれない。人って自分が主人公でしゃべっているときのほうが楽しいということは、今実感しておいてほしいんです。読書をするときに、わくわくドキドキするためには、そもそも元の何らかの体験を持っていないと、言葉の意味が分からないと本が読めないということになります。今日私はホテルの窓から日の出を見たのですが、この1年間で皆さん、日の出、日の入り、どのくらい見ましたか。見たという方は手を挙げていただけますか。みんなほとんど見ておられますね。子どもたちは見えていますか、日の出、日の入り。東京なんかだと、もう本当に日の入りって見えないし、日の出と、日の入り逆に覚えている子もいるんですよ。月と星の区別がつかない子が中学生でいるって信じられますか

ね。でも、現実に、そういう子どもたちってというのが育ってきている中で、本を読んでいて、その中の言葉がなかなか浮きあがらない、テレビの中とか、すごく刺激の強い映画の中とか、そういう世界でしかわからない。実験として匂いがしてきたり、五感が動いたりということがない体験しかないのかもしれない。

そうしたら、図書館はもしかしたら、読書より前に体験が必要なのかもしれないです。北海道の森の子どもの村というところに、おじい、おばばと呼ばれているご夫妻がいらっしゃるんですけども、もともと神奈川県で文庫をやっておられたんです。おじい、おばばは多分90歳ぐらいの方ですから、ずっと前の話なんですけれども、文庫をやっているときに、はたと彼らは気が付いた。文庫どころじゃない、この子たちは、まず何かを体験するというところから始めなきゃいけないのではないかな。それでキャンプを始めて、とうとう北海道に森の子どもの村というところをつくられたのです。だから皆さんには、この子に今必要なのは、本を読む以前に必要な活動がちゃんとなされているだろうかとか、本と並行して何が必要なんだろうとか、そんなことも含めて考えていただきたいわけです。

そうですね、じゃあ、2枚目の配布資料、何々さんの「ことばのラーニング・ポートフォリオ」を見ていただきたいでしょうか。

0歳から高校生までずっと縦軸を取ります。大きな紙、A3の紙もお配りしていますよね、今日はそんなに時間があるわけではないから、これを埋めていくという作業は難しいかと思うんですけど。これを学生に配る時には模造紙にしています。そして、小さな4色の付箋に1項目ずつ書いてはベタベタ貼ります。読むと書くと聞くと話すで、これは縦に取りましたけれども、そういうものをベタベタ貼ってもらって国語の先生になる学生たちに、「あなたたちは言葉をどうやって学んだの？」って。「学校で学んだの、それとも、親から学んだの、お姉ちゃんから学んだの、誰からどういうふうに言葉を学んだの？」っていうことを聞いていきます。

どんな体験をし、それをどんなふうに人に話したり、何を聞いたり、読んだり、書いたりしてきたのかっていうこと。これを今ここに書き込むのもとっても大変だと思うんですが、考えられますか。自分は、あのときの担任の先生の言葉はすごく印象的だったなとか、あのときの先生のおかげで自分は人の話を聞き流すことを覚えたなとか（笑）。ありますよね。それも学習ですよ。適当に言葉を流してしまうとかね。あるいは、あの先生のおときは、うなずいていれば何とかなったから、うなずくことを覚えたとか、あると思うんです。どういうふうに皆さん自身は自分の言葉の力を育ててきたでしょうか。ちょっとメモを取っていただけ

ますか、時間を少し取りますね。さっきやった絵地図の話をもうちょっと広げる感じになります。思いつくことをちょっとメモだけしてみてください。思いついた中に図書館はありますか、図書館は本を借りる場所でしたか。そこは読む場所でしたか、聞く場所でしたか、話す場所でしたか。

この図のとおりによらなくても結構です、自分の中で大事だったこと、学校が大事だったとか、児童館が大事だったとか、図書館が大事だったなどという自分の体験を書いて、自分にとって役に立ったことを書いて見ましょうか。それがもしかしたら、今皆さんが育てていきたいと思う子どもたちにとって必要な活動かもしれないからです。私のようにお年を召して、だんだん物を忘れやすくなる方もおられるかもしれませんが。その場合はご近所の何ちゃんが、今どういうふう言語発達しているかなって思い出してみてください。



はい、もうちょっとやりたい？家でも多分できると思うし、電車に乗っているときとかにぼーっと考えてみるということができると思うので、ここでいったん止めてください。そしてお互いどんなことが書けたか、あるいは書いてなくてもしゃべりながら、思い出しながら、話していただいてもいいと思うんですけど、子どもってこういうところで発達するよね、とか、それが自分の図書館だと「こういうところにこういう子とか来ていて、こういうことが起きているよね。」というようなことを、5分ぐらい時間を取りたいと思うので、自由にフリートークしていただければと思います。

5分たったら、私のほうで合図しますので、よろしくをお願いします、どうぞ。

(5分経過)はい、いかがでしょうか。もしかしたら5分ぐらいだから、お一人だけの話を聞いて終わっちゃったみたいなグループもあるかもしれませんが。今一番最初にちょっと聞かせていただいたグループの話ですが、すごく大好きな先生がいて、その先生のところに毎日タンポポを持っていったっていうんですね。図書館のスタッフがそういう人だったら、毎日、タン

ポポを届けてくれる子どもが来るかもしれないっていうことですね。その子にとって本は、最初は読まないかもしれないけれども、そうやっているうちに、本というものの何か匂いとか、感覚とか、そういうものが身に付いていくってということになるだろうし、そのうち何か読んでみたいって思うようになるかもしれません。

そういう人と人との関係性というところから本に入っていくことができるのかもしれないし、多分皆さんのお話、例えば、その4人のメンバーが割と年齢が同じ世代だということになると、意気投合はするんだけど、だんだん刺激がなくなっていきますよね。でも、そこにちっちゃい子が入ってくるとということで話に広がりが出てくるということになると、図書館の中でも年齢ってどういうふう考えていったらいいんだろうかっていうことを考えるきっかけになります。

いろいろな話、今日出た話、今まで話をした話の中で、図書館の場合はどうだろうか、ここで、子どもたちが体験していることって図書館だったらどうなのか、いや、図書館でやる必要はないことだよとか、うちの地域ではこれが大事だけれども、こっこの地域だと違うんだ。例えば、過疎地域の子もたちだと、もう来たら顔見知りで、という関係になるけれど、すごい都会の図書館だと、その一人ひとりに注意を払うことができないというような関係性の中で、場をつくっていかなければならないということになるわけなので、みんな同じではないです。そのときに分かんないなと思ったら、今こういうふうグループになっている中で、「おたくはどう？」と言ってヒントをもらうことができる。本からもヒントをもらうことができるように、人ももしかしたら借りることができるような場が図書館かもしれません。ということで、幾つかの場所をご紹介したいと思います。

これはずいぶん昔なんですけれども、私はもともとカウンセラーだったので、うちの大学の中に普通の教室を改装してしまっただけで、デザイナーさんと友達になってこんな場所をつくりました。心理学関係の本をたくさん図書館からもらってきたり、先生方に古い漫画で余っているのはありませんかと言ったり、こたつや本棚、ラジカセ、カラオケセットはありませんかとか、いろいろなことをペタペタ教授が集まっている部屋に貼って、こんな部屋をつくりました。本があって、お茶が飲めて、あっちで、こたつでしゃべれて、図書室のような感じになっています。でも、実際は奥のほうは個室があって、学生相談の精神科の先生も含めた対応もできるというような、そういう場所です。居場所を大学の中につくって、休講のときなんかにはちょっと集まってみんなで話したり、あるいは1人でいたいと思ったときにいられる。そういうときに

本があると、1人でいてもおかしくないじゃないですか、本を読むって。そういうことにも本って使えるんですよ。

それから、これはたまたまデンマークに行ったときなんですけれども、この子どものいる場所がすごく広いんですよ。ベビーカーが何十台も止められるような場所が真ん中があって、子どもたちが走り回っても大丈夫な広さがあって、積み木やたくさんの本があるところで、とっても明るくて、大人も子どもも集えるような場所になっていました。

今、日本の図書館もずいぶん工夫をされていて、いろいろな場所ができてきていますけれども、皆さんのところは、ハード面ではどんな工夫がなされていて、ソフト面ではどんな形がなされているのでしょうか。これは先ほどのところですね、手前にいっぱい本があって、向こう側で、親子で遊べるような感じになっています。

「びっくりカフェ」って聞いたことある人はどのぐらいいらっしゃいますか。意外と知られていないですね。神奈川県田奈高校の中にある学校図書館です。田奈高校は地域の人がある高校の名前を聞いただけで顔をしかめるくらい、大変な課題を抱えた子どもたち、高校生が来ているような高校でした。その高校で個人相談をするという形で入ってきたケースワーカーの方が、部屋の中に入っても仕方ないと思って外に出始めて、図書館の中で相談を受け付けるようになり、そこで週に何回か食べ物や飲み物も出すようになり。そうしたら居場所のない子たちが集まってきて、いろいろなおしゃべりをするようになり、人生相談をするようになり、そこにボランティアが年間のべ何千人も集まってくるようになり、という形で、図書館が交流の場になったんです。そんな静かに本を読みたい場所を交流の場所にしたらうるさいじゃないかというようなことで、Twitterで書かれたりしたという話もあるので、それは、公共図書館がそうなることがいいかどうかというのは分からないけれども、その高校の中の条件の中では、そういった場があるということをもって子どもたちにとって救いになったわけです。

だから、自分の地域のその図書館がどういうふうになっていくといいか、私も2000年のころにカナダに行きましたけれども、カナダとだとインディゴというカフェが本屋さんの中に一緒になって入っていました。今TSUTAYAが何かそういう感じになっていたりするようになりましてけれども、コペンハーゲンの図書館もカフェが全部併設されていました。多少コーヒーで汚れたとしても、その消耗品費よりも、人がゆったりするということのほうがいいんじゃないかというふうに発想するかどうかということが課題になってくる。TSUTAYAさんがいいというふうに言っているわけで

は全然なくて、自分の地域で何が必要なんだろうかというふうに考えてみていただきたいんです。今は、こんなに図書館に高校生が集まっているっていうことなんです。本って見ていたら面白いじゃないですか、だんだん読むようになっていきますよね。

それから、私の知っているある進学校は、国語の授業を学校図書館の中でやっています。先生が最初にちょっと10分ぐらいで言った後は、「はい、自由に読んで。」という感じになって。そうすると、寝っ転がっている生徒もいます。家の中では皆さん、ソファで寝転がって雑誌を読んだりとかってしますよね。そのぐらいの気楽さで読んでもいいよという国語の授業をやっている先生がいらっしゃいます。どんどん学力が付いていくし、どんどん子どもたちが本を読んでいくっていうことをするんですね。どういう場所が本当に子どもたちにとっていいんだろかっていうことを一から考えて、ハードとソフトの両面を考えていくことができるといいのだからと思います。

それをやったのが、こちらの3枚目の資料になります。もう10年前の話です。東京都下にある三鷹市というところなんですけれども、市長が絵本の好きな方で、選挙のときの公約で、絵本を子どもたちに届けるということを言いました。その公約を実現するために何億円もかけて子どもたちの絵本館を造ろうという計画を立てました。

ところが、地元の文化活動が盛んで、とてもいい本屋さんがあるような市だったので反対が出たんです。ここまで丁寧に自分たちがつくってきた地元の活動を生かさなくて、なぜそんなどーんって大きいものを、行政がお金をかけて建てるんだと反対が出たんです。そうしたら、市長さんが、「分かりました。白紙に戻します。」というふうに言って、建築計画まですでに何億円かかけていたものを白紙に戻して、その職員に一から考えるように言ったんです。そのときの職員が私の知り合いで、それで、「いすに座っているだけでいいから議長をやってほしい。」と言われて、三鷹市の絵本館構想検討会議の議長というのを私がやりました。

そこには三鷹市内のさまざまな文化人から、公募の人から、いろいろな人たち、図書館員ももちろんいましたし、本屋さんも、作家も、国立天文台の人もいたし、文学館の館長もいたし、いわさきちひろ美術館の人もいました。そんなメンバーで、子どもたちにとってどんな場所が必要なんだろうかということを経験という言葉を軸にして考えたわけです。1年かけて、国立天文台の中に三鷹市が建物をつくりました。

これってどういうことか分かります？ 国の敷地の中に市のものをつくるというわけだから、相当実はいろいろと画策しないといけないものなのですが、それ

を実行しました。昔の所長さんが住んでいた古民家を改装して、そこに本を置き、そこに老若男女が集まって読み聞かせの会をしたり、夏はセミ捕りができて、庭まであります。周りはすごい自然の中で、天文台です。星が見えなさいいけないので、あんまり明るい建物が周りにあっちゃいけないわけだから、森になっているわけです。そこの中の古民家に自然科学に関するような本などを丁寧に配置して、司書も配置して選んだ本を置いて、そこに子どもたちが来て、小学生が読み聞かせをする。おじいちゃん、おばあちゃんに読み聞かせするとか、おじいちゃん、おばあちゃんが小学生に読み聞かせをするとか、お正月にはお餅つきをする、お餅つきをする横に本があるというような、そういう空間をつくったんです。

この施設を紹介したコラムを読みます。

「子ども」「絵本」「三鷹」。この3つの言葉をキーワードにしてコンセプトをつくりました。このキーワードは、「この構想が、未来を担う子どもたちが親や地域の大人たちとのぬくもりのあるふれあいの中で多様な絵本と出会うことにより、心の土台を作り、生き生きと豊かに成長することを願うものであること、さらに、絵本との出会いをきっかけとして、三鷹市内に様々な活動や資源をつなぐ新たなネットワークが広がり、子どもや子育ての支援はもとより、人々の交流と創造の場が作り出されることをめざすものであることを意味しています。」

図書館だけでなく三鷹市全域で、「絵本との出会いや人と人との交流が生まれるようなソフト中心の事業展開を目指すべき」というふうに考えました。結局すぐに建物は建てずに委員を公募して、児童文学者の神沢利子さんがちょうど住んでおられたりしたので、神沢さんの著作の『ちびっこカムのぼうけん』や『くまの子ウーフ』の展示会も市民の力で全部つくっていくということも企画しました。3年ぐらいかけてやっと古民家を舞台とした絵本館というのをつくったのですが、そこに至るまでいろいろな市民を巻き込む、小学生から高齢者の方までいろいろな世代を巻き込むというような一大プロジェクトを、市民の力でやってしまったのです。

今は、皆さんがイメージしている図書館とか、読み聞かせとか、いろいろなものがあると思うんです。小さなものでも別に構わなくて、こんなふうに市を挙げて市長さんが応援してくれるなんていうようなことはめったにないと思いますから、そこまでいなくてもいいけれど、今自分のいるところで何ができるんだろうかを考えてそれを目指してほしいと思います。先ほどこからずっとみんなで考えていた子どもの発達、自分の体験、そして、スマホで育ってくる環境が、放っておいたら普通になっていく日本の子どもたちに対して、

どういうふうに私たち大人がやっていくことができるかということ、皆さんだけが考えるんじゃないで、地域の人たちの知恵も借りながら、子育て支援をやっている人や行政の人と一緒に考えていけばよいのではないかと思います。

ところで、皆さんの地域の行政の子育て支援の条例や計画を読んだことがありますか。そういうところに図書館はどうやって入っていますか。図書館と地域の結び付きをどうかするとかって書いてありますか。書いてあるとしたら何年計画で、誰がどんなことをして、それは図書館の貸出冊数に現れているのか、来館者数に現れているのか、来館してスタッフと語り合った回数によってカウントされるのか、どうやってそれは統計的に処理されているんでしょうか。そして、その統計に質は関わっているんでしょうか。そういうようなことも含めて考えていくことが、これからの時代に必要になってくるんだろうと思います。正解は全然ないと思います。皆さんで今日私がお話したこと、そして自分で考えたことを基に、私はこういうことをやりたいと思っていることについて、アイデアをもらったり、あなたのところはどのようにしているとかをやりとりしてください。とりわけリーダーシップをとれる人は自分がしゃべるんじゃないで、「あなたはどう思いますか。」というふうに、おとなしめな人に振っていただけたらいいなというふうに思いますが、そういう形で10分ぐらい話をしてみていただけますか。

そして、私はずっと歩いていますので、もし何かありましたら、声を掛けてくださったら、そのグループの中でお話をします。みんなとシェアしたいと思うことがあったら、それは後でシェアしたいと思います。時間は短いですが、よろしく願います、どうぞ。

(10分経過)こういうとき、なかなか話がもうやめられないと思うんですけども、みんなきっと話したがりになっているだろうと思います。「私、あまりしゃべれなかったわ。」と思っている方も中にいらっしゃるかもしれませんが、こういう話を地元で、自分たちの図書館で話をしていくこと、今日この後パネルディスカッションがあると思いますので、そこでもいろいろなヒントが出ると思います。例えば、学校とどうつながるか、学校の先生が図書館を信頼して、図書館に子どもを送り込んでくれるかどうか。そのためには、どういう関係を学校と持つといいのか、あるいは、子どもの本って、所蔵しておくものなんですか。それとも、毎年消耗品でどんどん変えていくものなんですか。予算上はどういう扱いになっていますか。汚れたとすると、図書館ってどういうふうに言われるんですか。いけないことなんですか、それとも、「ああ、この本、よく使われたね」って言って喜んで次の同じ本を買っ

てもらえるものなんですか、という、そういう予算の使い方も一から考えてもいいのかもしれないですよ。『この本はもう消耗品ということにしようよ、赤ちゃんがかじってもいいよね。』って、ブックスタートじゃないですけども、そういうふうにして本をどういうふうに使っていくかとか。

何かいろいろなことが多分考えられるだろうと思いますし、今、図書館がそうやって動いてきているときだと思いますから、じゃあ、今度はそれを行政につなげていくにはどうしたらいいのか。三鷹市の市長は絵本館ということを公約に挙げて当選した市長さんでした。行政とのつながりが大切ですよ。地域を動かしていくためには図書館とつなげて法令を使うことは大事です、法律とか条例とか、そういうものの中に書き込んでいくということもとても大事です。今の子どもたちの大変な状況、昨日、山野先生の講演で大阪の話があったと思うんですけども、とても本なんかには気持ちを持っていくことができない子どもたちに対して、まず本を差し出したとしても、きっとそれは役に立たない。今お米が食べたい人にデザートを出しても仕方がないというような、そういう状態で『絵本はいいものよ』とか、『すごく情操豊かになりますから』とかというふうに言って、こちら側のいいと思うもの、私たちのニーズで子どもたちに本を与えようとしてしまうことになってしまいます。そういうことにならないようにするために、子どもたちは今何を欲していて、それに自分たちの持っているリソースがどうつなげられるか、っていうことをぜひ考えてみていただきたいなと思います。

それで、今日、せっかく図書館の方たちが集まっているんだからと思って、私、幾つか本を持ってきたんです。最後に少し紹介をさせてください。

これは山野先生と一緒に書かせていただいた、『子ども家庭福祉の世界』という本です。私は子どもの発達のことを書いています。だから、子どもがどういふふうで育っていくのか、そのとき大人はどんなことをしたらいいのかということについて書いてありますから、この本は図書館に、良かったら入れていただけるといいかなと思います。

それから、こちらは、子どもが放課後、今ずっと7時まで学校にいたりします。日本の子どもたちがこれだけ不登校になっているのに、不登校になるその場所にずっと7時まで学校にそのままいなければならないという状態になってしまっていて、一体どうしたらいいんだろうって思います。じゃあ、そこに大人たちはどういふことに気を付けて、どんな対応をしていくと、子どもたちが健やかに楽しく、幸せに、well-beingな状態で暮らせるだろうかということを考えて、現場にいる方たちが聞きたいことをまとめて、それにつ

いて答えていくという形で書いた本です。



今日はお話することができませんでしたが、赤ちゃんの抱っこが今、変なことになってきています。おんぶをしない人が増えてしまったし、子どもの脳の発達にも、体の発達にも、長時間あつた状態だとちょっとまずいんじゃないかというような形の抱っこをしている方たちがすごく多くなってきています。それについて私たちがFacebookで発信したりしているんですが、それをまとめた本があって、できるだけ妊娠中からそういうことを知った上で、おんぶや抱っこがちゃんと首を支えとか、お尻のところを持つとか、こうじゃなくて、ちゃんとここここだよとかっていうようなことを言わないと、抱っこ、おんぶができない時代になってきています。ここにちゃんと顔が出てくるような形でおんぶも抱っこも縦でやる場合はしないと、赤ちゃんが前を向けないから、首を反ってしまってエビ反りみたいになっちゃうでしょうとか、足を固定したまま10時間抱っこをしていたら、固まっちゃうって生後1カ月の赤ちゃんが肩凝りしているという現状を今どうするんだろうという話です。そういうようなことをいろいろ書いているのがこの本で、1~4まであって、たぶん京都で刊行されているので、申し込みばすぐ送っていただけるのではと思います。

あと、子育て支援に関して、少し古いですがずっとベストセラーみたいな感じで出ているこの本もあります。まず、ブックスタートに関して昨年の3月の講演をまとめたもので、そのときは発達のことを中心に、今の日本の発達の現状についてお話をし、それをどう考えるか、子育て支援をどうしたらいいかという話をしました。これはネットで取り寄せることができます。

こちらの本は定価25,000円します。税金を加えると27,500円なんです。だから図書館に入れてください(笑)。コミュニティワーク、ソーシャルワークの本が日本であんまり出ていないのですが、これは北米のソーシャルワーカーの基本書です。北米で勉強してこられて、今、日本で活躍している先生方は英語の原本を読んでおられる方が多いです。それを翻訳して出し

たんです。読むのはなかなか大変ですが、訳は結構いい訳、分かりやすい、素人でも読めるような訳にして、読書会とかやってきていますので、良かったらお願いします。

こういう本を市民がどのぐらい皆さんの場ではリクエストしてきますか。リクエストをしたら、本が入るということを皆さん、どのぐらい知っていますか。この本を10人で読書会をやってくださいというふうに言って、その地域の図書館に入れてくださいと言って、10人からみんなでリクエストを書くとかか、20人でリクエストを書くというと入るんですよ、というようなことを、市民の方はどのぐらい知っているでしょうか。地域とつながるって多分、そういう小さなことから、メリットを何か挙げるとか、そういうことからだと思います。いろいろな工夫ができると思います。

これから、パネルディスカッションの時間に入りますけれども、引き続き一緒にぜひ、考えてください。

どうもありがとうございました。（拍手）

<全体会>

「研究討議（パネルディスカッション）」

テーマ：「子どもたち一人ひとりが心豊かに育つために、図書館は何ができるか」

コーディネーター：

寝屋川市立中央図書館
館長 尾崎安啓

パネリスト：

武蔵大学人文学部
教授 武田信子
おはなしボランティア とことこ
代表 渡邊裕美子
大阪市立東淀川図書館
館長 角田人志
絵本いろいろの会
絵本あれこれ研究家 加藤啓子
特定非営利活動法人ハートフレンド
代表理事 徳谷章子

尾崎 どうも、皆さん、こんにちは。昨日から引き続きずっとご参加いただきましてありがとうございます。寝屋川市立中央図書館長の尾崎です。2日目も武田先生の講演も終わりました、かなりお疲れかもしれませんが、もう少し頑張っていきましょう、よろしくお願いします。



パネルディスカッションを今から始めさせていただきますと思います。まず、昨日事例発表等を行っていただきました先生方に、昨日ちょっと言えなかったただけでもとか、追加でもう少しお話をしておきたいとか、そういったことがあれば、まずそれをお伺いするというふうに思いますので、渡邊先生から昨日の発表の順番をお願いします。

渡邊 特に言い残したことはないんですけども、ずっとこの依頼を受けてから感じていたことですが、私

が自分のボランティア活動をしてきたこととお話しして、皆さんのお役に立つんだろうかっていう不安がすごくありました。

でも、いろいろ皆さんのお話を聞いたり、今日2日目なんですけれども、その中で感じたことは、図書館員の皆さまが、「ボランティアさんとして、こんな人もいるんだ」とか、「ボランティアさんってこんなことを考えているんだ」とか、そういうことを知っていただける一つになればちょっとお役に立ったかなというふうに思っております。

角田 私もあまり付け足すことはないんですけども、先ほどのワークショップとかでも、頭がすごく活性化されて、今は何もちょっと考えられない状態なんですけど、一つ言わせていただくと、今図書館には、ボランティアさんはなくてはならない存在だと思っているんです。

ボランティアの入門講座というのをしていますが、大体平日の昼間にしかできないので、また、ボランティア活動自体も図書館の開館時間に合わせてということになってくるので、ボランティアさんになってくださる方が、もう子育てを離れて落ち着いた方、大体平均年齢でいいますと50代、60代ぐらいになってしまうんじゃないんでしょうか、というのが今は実情なんです。

でも、例えば、働いている方から「ボランティアをやりたいわ」とか、子育て真っ最中のお母さん方からも「本当はボランティアしたいのよ」という話も聞きますし、中学校、高校生の方、大学生の方でも、読み聞かせをやってみたいという方もいらっしゃいます。そういう方たちをどうやって一緒にやっていっていただけるかなというようなこともちょっと課題かな、というふうに最近思っています。

加藤 昨日の質問で、面展台(外に並べている段ボール書架)の作り方をしりたいというのが結構あったんです。よく電気屋とか自転車屋から段ボールをもらってきたらいいんですねって言われますが、それはやめてくださいって言っています。新しい段ボールを使います。それぞれの地域に段ボール屋さんってあるんです。そこで、こういうサイズのを買って行って、急遽レジユメを印刷していただいて出口のところに置いています。つくり方も絵本いろいろの会のスタッフの山中くんさんがアドバイスしてくれますので、まず手に持って、どれだけ軽いかということと、こういう材料を使っているのねというのを体験していただくと思ってそろえていますので、この会場の外でスタンバイしてくれていますので、そこで見てください。

昨日は、子どもたちのごろごろしているシーンをた

くさん見ていただいたんですが、大人も別にちゃんと読まなくても一緒にここにこ笑って一緒にごろごろしていたらいいんやなっていうことを、昨日提案できたことはとてもうれしく思っています。



幼稚園、保育園ぐらいただったら1学期に1回ぐらいしてもいいんだけど、小学校は1年に1回で十分です。そんなしょっちゅうしたらありがたみがないし、まず、用意する者が結構疲れますのでね。本当に本の出し入れとか、設営は体力が

いるものなので、1年に1回ぐらいで十分ですよ、それ以上すると子どもは飽きますから。終わった時に「おばちゃん、今度いつすの？」って涙目で言ってくる子がいるんです。「もうほんまに今日これで終わるの？」って言うから、「もっとしたかったら校長先生に言っといで。」って言ったら、本当に言いに行くんです。

終わった後、確認しに来る子もいっぱいいます。「ほんまに終わったん？」って言って、「うん。来年まで待とうね」って言ったら、それを待ってくれるっていうのも私たちのやり方なっていうふうに思って、昨日は大急ぎで紹介してしまったので、またいろいろ質問をいただけたらと思います。

徳谷 はい。私事で恐縮ですが、図書館に関わる話ですが、昨日34歳で発症したうつ病の話をしたと思うんですけども、どうやって外へ出られるようになったかお話しします。実は、大学病院の精神科で処方された薬は全部駄目でして、極度の副作用を起こして薬が止まった。そのときは、知っている人の中には入れない、知らない人の中は行ける状態でした。だから、家の近くから出ていた市バスを使って、200円でぐるぐる回りました。どこへ行くかといったら図書館だったんです。

図書館は、武田先生もおっしゃっていましたが1人でいても同情されないところなんです。1人で来ても「かわいそうな子」じゃない。だから、私はそこで癒されたんです。本が好きで行ったというのもあるんです、もちろん。だけど、そこにいられる、いても許される、おかしくないっていうところなんです。

これも私事で子ども時代のことで、場面緘黙症という発達障害を持っていました。家の中ではしゃべれる、一歩出たら全くしゃべれない。そういう人が成人になってうつ病を発症しやすいらしいんですが、私

はその王道を行ったらいいんですね。その私の子ども時代の唯一の場所が学校の図書室でした。1年生、2年生が本を読んでいるふりをしていても、誰も図書室から追い出さないんです。

だから、そういう子どもたちや大人も図書館には必ずいる。そういう人たちを、その人たちに皆さんが温かい声を掛けていただいたら、きっと誰かとしゃべれる力が湧き起こると思うんです。そういう人もきっと中にはいるだろうというまなざしを、ぜひ皆さんに持っていただいて助けていただけたらなと思いました。

尾崎 どうもありがとうございます。

では、武田先生も、何か、今お話しいただいたばかりですけれども、言い足りないことがあれば。

武田 いろいろなアプローチの仕方があって、それぞれの方たちが本当にあっちこっちでいろいろなことをやってくさるといいなというふうに思っています。ただ、今日具体的な話を、私の中ではあまりしなかったの、それぞれ具体的なことをやってこられた方の話とどうつなげていくことができるのか、何を学び取って自分の活動につなげていくことができるのかというようなことを持ち帰っていただけたらいいかなというふうに思っています。

尾崎 どうもありがとうございます。

これからは事前いただいた質問の中からお答えをいただきます。加藤先生が面展台のことをもう言うてくださったので、1つは終わりました。絵本を載せている台のつくり方を教えてくださいというのがあったんですが、後で、外で教えていただけるそうなので、よろしく願います。段ボールの紙を使うんですが、縦と横があるみたいで、それを間違っって使うと、非常に弱いものができるそうなので、その辺も注意してやっていただければというふうに思います。うちも失敗したことがあるみたいなんです。どこで注文しなきゃいけないというわけでは全くないので、皆さんの図書館のご近所にある段ボールを扱っている会社、特にオーダーができるところが一番望ましいかなと思うんですが、段ボールとか、何とか梱包とか、何とか板紙とか書いているような会社がそれですので、当たってみてくださいませ。

次は、福井県立図書館の田中様から加藤先生へ質問をいただいています。

「えほんのひろば」で並べる本は、どんなふうを選んでいらっしゃるのでしょうか。新しい本もあったように見えたんですが、毎年入れ替えていく感じでしょうかというご質問です。加藤先生、願います。

加藤 毎年は入れ替えません。300冊ぐらい並べると全部見たつもりでも見落としているものもあるし、好きな本がもう一度見たいというものもあるので。子どもが瞬間で読めるような本。1冊読んで面白くてもう1冊読みたいというような本を選んでいきます。お代わり絵本って言っているんですが、1冊読むのに時間がかかったり、手間がかかったり、理解するのに大変だったりすると、もう次読むのが面倒くさくなっちゃうんです。

だから、例えば、いわゆる読み聞かせで使っている名作になるようなものは一切置いていない。文字が多いだけで置かない。写真集も解説があるのは置かない。ナショナルジオグラフィック社の写真集はものすごく小さな文字で書いてくれているので、それだったらオーケーなんです。岩合光昭さんの著作は、昔の写真集は全然文字が入らなくて良かったんですけども、最近の物はしっかりとした文章が入るので置いていません。

梅佳代さんの著作だと『男子』（リトルモア）とか『じいちゃんさま』（リトルモア）は置くんですけども、それ以外の写真集は、実は置かない。それで、どうして選ぶのという、もう感性と場数とによります。本を選ぶ場数を踏んでいるんです。選んでいるのは本屋さんと図書館に行っています。私たちが「えほんのひろば」をここまで充実させていただくことができたのは、実は、この大阪市立中央図書館で選書をさせていただいたからなんです。それを最近ものすごく感じています。というのは、ものすごい冊数が多いのと副本を持っていらっしやる。だから、普通の小さな図書館では「えほんのひろば」があそこまでいかないんです。なんでかと言うと写真集がないんです。大阪市立中央図書館でうれしかったのは、「どこの階の本もどうぞ使ってください。」って言ってくださる。悲しい話ですけども、ある図書館では、「子どもの「えほんのひろば」に、大人の大事な本は貸せません。」って本気で言われたことがあるんです。子どもって市民と違うんですかって思うんですけども。そういう図書館もあるけど、中央図書館はものすごい冊数の中から、何日もかけて選書するものですから、これだけ面白い本を選ぶことができた。だから、もう数を当てるしかないということで場数です。答えになっていませんか？

尾崎 なっていると思います。

多分、加藤先生には加藤先生の世界があるので、なかなか人がまねするのは難しいんですけども、ただ、ああいうひろば読みというのが一つのヒントだというふうに思います。

いわゆるガチッとした読み聞かせとはまた違う、も

っと子どもをまず読書の世界にいざなうというような意味で、どんなふうにしたらいいかという工夫の一つだと思いますので、皆さんなりにそれぞれやっていたらいいと思います。

例えば話がすごく上手な方も、どっちかというたら苦手な方も、いろいろな人がいると思いますので、自分や主催をする方に合ったようなやり方をすればいいのかと思っています。加藤先生のまねを一生懸命やろうと思ってても多分難しいと思うので、あんな人もいるんだというぐらいに思っておいてもらったほうがいいかなと思います。

ただ、やっぱり、絵本は絵本、写真集は写真集、大人の本、子どもの本みたいにあんまり考えないほうがいいよというのは、本当にそのとおりだと思います。うちの図書館でも加藤先生に来ていただいたことがありまして、中学校の子どもたちが教室に来て、「えほんのひろば」をやると、ちょっと思春期で、さっきまで男の子なんかでちょっとオラオラになっているような子が、5分ぐらいもしたら、もうすごいここにこして寝そべて絵本を見ているんです。

これは一体何が起きているのだろうと僕も思いました、びっくりしました。ですから、やはり、ひろば絵本の力というのはそれだけすごいんだということを目撃しましたので、すごくよく分かりました。そういう引き出し方というんですか、そういったものが、どんなふうにご覧いただきに出せるかということだと思います。うちは、大人の本をそんなことに貸せませんとか、そんなことは絶対言わないですし、団体貸出でよく学校さんに本を貸すと、見事にポロポロになって返ってくるんですが、どうかすると返ってこないんですが、それはもう消耗するもんやというふうにわれわれは考えていますし、子どもを、小さい子なんか、かみますしね。かむし、なめるし、捨てるし、だから、大変なんですけれども、それは次の使用にちょっと無理やなと思ったら、それは消耗してしまったというふうに考えて、そういうふうに考えていられる図書館のほうが圧倒的に多いと思います。子どもの本については、同じ本を繰り返し発注したりすることもありますし、そういうものだと思っております。

加藤 口を挟んでいい？（笑）

「えほんのひろば」は、今私たちは大体小学校は300冊ぐらいなんですけれども、大きいところでは1,000冊です。ATCホール（大阪市住之江区の商業ビル）だったら1,000冊、子育ていろいろ相談センターでも1,000冊。でも、今まで何回もやってきましたけれども不明本が出ないんです。やんちゃな子どもが多いと先生が言う小学校でもひろばをするんですけども、3年間で6回したけれども不明本ゼロなんです。面白い

ほど不明本が出ない。

この間も1冊足りないって大騒ぎしたら、ボランティアさんが自分のかばんに入れて持って帰っていたとか(笑)。ひろばでは1回ではあまりボロボロにはなりません。ただ、「壊れたら、すぐにおばちゃんに言ってね。」って言って、スタッフは細いポンドを持っていてポケットから出して、「これで直すからね。」って言うと、納得して、「おばちゃん、破れた。」って持って来てくれて、「よしよし、すぐ直そう。」って、その場で直ししたりするので、傷みもない。

だから、隠そうとしないでって言っています。絵本を読んでいる空気を楽しんでいるというふうに思ってもらいたいです。絵本がすばらしいではなくて、絵本を読んでいる人と、子どもと、その全体の環境というか、その雰囲気がいい感じやから、寝屋川も不明は出ていないし、寝屋川もひろばで本は壊れていない。

尾崎 はい、分かりました、ありがとうございます。

おっしゃるとおりです。確かに不明なんかは出ません。ひろばには人が絶対いますから。

次は、ちょっと違った角度で、富山市立図書館の瀬戸さんからご質問を頂いております。地域に根ざしたNPO団体として、公立図書館に望むことがあれば教えていただきたいですということで、徳谷さんにご質問を頂いております。

徳谷 ありがとうございます。先ほども少し言いましたが、私たちが東住吉図書館と初めてお会いした時の話をしますと、子育て支援ネットワークというのが8年ぐらい前に区にできました。ファミリー運動会や子育てフェスタをしようよというネットワーク会議があって、親子サロンとか、それから読み聞かせのボランティアさんとか、人形劇の団体の皆さんとかが集まり、そこに図書館長さんも来られました。そのときに初めて私は館長さんとお会いすることになるんです。

その会議ではその2つの行事のためにだけ年間進むわけです。実際には、図書館が困っていることを聞きたいし、私たちが図書館に「こんなことを一緒にやりたいな、やってもいいのかな。」って言いたいことはあるんです。だけど、それを言える機会が私たちにはないので、何かそういう地域のサークルやNPOを集めるような、ラウンドテーブルみたいなものをしていただければと思います。何か本のためという切り口も大事なんだけれども、どちらかと言うと、「地域の人た

ちが喜ぶ活動をしようよ。」みたいな、そんな切り口で、いろいろな団体を集めてもらえるような感じで、区の社会福祉協議会さんとタッグを組んでもらうとか、区役所の地域企画課にちょっと言うてもらおうとかで一緒にしていただいて、そこに図書館が来てくれれば、私たちのやりたいいろいろな情報が共有できます。

例えば、さっき私が言ったような、しんどい子どもたち、本が好きだけれども、なかなか外に出られない、学校に行けない子どもたちはいるんですね。その子どもたちは折り紙が好きだったり、本が好きだったりする子もやっぱりいるんです、ペープサート(紙人形劇)とか好きだったり。そういう子たちの集まるような場を一緒につくれたらと思います。私らが一番困るのは、場所がないことです。ハートフレンドはたまたま15年前に区役所が勇気を出して仮設消防署を貸してくださいました。何とか恩を返したいと思って今までやってきましたので場所を何とか確保できています。

でも、ほとんどのNPOやサークルが一番困っているのは、場所がないんです。スキルは何とか自分たちでトレーニングして上げていっても、それをやる場所がない。そこを図書館の皆さんとタッグを組むことができれば、私はいいものが地域の中でできるんじゃないかなと思います。それを願っている団体は多いと思います。だから、何か一緒に集まるようなラウンドテーブル、軽い、緩い集まりでいいので、年に1回か2回声を掛けてもらったら、きっといろいろな読み聞かせだけでなく、さっき武田先生がおっしゃった認知症のカフェをしているとか、宿題カフェをしているとか、いろいろな団体がそこできっと、いいものが化学反応を起こして生まれるんじゃないかなと思います。

尾崎 ありがとうございます。同じようなことを渡邊先生にもちょっとお聞きしてみたいと思うんですが、すぐ隣に図書館長がいますけれども、図書館にいる望まれることとかあったらちょっとお聞かせいただけますでしょうか。

渡邊 「とことこ」は図書館とはすごくいい関係なので、特に課題ってないんですが、今まで私たち、今年20年になるんですけれども、以前にもよその、兵庫県のほうの図書館さんのほうから、どうしてそんなに長くグループ活動が続くのか教えてほしいということで呼ばれたことがありました。大体2~3年とか5年ぐらいでグループがなくなることがあると聞いたんです。

「とことこ」は最初の5年目ぐらいは結構ふらふら何もなくて、ただ集まっている、図書館さんに集められたグループ、図書館さんの中で作ったグループみたくだったんですけれども、館長さんが替わっていかれる中で、館長さんの個性もあって、「とことこ」は自分た



ちの独立したグループだから、自分たちで何でもやるようになって言われました。

私たちは図書館におんぶで抱っこっていうグループだったんですけれども、だんだんその中で意識が芽生えてきたといいますが、いろいろな方も入ってくるとグループの存在自体が危くなるような意見を持つ人も入ってきたりして、すごく悩んでいたこともありまして。代々の館長と指導者にも恵まれて、すばらしい先生方が関わってくださったので、相談しているときに「違う意見を持っている人は、違うグループをつくったらいいんや。」って言われたのがすごく心に残っています。

それ以降、「とことこ」はこういう趣旨で、こういう目的でやるので、これに賛同していただくということを入会の条件にしたんです。私たちのやり方に賛同できない方を排除するのじゃなくて、別のグループをつくられても図書館では活動できますよって言うんですけれども、大体皆さんは入ってこられます。

図書館にはもう一つ、絵本の会というのもあって、それは図書館のボランティアグループなので、図書館からの依頼で活動している感じです。「とことこ」は、自分たちで全部やるので大変みたいですが、みんな、仲間がやっぱり助け合うというか、活動については同じ考えを持っているので、本人が持っている思いとかもそこではみんな出さないで一つの目的を持ってやっているの、多分長続きしているのかなと思っています。

館長にも代々替わられても、それを認めてくださっているんです。その辺が、「とことこ」が長続きしている秘訣かなと思います。

あとは、「とことこ」でなくて、私は地域でも活動しているんですけれども、去年から地域でシニア朗読会というのをやっています。そこに図書館から年1回来ていただいて、館長にちょっとお話とかをしてもらっています。そういうのを大阪市では出前講座といって来てくださるらしいです。けれども、そういうのをあんまり知らない方がやっぱり多いです。でも、私はずっと活動をしてきた中で、やはり、どこか一つのグループとか団体がそういうのをすると、それがじわじわと広がって行って、よそも頼むようになるとか、「あんなんでできるんやな。」って思って頼まれるようになるので、スピードは遅いんですけれども、やはりそういうのを事あるごとに皆さんにお知らせしていただくというのが広がっていくコツかなとは思っています。

尾崎 どうもありがとうございます。皆さんはそれぞれアプローチの仕方がいろいろですし、地域で活動がされている、あるいは図書館と一緒にやられていると

か、いろいろなやり方が多分あると思います。

例えば、私どもの寝屋川市の場合ですと、家庭文庫をされていた方が、どんどん活動を頑張って行って、お話の会のメンバーになったり、あるいは読み聞かせの会員になったりとかっていうふうにして活動を続けておられるような会が多いんですね。大体そうですね、特別何かなければ、年に1回ぐらい、「館長、話を聞いて。」っていうのは必ずおっしゃってこられます。何月何日空いている？ っていういきなり言われるのでびっくりするんですけれども。

最初のうちは、本当にもう怒られてばかりでしたけれども、私は図書館長なので、何かこの人らと会うと怒られるので嫌やなと思ってたのですが、でも、だんだん何を求めているかというのが、やっぱり分かってくるんです。先ほど、徳谷さんがちょっとおっしゃっていましたが、「場所ないねん。」という話、あれは本当にそうなんです。

じゃあ、どうやったら活動の場所をつくっていただけるか。例えば、読み聞かせの講座をしますけれども、読み手になろうと思って、取りあえず自分のところの子どもにはやってみたんやけれども、あとは、もっといろいろお役に立ちたいわっていったときに、「どういう活動をどこでやっていますか。」とか、「私もデビューする場がありますか。」とか、そういったものをいろいろと聞いてこられるんです。

そのときに図書館がどれだけ情報を出してさしあげられるかというのも一つ大事なところかなというふうには、私どもなんかは思っています。当然、何か、いろいろな会がいっぱいありますので、一遍やってみて、相性もあると思いますので、一遍それぞれ連絡を取っててもらえますか、みたいなことでご紹介をさせていただくとか、そういったこともしたりしています。

ですから、きちっと定期的に集まるというやり方ができればそれでいいですし、できなくても、「来週空いてますか。」みたいな感じでつくった話し合いの場でもいいと思いますので、いろいろな形でやっていたらどうかな、というふうに思います。

もう一つ、これもそれぞれの事例発表の皆さん、先生方への質問なんですが、図書館では民間のいろいろな団体とか機関とつながることというのは多いんですけども、それぞれの団体から見ても、役所であるとか、行政、図書館、ほかの部署とのつながりもありますよね。

それぞれがよって立っている目的も、事情も違うもの同士が関わり合うので、それぞれの考えが違う、文化が違うみたいなことを感じながらお話をされる際に、気を付けておられることがあれば教えてください、というような質問がありました。

それでは、渡邊先生から順番にお願いいたします。
渡邊 私がそういった場に立つのは、昨日報告させていただいた東淀川区の絵本読み聞かせ事業の場合ですね。私たちがずっとやってきた図書館対ボランティアではなく、役所の行政と事業者として入った「とことこ」として立場が違うので、ただボランティアとして絵本を子どもたちに届けるとか、「楽しいよ」だけでは行政の方には話が行かないですね。

そこで、私たちのそういったずっと活動してきたことをこの事業に生かすというのが本来の目的なんですけれども、行政の方はそこに、やはり指標だったり、何か数字みたいなのを求められます。そこで中身の問題を話していて、どうしても価値観とか考え方が違うので組み合わせない、これは無理だなというのが分かったときに、読み聞かせ事業ではいつも図書館の館長にも会議に出ていただくので、そこで、「館長はどう思われますか」って館長に話を振ります。館長は行政側の方なので、何か渡邊さんは訳の分からんことを言っているわと思っている方が、館長が行政側の立場でお話をされると、「ふうん、そうなのか。」って思われるみたいです。やっぱり味方をつくるのは大事なことで思っています。

尾崎 角田館長。ちょうど、裏表の関係なんですねお願いします。

角田 図書館で働いている方はお分かりかと思うんですが、図書館って行政の中でやっぱりちょっと違いますよね。出先機関なので、予算を取りにくいとかにしても、何か話しても分かってもらえないとか、いろいろなことでご苦労をされていると思うんです。



大阪市では区長が教育委員会の区担当次長になっていますので、学校図書館関係などでしたら、区役所に話しに行くことがあるんですけども、やはり、区役所の方はきちんと目標があって、それがどのくらい到達して、どういう結果が出たかというのは、常に求められているので。図書館も本来は、そうしないといけ

ないんですが、なかなかそういう結果の数値とかは出ないので、その辺でやはり話が合わないかと常々思っています。

ただ、目標としているところはやはり同じなので、その目標に向かって私たちは常に協力していくんですよということを前面に出して、お互いに分かり合いたいと常々思っています。

尾崎 ありがとうございます。

加藤先生、図書館とか、学校とかいろいろな場所で「えほんのひろば」をされることが多いので、その方と接するときのご経験があたりかと思しますので、どう考えておられるのか、お聞かせいただけますでしょうか。

加藤 まず、「えほんのひろば」という言葉で、ほとんどの人は、「じゃあ、幼稚園、保育所ですね」とか、学校だったら、「低学年ですね」と言われるんです。いやいや、5年生、6年生のほうが面白いんです、中学生のほうが面白いんですって言っても絶対信じてもらえないんですよ。

見てもらわないと分からないのですよね。昨日、皆さんにも映像を見てもらったんですけども。それと支援学校・学級の子どもたちについては、この子は本が読めません、読みませんって決めていらっしゃる。いやいや、読むよ、見るよ、喜ぶよっていうのは、私たちの経験上、言うんですけどもなかなかわかってもらえません。もう、いい人と巡り合うまで、ただひたすら我慢するしかないです。

面白い人とびたっと合ったときにはぐんといくんですけども、もうそんな時間をかけてられないのですよね。今日、高石市の元図書館長がスタッフとして手伝いに来てくれるんですけども、高石市の場合は図書館長が、寝屋川市へわざわざ講演会を聞きに来て、いいなって思われて、その日のうちにうちへ来てくださってという話やったんです。

図書館長の定年退職まであと何年って聞いたら、3年っておっしゃって。じゃあ、それまでにやろうっていう逆算をしたんです。この人がいたらできるというところでは頑張ります。もう分かるでしょう？ なかなか理解してくれない場合は時間をかけて待とうって、いい波が来るまで波待ち！

だから、「えほんのひろば」を本当にしたいと思ったら、いい人と出会ったときに動きます。図書館で「えほんのひろば」をしても面白くないよって言い切っています。だって、図書館のひろばをしたら、本当に一部のしか、子どもしか来ないからね。数字で言ったら、小学校でしたら、例えば生徒数が500人の小学校だったら、500人の子どもが来るわけでしょう？ 人口1

0万人の都市の図書館ですらあったら、10万人のうち50人とか30人しか来ないわけでしょう？ その比率で言ったら、もう絶対小学校、幼稚園ですべきです。それを高石図書館長はすぐに理解されたんで、その館長が何をしたかっていうと、各小学校の校長、教頭を説得しに回られたのです。「あなたたちの子どもを楽しませたいなら、「えほんのひろば」というおもしろいがあるから、やりましょう。」とにかく、見に来てから判断してくださいってということで、そういうふうなところで精力的に動いてくださって、高石市の場合は、小学校7校全部でひろばができたのです。1年間に2巡して、中学校も行って、支援施設にもボランティアさんが月1回入るようにしているという感じです。これって答えになっていませんよね。

尾崎 いや、結構なっていたと思います。

では、徳谷先生は、地域でいろいろな種類の活動をされていますよね。そういった中で行政と接触するとか、いろいろなことが、多分図書館だけじゃなくて、いろいろな行政と接触してはと思うんですがいかがでしょうか。

あと、また、昨日の発表でもおっしゃっていましたが、町内会ですとか、そういった地元の方との接触もあると思うんです。そういった中で、ちょっと違うなと思ったり、あるいは気を付けていることとか、そういったことが何かあれば、参考になると思いますので教えていただけますでしょうか。

徳谷 はい、ありがとうございます。まず、私たちの子どもの活動というのは、もう学校に理解していただくのがなくてはできません。私は15年前にハートフレンドができたときに、「てらこや」を始めたんです、学校の前で、ですよ。そこで塾のようなことをするんですよ。学校は気が悪いじゃないですか。

まず、校長先生のところへ行って言ったことは、5年生でも1年生からやり直しをします。なぜかと言ったら、親からのアンケートで圧倒的にしてほしいと言われたからです。私たちは学校を支えたい。学校での子どもたちの力を上げたい。5年生だと担任の先生に「1足す1は2」をなかなかしてもらいづらい、申し訳ないって親が言っていますと伝えました。だから、私たちが、地域の大人たちが子どもを支えて、最終的には学校を守りたいって言ったんです。15年前に。校長先生はすごい喜んでくださいました。そうしたらすぐに学校で案内を配布してくれました。

それから私は子どもの活動をするときは、必ず、一番に地域の連合町会長さん、次に、社協会長さん、そして、民生委員長と女性部長を押さえます。ハートフレンドでは学校に1泊して防災リーダー養成講座をしていて今年度5年目でしたが、最初は校長先生に反対

されました。だけど、それを説得したのは連合町会長やったんですね。それと、皆さん、学校に行くときは、一番大事なのは教頭先生です（笑）。校長先生から行ってはいけません。教頭先生がやりたいということは、校長は聞いてくれます。でも、校長先生がやりたいということで教頭先生が反対したらアウトです。だから、まず教頭先生と日ごろから仲良くなっておくことが大切です。

私は何も用事がなくても学校に行くんです。普段から「教頭先生、元気ですか。」って行くのは大事です。行政も同じです。行政もいきなり区長さんには行けません。今は、ハートフレンドで講演会をしても、区長、副区長、みんな来てくださいます。



子ども1泊防災リーダー養成講座にも区長は来てくれます。今だからです。15年前は区役所は住民票を取りに行くだけでした。区役所に行ったら、やっぱり担当の職員の方、窓口サービスをされている方と、まずあいさつですね。「いや、元気ですか、ハートフレンド、来ました。」「また来たんかい。」「みたいな。「もし困っていることあったら何でもします。」って、まず、相手が困っていることを聞いて、それに役に立つことをする。自分のことを言わない。予算を付けてとか、何かしてとか、後援名義を頂戴なんて最初は言わない。向こうが後援したくなるように持ってくる。それには実績を積むことです。

最初は仮設消防署を借りました。恩返ししたいって、みんなで思いました。だから、一生懸命実績を積んだら、いつか仮設消防署をハートフレンドにいただけるかなと思ったのですがだめでしたね（笑）。市民局長のところまでお願いに行きましたがアウトでした。でも、安全で事故がないようにして実績をひたすら積んで、区役所から、「ああ、地域に貸して良かったな、ハートフレンドが生まれて良かったな、東住吉区としても誇りに思うな。」と思ってもらうまで頑張りました。9年間行政は我慢してくれて、9年目に民家に移ったのですけれども、今はひたすら恩返しだと思っています。そういう気持ちでいてたら、あいさつの仕方が違う。「もうあの行政の人、嫌いやわ。」という顔と、「いや、恩返ししたいな。」という顔は違うでしょう？

そうしたら、いい関係が自然にできるんですよ。だから、もう、ハートフレンドは嫌だと思ふ人も、味方

に付けていくにはやっぱり笑顔ですよね。皆さんの笑顔が一番だと思います。

尾崎 ありがとうございます。教頭から攻めろというのは金言です、本当に。学校というところはそういうところなんです。私どもも、第二次の子ども読書活動推進計画を立てるときに、当然、学校の協力なしには成り立たない、勝手に図書館で計画を書いても、やってくれなかったら意味がないので、学校を口説くのに結局3年かかりました。

ですから、これからの、特に学齢期の子どもに対する読書推進という意味では、もう学校を味方につけないとどうしようもないので。でも、学校文化というのは、図書館文化とかなり、びっくりするくらい違いますので、その世界の中で図書館というのを認知してもらおうというのは、徳谷さんがおっしゃっていましたが、NPOの人も大変やけれども、われわれは同じような、行政の仲間や思われているんですが、図書館と学校もものすごい壁がありますので。そういったところをどうやってぶち破っていくかというようなところも、今後考えていかなければならないのかなというふうに思います。

そろそろちょっと次のテーマに行きたいなと思うんですが、昨日のご発表をお三方、角田館長も入れてですが、いろいろお聞きしていると、今回これは児童サービスの研究集会でそういう事例を発表していただいたはずなんですが、意外と高齢者とか、そういった方にこういうアプローチを今しているよというようなお話がいろいろな角度で出たと思うんです。

そういうものについて、そもそも何で最初に児童のことを始めたところが、高齢者の方向へ少し行くようになったのかということと、あるいはそういうことをやるようになったら、例えば、図書館との関係であるとか、児童サービスとの関係であるとか、いろいろな変化が出てきたんちゃうかとか、可能性がどうかとか。そういったことをちょっとお聞きしたいと思うんです。これ今後の、ひょっとしたら図書館の進むべき一つの方向性かもしれへんなというふうに僕もちょっと思いますので、ちょっとその辺を順番に聞いていきたいと思います。

渡邊先生のされている活動の中で、高齢者との接点の中で、どんなふうに進めてこられたのか教えていただけますでしょうか。

渡邊 私がボランティアを始めたのが40代で、そのころ仲間が60代の方とか、もう70、80代、うちのメンバーが一番ご年配の方はもう82歳ぐらいなんです。やはりボランティアをしていると声を出し練習するので、皆さんすごくお元気ですね。あと、学校に行くと

かの約束を絶対キャンセルしてはいけないので、体調をすごく考えます。だから、皆さんお元気だと思うんです。

でも、私もですけどもどんどん高齢化していくので、その辺はなかなか大変なんですけれども、私は、区の読み聞かせ事業に関わるようになって、そちらのボランティアさんは図書館のボランティアと全然違っていています。図書館のボランティアは学校とかに行くので、やはりある程度の経験とか、素質とかも必要ですよ。やはり、幾ら練習してもボソボソではやっぱり声が通らなかつたりするので。図書館のボランティアは、やはり責任感を持って約束したらきちんと学校とか、特に子どもたちに向かって活動するんですけども、そこには先生がいらっしゃって、満足していただけないとやはり次に声が掛からなくなるということにつながるので、私たちは学校に行くときは、本当にやはりプログラムづくりとか、絵本選びとかは、すごい大切にしています。

でも、区の読み聞かせボランティアは、研修はもちろんするんですけども、区民の方、特に子どもさんに寄り添って身近で本を読んでくれる人をたくさんつくることが目的なので、お母さんが子どもに読む、おばあちゃんが孫に読むっていうよ



うな感覚ですので、もちろん基礎的な研修とか、練習はするんですけども、図書館のボランティアさんほど厳しくは言わないんですね。「ドタキャンもオーケーよ。」って、にこにこ笑って、「あっ、いいですよ。」って、次につなげるためにやっています。

その中で気付いたのが、ボランティアさんにもやはりいろいろいて、すごいスキルの高いものを求めている学校で活動したい方。あと、読み聞かせてブームやから、ちょっとしてみたいなって、そんな感じとか。あとはもう本当に年に2回ぐらいだけでいいけれども、ちょっと本当に時間のあるときだけしたいとか、いろいろなボランティアがいます。そういうボランティアのそれぞれどれがいい悪いじゃなくて、やはり、その人たちに合った場所、需要と供給と私は思っているんですけども、するとどんどん裾野が広がって行って思います。

でも、そこはやはり、コーディネーターの人が考えて、その人たちが喜んでボランティアをしてくれる場所と、頼んだところが喜んでくれる内容というのはと

っても大事で、すると、高齢者の方がそういうボランティア活動に入って行くのに抵抗がなくなるのかなというふうにすごい思います。

尾崎 ありがとうございます。

加藤先生は、大人向けとか高齢者向けのひろばや講座もやっておられるのですけれども、そういった場を通じて、どんなふうに思っていますか？

加藤 高齢者に「えほんのひろば」をするときは、大体高齢者はもういすに座ったら立ち上がりにくいじゃないですか。面展台上に本を並べてもそこまで取りに行かないのです。だから、机の上に、ばさっと本を広げるんです。20冊ぐらい、面展台上に載せる分を本のテーブルの上に載せて、それで、「どうぞ、好きなのを自由に見てください。」って言って。必ず何人かが、「私、本、嫌いやねん。」って言うんですけども、『野の草花』（古矢 一穂/ぶん 福音館書店）のきれいな写真集を見て、「私は花、好きやねん。」って言った途端にずっと広がっていく。そんな面白い現象があって。

だからTPOなんです。「えほんのひろば」を必ずメインにしないといけないわけではなく。今、渡邊さんからおっしゃったように、今ボランティアはものすごく努力なさっていて、それで、読み聞かせという文化も私は大事だと思うんですけども、私もボランティアの養成講座に呼ばれて、一番声を大きくして言うのは、「あなたの発表会になっていますよ。あなたの発表会に子どもが付き合っ、子どもがボランティアで聞いてますよ。」っていうふうに言うんです。

だから、ドキドキするんやったらやめて、楽しかったら楽しい気持ちを伝えてあげて。でも、いろいろいらっしゃいますもんね、渡邊さん、ご苦労があると思います。だから、自分の趣味で子どもを付き合わさないでってびしっと言います。でないと、子どもが気の毒で。何か本当に我慢して聞いている。それだけはやめてあげてほしいな。

だから、勘違いしているボランティアさんも山のようが増えていくということですね。そうでもないですか（笑）。

渡邊 勘違いされているボランティアさんは、その勘違いしてもいい場所で活動できれば。

加藤 本音はそうなんですね。そういうふうにはっきり言わないと、逆に本当にそういう人たちがばかりの塊になっちゃって、子どもを集めて黙らせて座らせて、それで静かに聞かないって怒り出すんですね。「いや、それはあなたが悪いんでしょう。あなたがこの本を読むって決めていくからでしょう。」だって、子どもっ

て生ものやから、どうなるか分からんし、高齢者も生ものなのでね。

だから、高齢者に対しても、例えば、この人だったら旅行の本だろうな、とか考えて、老人ホーム、デイサービスでひろばをするときには旅行の景色や風景の本を結構持っています。それと食べ物や器。ぱらぱらとめくって、「ああー」って言う、その一瞬を楽しんでもらうっていう選書の仕方をしています。

だから、さっき、どこで本を選ぶかという質問の答えで言いそびれたんですけども、リストを配ってもらっていますので、それを参考にさせていただいて、基本、字の多いのだけはやめてあげてください。字が読めない子には恐怖なんです。ぱっと見て字があるだけで、もう本当に体がすくんでいるです。

「字を読まんでいいよ。」って言うても、字があったらしんどいので、字のない風景写真を見せてあげてほしいです。高齢者のほうが手ごわいですが、逆に面白いです。それで、高齢者と子どもと一緒にひろばをしているところもあります。

尾崎 そうですね。うちの市なんかでも、高齢介護室という高齢者の所管があるんですけども、そこが図書館とチームを組んで、高齢者の絵本の読み聞かせをやっているんですけども、やっぱりすごく楽しみにされています。聞くことについては、子どもに対しての活動をされているベテランの方が行って読み聞かせをされますので、上手に聞いてくれるんです。ただ、その中で、私もやってみたいわっていう高齢者っていうのは、やっぱり限られてくるんですね。たくさんいる中で、本当に一握りの方が、私もやってみようかなというふうになります。

高齢者の方にいろいろ働きかけると、即全部リターンしてくるわけではないんですけども、一つの対象として高齢者の方も今後はあるのかなというふうに思います。

徳谷さんも、「おとなのてらこや」ではいかがですか。

徳谷 ハートフレンドが活動を始めたのが15年前。その後「おとなのてらこや」を始めました。実はある町会長から叱られて始めたものなんです。その町会長はいつもうちへ来てくださったなら、私はお菓子とお茶を出していたんです。その方に道で会ったときに、「また来てくださいね。」って言ったら、会長が、「うーん、ハートフレンドな、居づらいねん。」とおっしゃったのです。「ええっ、この間お菓子を出したのに。」と思って。「何でなんですか。」ってつい聞いてしまいました。そうしたら、「子どものことしかしてへんやろう。」って言われたんです。「お客さん扱いでは

面白くないねん。」って言われたのです。私たちは、子ども会をしながらハートフレンドを始めたときに、子どものためにしているからそれでいいって、立派やって自分たちで思っていました。ところが、地域の人から見たら、「桑津こどもの家ハートフレンド」ってできているのに、「わしらのこと何もしてくれない。」って町会長が思っているということは、ほかの人はもっと思っている。それで慌てて、みんなで相談して、どうしようって悩んで始めたところ、ある人が言ったんです。子どもたちは100マス計算とか、漢字とか音読しているでしょ。あの教材、そのまま使っておとなのてらこやをしたらどう？」っていうことになりました。専門家にもいろいろ相談して1時間半のプログラム、100マス計算から始まりました。

これを連合町会長に相談したら、「面白いな、俺行くわ。」って。教頭先生に言ったら、「面白そうやな。」初めは連合町会長、民生委員など偉い人ばかり来ましたが、そういう人は3年でやめました、「賢くなった。」と言って（笑）。

今は本当に、「あの人が心配や。」とか、「この人が来てほしいな。」という人が来ています。そこで、皆さんにつぶやくんです。「今度、子どもまつりするんですけどね、子どもたちね、コーナーを4つ出すんです。でも、5つ目のコイン落としがね、人、足りないんですよ、困っているんですね。」って言うんです。来てくれとは言わない。困っているんですねと言うんです。

そうしたらね、「困っているのか。いつや、それ。」「今度の日曜なんですよ。」「あっ、ほな、わしは空いているわ、コインを落とす、それだけやろう、行こうか。」って、どんどんずるずるとなります。うちのハートフレンドの活動を根底で支えているのは地域のシニア世代、「おとなのてらこや」の最高年齢は82歳です。

だから、「おとなのてらこや」の利用者さん、参加者さんが子どもの「てらこや」の先生をしている。子ども防災リーダー養成講座を支えている。乳幼児ひろばの一時預かりの保育もしている。若い人も来ているんですよ。でもうちも高齢化しています。理事も15年たったら、みんな高齢者です。

若い人も20人ぐらい入った、でも、若い人は夕方出られないんです。土日も自分の子どものことで出られない、その若い人がやりにくい部分を私たちシニア世代の人が埋めています。夏休みや冬休みは活動を休ませてほしいと言うお母さんはいます。「休んでいいよ。」って答えます。働きやすいボランティア活動をしています。

それを私たちのような、ちょっと時間のあるシニア世代が埋めているという感じです。だから、「おとな

のてらこや」はお勧めです。1時間半プログラム、幾らでも提供します。ぜひ、やってください。

尾崎 どうです、やってみようかなって思いましたか？

先ほど、武田先生のお話の中でも、三鷹の絵本館の設立に絡んだ話で、いわゆる、子どもから大人まで全ての人が出てというような話が出ていたと思います。もちろん、絵本ですから、子どもってというのは、まず前に出てくるんですけども、大人までいろいろな年代を含めてということで、その辺、三鷹ではどんなふうを考えて進んでいったのかというのを武田先生にお伺いできたらな、と思うんですが。

武田 三鷹の絵本館の場合、絵本をキーワードにはしているんですが、絵本にこだわっていないってところがありまして、むしろ、文化を伝えていく、高齢者の方たちが持っているさまざまな文化を、絵本がある



場所にみんなが集まってくるということを利用して伝えていくというようなことを、その回りの自然も全部含めた中で、何ができるか検討しています。

だから、例えば、絵本に年中行事なんか書いてあれば、それと、実際にそれを外でやってみるということをつなげていくとか。そういう体験と絵本とがどうつながっていくかみたいなのところに広がっていくってようなこととも実際にはできるような場になっていたというのが、おそらく特徴だろうなというふうに思っています。

今、どんどんと新しいものに改革されていく中で、日本の子どもが育っていくために必要であった文化というのが急速に失われているんですね。それがもう見えなくなってしまいう時期にもう来てしまっている気がします。地方によっては、まだそれが残っていて、しかも高齢者の方たちの記憶の中にしかないんですが、それを若い人たちに伝えていいのかどうか、高齢者の方たちがもう引いちゃっているっていう感じがしています。

そういった文化をどうやって伝えていくのか、これは絵本というか、図書館だけではないのかもしれないんだけど、さまざまな知恵の宝庫である図書館と

いうところが、高齢者の持っているそういう体験とか知恵というものとつながって、何か引き出していくような活動というのがこれから工夫されていかないと。私も今はもう55で高齢者に近づいてきていて、それで、今後半分以上の人たちが高齢者になる時代です。今皆さんは高齢者って言うときに自分を入れてます？

あと5年、10年たてば、もう私たちが高齢者になっていくというときに、私たちがいいおじいさん、いいおばあさんになるための準備というのを始めなくてはいけないのです。ブックスタートに関連して2,3回呼ばれて話をしたのですが、6人位の方が私の研究室に押し寄せてきて、話をしようってなったときに、一番話題になっていたのは、そういうボランティアの方たちにどういふふうに対応したらいいかっていう話だったんです。

ある意味ちょっと迷惑ですっていふふうに使われたり、この人たちにどうやって対応したらいいんだろって思われかねない高齢者を、私たちがつくっていくとか、私たち自身がなるということの準備を、もうそろそろ始めていかないと。この読み聞かせみたいなものを通してそういう方たちが元気になっていくというのと同時に、その方たちと一緒に私たちもどう育っていくかということを考えていかないと、こういった活動自体が停滞していくことになるんじゃないかなと思いつつ、ちょっと伺っています。

そういう意味では、彼らの持っている文化をどうやって活用していくかというのがキーになってくるのかなと思いました。

尾崎 どうもありがとうございます。確かに、異年齢の中で受け継がれていくようなものというのがずいぶん希薄になってきてしまっていますし、そういう人たちの触れ合える場というか、交流の場所に図書館がなっていける可能性はかなり高いですので、そういった点も、われわれも意識して今後やっていかないといけないんじゃないのかというふうに思います。

なかなか、今回事例を報告いただきました先生方も、それぞれのお立場でいろいろな切り口で頑張っていたに違いないわけなんですけれども、その中でも、人間はやっぱり、先ほど加藤先生もおっしゃっていましたが、生ものなので、いつまでもやっていけるわけではないんだよと。世代交代をしないと、みたいなことがあったりとか、ボランティア団体も高齢化して大変なんやとか、いろいろなことも出てきていると思います。

後継者不足でとかそういう中でも、やはり、高齢者は高齢者でも新しい高齢者というんですか、僕ももうあとすぐ高齢者になるんですけれども、そういった人が次のまた担い手になっていくような形でつながって

いっても全然差し支えないと思いますので。いろいろな意味で新陳代謝ができていくような団体でお互いありたいですし、図書館もそれをどうやってサポートしていくかというのも大変重要なことというふうに思います。

今回時間もそうありませんし、つたない司会であんまり大していい話にならなかったかもしれませんが、今日はこの辺で終わりにしたいと思います。

ありがとうございました。（拍手）



平成 29 年度全国公共図書館研究集会

(児童・青少年部門)

報告書

平成 30 年 11 月 28 日発行

編集・発行

平成 29 年度全国公共図書館研究集会 (児童・青少年部門) 実行委員会
(〒550-0014 大阪市西区北堀江 4 - 3 - 2 大阪市立中央図書館内)

TEL : 06-6539-3326 FAX:06-6539-3336